

第64集

令和元年度

研究紀要

研究主題

深い学びを実現させる「問い」の工夫

大分大学教育学部附属中学校

はじめに

今年度は、平成から令和という新たな時代を迎え、本校においても創立70周年という節目の年でありました。記念式典、記念誌作成など様々な記念事業を企画・開催する中で、同窓会や本校で勤務された先生方で構成される同人の方々とお会いし、また過去の研究や本校の歴史に触れ、先人の歩みと業績を学ぶ機会を数多く持つことができました。

今まで積み上げてきた伝統から、未来へ続くための力を生み出し、身に付けてほしいという願いから、「創造」という言葉を常に学校では語り掛けてきました。

これは、生徒に語った一節です。

「創造」とは、「既知なるものを組み合わせ、未知なるものを創り出す」ことです。既知なるもの、つまり、皆さん一人一人がすでにもっている様々な知識やスキル、経験や伝統などをもとに、皆で集まり、議論し、考えあう中で、豊かな発想や新たな見方や考え方となる、未知なるものを創り出す力を高めてください。

中庭にある智の泉のように、知識や知恵、想像力を湧きあがらせ、互いに学びあい高めあってもらいたいと願っています。

さて、本校では昨年度より、新学習指導要領の謳う「主体的・対話的で深い学び」を実現すべく研究をすすめてまいりました。

昨年度は、「主体的・対話的で深い学びを生み出す単元構想」をテーマに、教科における「見方・考え方」をはたらかせ、単元や題材のまとまりの中での授業デザインを行いました。

2年目となる本年は、「深い学びを実現させる『問い』の工夫」を研究テーマとして、主体的な学び、対話的な学び、深い学びを生み出すための「問い」に着目し、昨年度の研究をより焦点化し前進させました。単元や授業のどの場面に、どのような「問い」を設定するのがよいのか。主体的・対話的で深い学びを生み出すためにどのような「問い」が効果的なのか。各教科で研究・検証を行ってまいりました。

「あなたの問いは、子どもに届いていますか？」本校の公開研究会の講師である、国士舘大学 澤井陽介教授の言葉です。授業を中心とし、学習者の思考を第一と考え、これまでの研究や、一人一人の実践などをもとに、教員同士が集まり、議論し、考えあう中で、よりよい授業を「創造」しようと模索してまいりました。皆様にご忌憚のないご意見を頂ければ幸いです。

最後になりますが、研究推進に当たり、ご指導・ご助言を賜りました大分県教育庁及び大分大学教育学部の皆様を始め、様々な面でご支援を頂きました関係の皆様にご心より感謝を申し上げます。

令和2年3月

大分大学教育学部附属中学校

校長 森脇 郷子

目 次

1 研究概要	1
2 教科の実践とまとめ	
(1) 国語科	17
(2) 社会科	28
(3) 数学科	40
(4) 理科	56
(5) 音楽科	66
(6) 美術科	72
(7) 技術家庭科	77
(8) 保健体育科	88
(9) 外国語科	98
(10) 道徳科	113
3 全体総括	118

1 研究概要

I はじめに

本校は、平成 26 年度から、国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議の答申を受け、地域の課題解決の指針を示す県下のモデル校としての役割を軸に研究をすすめることとした。同年は「学力の 3 要素」に着目し、「学ぶ意欲を持続できる局面学習のあり方」をテーマに研究をすすめた。平成 27 年度からは「学ぶ意欲の持続を図る学びのイメージ」をテーマに「21 世紀型能力」の育成を目指した。平成 28 年度は「質の高い深い学び」を実現する教育課程の在り方を研究し、総合的な学習の時間の活用や学習目標の設定、6 期の PDCA サイクルによる学習者とともに創る教育活動の充実を図った。平成 29 年度は全教科で小中連携を試み、「資質・能力を育成する『深い学び』について」研究し、主体的・対話的で深い学びを生み出す授業づくりの要素を研究してきた。そして、昨年度はこれらの知見を基に「『主体的・対話的で深い学び』を生み出す単元構想」をテーマに単元全体を構想し、それぞれの授業を有機的に結び付け、主体的・対話的で深い学びを生み出す上で必要な要素を模索した。

II 研究の経緯

(1) 昨年度の研究より

昨年度の研究により下記のことが明らかになった。

本校研究紀要第 63 集より

- 単元のゴールを明確にし、見通しをもたせ、他者との協働を図れる言語活動を取り入れることが、学習者の意欲的な学びにつながる。しかし、ねらいと学習活動が合致していなければ、活動が目的となってしまう。
- ねらいに迫る価値のある対話のためには、「明確な問い（課題）」を学習者に与えることが必要である。
- 単元の中に、学習したことを生かせる場面を設定し、獲得した知識を概念化させることが深い学びにつながる。 【要約は研究部による】

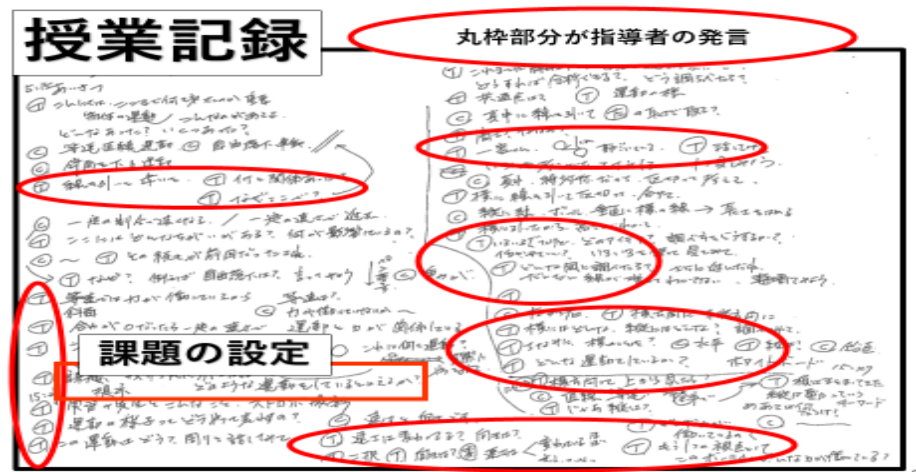
授業をひとまとまりの内容で単元として仕組む単元構想が、学習者が見通しをもち、目標に向かっていくために有効であることがわかったが、それと同時に、「めあて・課題」「振り返り・まとめ」の整理と質の向上に取り組む必要性が浮き彫りになった。

(2) 授業記録より

また、授業記録を取り分析してみると、課題を設定する場面、設定後、活動中、まとめの場面と、授業者が発問を繰り返すなど言葉を重ね、学習課題が学習者に届いておらず、指導者と学習者、学習者同士で共有できていない現状が明白になった。そこで、今年度は「深い学びを実現させる『問い』の工夫」をテーマとし、どのように学習者にめあてや学習内容を届け、「主体的・対話的で深い学び」を実現させ、育成すべき資質・能力を養うかを研究することとした。

[校内研の1時間の授業記録]

※丸枠の部分が指導者の発言



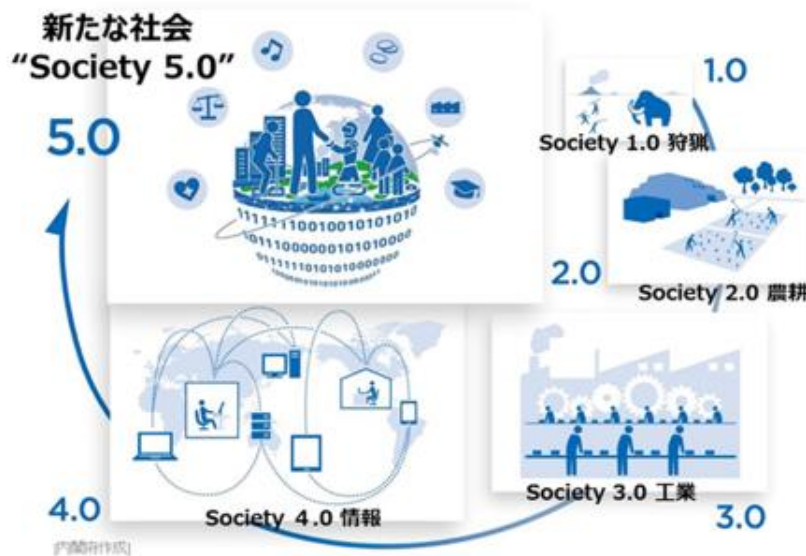
III 研究主題について

(1) これからの社会と求められる資質・能力

現在社会は大きな変革期にあり、「コンテンツ・ベースの学力観」から「コンピテンシー・ベースの学力観」への転換に迫られている。学習指導要領解説総則編には、生産年齢人口の減少やグローバル化の進展等の社会構造の変化、人工知能 (AI) の飛躍的な進化に代表される技術革新によって、予測が困難な時代となっていると述べられている。そして、急激な少子高齢化が進む中で成熟した社会が成立している日本の学校教育では、学習者が様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められているとある。

ポスト知識基盤社会として、人工知能 (AI)、ビッグデータ、Internet of Things (IoT) 等の先端技術により様々な課題の解決が目指される「超スマート社会」とも言われる Society 5.0 が訪れようとしている。それに伴い新たなサービスやビジネスが創出され、私たちの生活は劇的に便利で快適になっていく。しかしそれは、人類がこれまで経験したことのない急激な変化が目前に迫り、新たな課題に遭遇する蓋

然性も高い。例えば、AIの進化は少子高齢化による労働人口の減少の解決手段になり得るとともに、逆説的に私たちの現在の仕事を奪うことも考えられる。このような時代にあつて、様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、概念的知識を繋ぎ合わせ、新たな価値や目的を創造していく力が求められる。



狩猟社会 (Society 1.0)、農耕社会 (Society 2.0)、工業社会 (Society 3.0)、情報社会 (Society 4.0) に続く、新たな社会を指すもので、第5期科学技術基本計画において我が国が目指すべき未来社会の姿として初めて提唱されました。

[内閣府ホームページより]

(2) 本校の目指す生徒像と取組

そこで、このような時代に求められる、生きて働く「知識・技能」、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」といった資質・能力を身に付け、主体的に学び続ける学習者の育成が必要となる。この資質・能力は本校学校教育目標「豊かな学びを基盤とし、高い志と確かな人間力を持つ 実践力に富んだ生徒の育成 ～ 高い学力・深い愛の心・堪え忍ぶ力～」の実現に不可欠な資質・能力であり、次の2つの活動を重点的に行うことで育成を目指している。1つが、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けての授業改善に取り組むこと、もう1つが、1年間を6期に分けて学校教育目標の段階的な達成をマネジメントする6期コンセプトと生徒会活動を連動させ、生徒会活動を充実させることである。

[本校の目指す生徒像と取組]

育成すべき汎用的な資質・能力

- 生きて働く知識・技能
- 未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力
- 学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等

学校教育目標

豊かな学びを基盤とし、高い志と確かな人間力を持つ実践力に富んだ生徒の育成～高い学力・深い愛の心・堪え忍ぶ力～

主体的・対話的で
深い学び

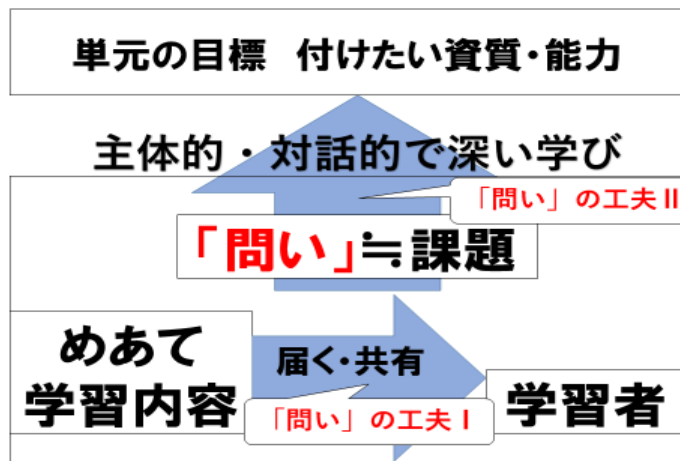
6期コンセプトと連動した
生徒会活動の充実

6

(3) 「問い」の定義

「子供は『問い』で学びを進める」、「子供が主体的に学ぶというのは、自分なりの問いを指標にして、自分の活動の答えを生み出す試み」と澤井教授が著書『教師の学び方』の中で述べているように、問いとは本来、学習者がもつものであり、学習者が「なぜだろう?」、「どうしたらいいのだろう?」と、本当に考えたい、やってみたいと思う、学習者から生まれるものだと考えた。実際の中学校の授業では、学習課題そのものが問いになったり、学習課題から問いを生み出したりすることも多く想定されるため、学習者に届いた学習課題も問いに含めることとした。つまり、めあてや学習内容が学習者に届き、共有された状態を「問い」が生まれた状態であり、学習者が課題を引き受けた状態であると定義した。

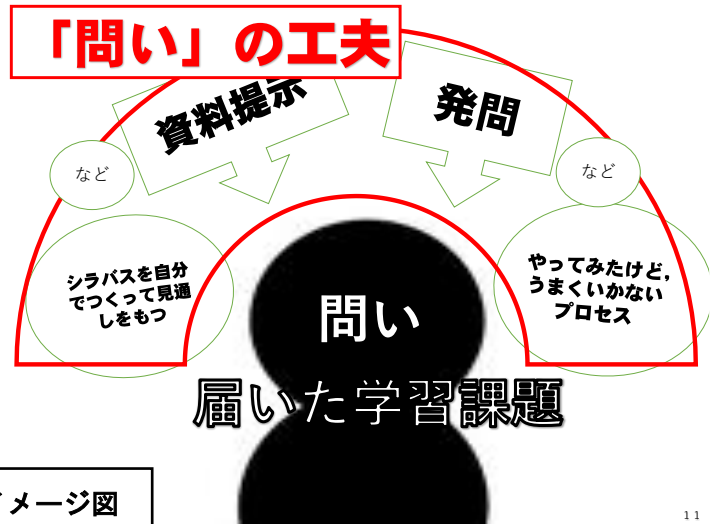
[資質・能力の育成と「問い」の工夫との関係]



13

(4) 「問い」の工夫の定義

「課題が子供たちに届いていますか？」と澤井教授は著書の中で我々に問いを投げかけているが、学習者はなかなか学習課題をつかめないでいる。それは、先述した授業記録の例からも読み取れる。「問い」を生み出し、追究することが主体的・対話的で深い学びの実現には不可欠である。そこで、授業のねらいを達成するために、授業者が学習者に与える手段や方法などの手立てやプロセス(適切な資料提示や、発問、学習の計画を自分たちでつくり、一度やってみて、もう一度考え直したり等)を「問い」の工夫と定義し、研究をすすめることとした。



- ・「問い」の工夫Ⅰ
- ・「問い」の工夫Ⅱ

さらに、「問い」の工夫をⅠ、Ⅱに分けることにした。めあて、学習内容が学習者に届き、共有させ、主体性を生むための手立て・プロセスを「問い」の工夫Ⅰとし、深い学び(単元の目標の達成)に迫るための手立て・プロセスを「問い」の工夫Ⅱとした。単元の中に、この「問い」の工夫ⅠとⅡを意識的に位置付けることで、主体的・対話的で深い学びが実現し、資質・能力の育成に繋がると考えたからである。

「問い」の工夫Ⅰ、Ⅱの定義

「問い」の工夫Ⅰ?

めあて、学習内容が学習者に届き、共有させ、主体性を生むための手立て・プロセス

「問い」の工夫Ⅱ

深い学び(単元の目標の達成)に迫るための手立て・プロセス

IV 研究の方法について

(1) 単元について

①大分スタンダード

まず、本校は、「主体的・対話的で深い学び」を通して、汎用的な資質・能力の育成を目指す、大分県教育委員会の新大分スタンダードをベースに研究をすすめている。

新大分スタンダードのすすめ

「新大分スタンダード」で主体的・対話的で深い学びの実現を

「学びに向かう力」と「思考力・判断力・表現力」を育成する
ワンランク上の授業を目指して

1 1時間完結型

主体的な学びを促す「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」

- * 学習の見通しをもたせ、意欲を高める「めあて」
- * 学びの成果を実感し、学んだことや意欲・問題意識等を次につなげる「振り返り」
- * 追究すべき事柄を明確にする「課題」、追究した結果を明確にする「まとめ」

2 板書の構造化

- * 思考を整理したり促したりする板書、思考の過程を振り返ることができる板書


3 習熟の程度に応じた指導

- * 「**具体的な評価規準**」に基づく確かな見取り
- * 「**努力を要する状況**」の児童生徒に対する手立ての工夫

4 生徒指導の3機能を意識した問題解決的な展開

主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)を創造する学習展開

- * 各教科等の**見方・考え方を働かせて展開する「課題設定⇒情報収集⇒整理・分析⇒まとめ・表現・交流⇒振り返り・評価」**等の学習過程の繰り返しの中で行われる
・ 知識の関連付け、問題の発見・解決、情報を精査した考えの形成、思いや考えに基づく創造
・ 様々な人との対話・協働による自分の考えの深化・拡充



安心して学べる
「学びに向かう学習集団」

「新大分スタンダード」による授業改善は、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた「アクティブ・ラーニング」の視点による授業改善と重なります。

○主体的・対話的で深い学びについて、中央教育審議会答申(H28.12)には、「単元や題材のまとまりの中で、例えば主体的に学習を見直し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、学びの深まりを作り出すために、子供が考える場面と教員が教える場面をどのように組み立てるか、といった視点で実現されていくことが求められる」とあります。
「新大分スタンダード」においても、単元や題材等を問題解決的な展開にするよう改善を求めています。

「新大分スタンダード」で目指す授業

- (1) 単元や題材の「ねらい」に即した「めあて」の設定では、児童生徒自身が学習の見直しをもち、意欲を高めることを重視しています。
- (2) 「めあて」に即した「振り返り」を設定することで、本時の学びの成果等を実感し、学んだこと等を次の学びにつなげるようになることを重視しています。
- (3) 主体的・対話的で深い学びを創造する学習展開では、知識の関連付け、問題の発見・解決、情報を精査した考えの形成、思いや考えに基づく創造などを実現することを重視しています。

平成31年3月(第3版)
大分県教育委員会

**「新大分スタンダードのすすめ」
大分県教育委員会ホームページ参照**

②昨年度の研究より

また、昨年度の研究より次の(1)～(5)に留意して単元構想を行うことの必要性が分かった。

- (1) 付きたい力の明確化
 - (2) 付きたい力を育成する学習展開
 - (3) 付きたい力が付いたかを見取る振り返りの工夫
 - (4) 「主体的・対話的で深い学び」を生み出す指導の工夫と明確化
 - (5) 単元構成を分割して考え、指導計画を立案する

※詳細は「紀要第63集」参照

(2) 授業公開と
事後研究会

県下のモデル校としての役割として、昨年度に引き続き、月に一回程度、校内授業研究会を一般公開した。授業後には、NITS 独立行政法人教職員支援機構の研修モデルを参考に事後研を行った。他校の先生方に参加していただき、活発な議論をすることができた。授業記録を参考にしながら、学習者の学びの姿を出し合い、めあてや課題が適切であったか、教材や発問が効果的であったか等を議論し、私だったらこうするという代案を出し合うワークショップや全体研を行った。その際、文部科学省調査官や大分県教育委員会、大分市教育委員会より指導主事を招き、指導助言をいただいた。また、大分大学の教授より教科の専門的な知見を教授していただいた。さらに、公開研究発表会では、国土舘大学の澤井陽介教授を講師として招き、授業改善についての指導助言をいただいた。

[実施した教科]

- 5月 理科 / 6月 英語 / 7月 美術・総合的な学習
- 9月 **公開研究発表会**
国語・社会・数学・理科・英語・家庭・音楽・体育
- 10月 国語 **FU研修**国語・社会・数学・技術・家庭・美術
- 11月 道徳・数学 / 1月 英語（外国語セミナー）

公開校内授業研修会

月に一度程度の公開授業 → 事後研

大学の教授
指導主事
他校の先生方



資質・能力を中心に、有効だった手立て、課題、代案を出し合った。

[校内研における公開授業・事後研の様子]

事後研の様子



授業記録



(3) 「問い」の工夫

① 単元構想メモ

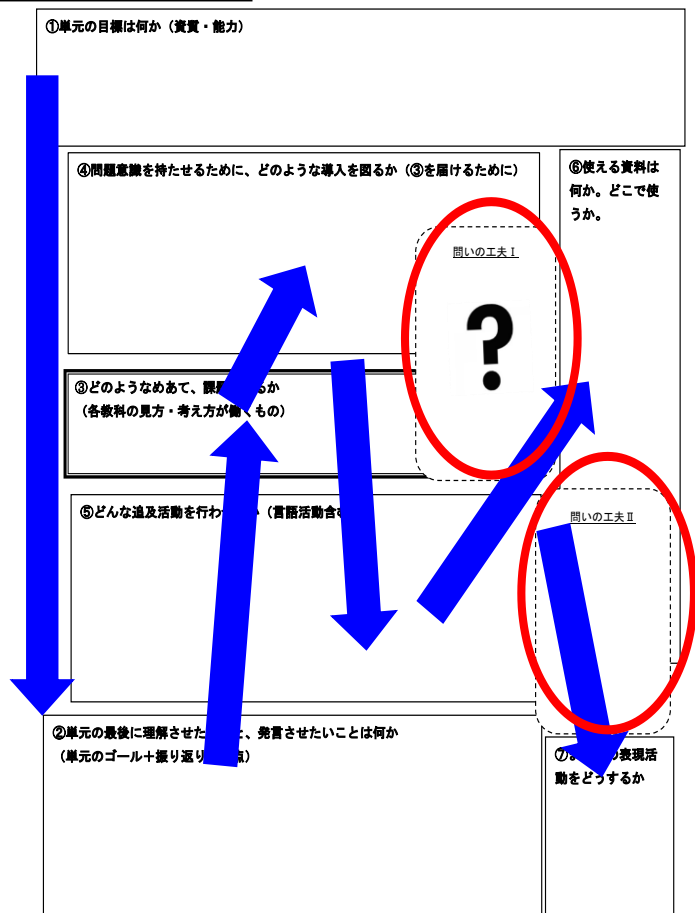
今年度はまず、澤井教授の著書を参考に「単元構想メモ」を用いて、単元を構想し、授業づくりを行った。単元の目標（育成する資質・能力）を出発点として、次に単元のゴールの学習者の姿と順に考えることで、単元の目標の達成に一貫して向かう単元や授業のイメージづくりに繋がった。

そして、この単元構想メモに「問い」の工夫Ⅰ、Ⅱを位置付けた。「『主体的・対話的で深い学び』を生み出す指導の工夫と明確化」と昨年度の単元構想の柱（4）にあるが、これまでの研究は「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」と分けて考える側面があった。単元構想メモを用い、その中に「問い」の工夫Ⅰ、Ⅱを位置付けることで、単元の目標に迫る手立てやプロセスが明確になり、単元を通して主体的・対話的で深い学びが有機的に結びついた授業実践に繋がったと考える。

[単元構想メモにおける思考プロセス]

単元構想メモ

※澤井先生の著書より作成



単元構想メモ

※澤井先生の著書より作成

単元「 _____ 」

①単元の目標は何か（資質・能力）	
④問題意識を持たせるために、どのような導入を図るか（③を届けるために）	⑥使える資料は何か・どこで使うか
③どのようなめあて、課題にするか （各教科の見方・考え方が働くもの）	問いの工夫Ⅰ
⑤どんな追及活動を行わせるか（言語活動含む）	問いの工夫Ⅱ
②単元の最後に理解させたいこと、発言させたいことは何か （単元のゴール+振り返りの視点）	⑦まとめの表現活動をどうするか

②指導案における「問い」の工夫の位置付け

上記をもとに、単元指導計画では、本単元で育成したい資質・能力を明らかにし、「単元を通したためあて、課題」を設定した。これにより学習者がゴールイメージをもって学習に取り組むことができる。そして、単元指導計画の中に、「問い」の工夫Ⅰを位置付け、学習者が見通しをもち、主体的な学びが実現できるようにし、深い学びに向かう手立てやプロセスの中心として「問い」の工夫Ⅱを設定した。そして、「問い」の工夫によって期待される学習者の振り返りを可視化することで、単元を具体的にイメージし、単元の目標の実現に迫れるように試みるとともに、実際の学習者の姿と比較することで、「問い」の工夫の効果を検証できるようにした。

単元指導計画の見方

単元を通したためあて、課題

5 単元指導計画（総時数 6 時間）

単元を通したためあて「不平等感がない世の中にするには何が必要かを考える。」

時間	めあて	学習活動	問いの工夫	振り返り	評価 規準	評価方法
1	不公平感を感じることについて考えることができる。	不平等感に関するアンケート、社会背景について考える。	「問い」の工夫Ⅰ 世界と学習者の考えの一致から単元のめあてを設定したり、自身が課題として、学習の振り返りすること（シラバス化）、学習者の意欲を高める。	色々な不公平感を考えることができた。次はその背景を考えたい。	ア	1枚ポートフォリオ
2	基本的人権の尊重の内容を理解できる。	基本的人権について、知る。	「問い」の工夫Ⅱ シラバス化に、学習者の振り返りから疑問を抽出し、そこから次のめあてを設定したり、主体的な学びを生む。	細かく基本的人権について理解したので、次はそれに従って、解決策を考えたい。	エ	
3	不公平感の原因・背景の情報を調査することができる。	不公平感の原因・背景の情報を収集する。	「問い」の工夫Ⅲ 自分主体の調査を行う。	自分で調査することができたので、みんなと共有したい。	ウ	
4	より良い社会をつくるために大切なことを考えることができる。	集めた情報をみんなで共有し、様々な角度から考察する。	「問い」の工夫Ⅳ 調べたことや考えたことを比較させたり、矛盾した内容の資料を提示した。	より良い社会づくりのためには、個人の尊厳を意識する	イ	

「問い」の工夫に対して、期待される学習者の振り返りを位置付けている。

単元における「問い」の工夫をもとに、単元における「問い」の工夫の1つの要素として本時案にもマイクロな「問い」の工夫を位置付けている。

本時案の見方

(3)本時における「問い」の工夫

前時の振り返りよりめあてを確認することで、主体性を生む。マトリクス等の思考ツールを用い、調べた内容を比較させることで背景・原因を捉え、根拠とすることで学習者の思考を促す。

(4)展開

学習活動	時間	指導	期待される学習者の反応	備考・評価
1 前時を振り返り、本時の課題を確認する。	3	○前時の学習者の振り返りの中から、本時につながる内容のものを紹介し、本時のめあてを確認する。 「みんなが不平等・不平等を感じているが、解決する術を話し合いたい。」「不平等感の解決の方法を考えるために、みんなの意見を聞きたい。」という思いを全体で共有する。		
めあて：より良い共生社会をつくるために、意見を交流し、自身の考えを深めよう。				
課題：どうしたら不平等感を解消できるだろうか。				
2 各自で不平等感を感じることについて調べたことを共有する。	15	○自分が調べた不平等を感じる事象について、「どんな場面で」「どんな権利が保障されていない」「原因」という観点でグループに情報を共有させる。		
どんな場面	「男なのに」「女なのに」など	左きき配慮されていない物事	障がい者への配慮	格差社会
どんな権利	平等権	平等権	平等権・社会権	社会権
背景・原因	昔からの意識が残っており、それが現代まで続いている。	多数派に合わせ、少数派への配慮がなされていない。	多数派に合わせ、少数派への配慮がなされていない。	是正の仕組みが格差を解消できていない。是正の制度を知らない。
3 班で解決策を考え、ホワイトボードを用い、クラスで共有する。	27	○マトリクス等の思考ツールを用い、背景・原因を比較させながら不平等な事象の解決策について考えさせる。 ○すべての個人がお互いに「障壁」をなくすことを「個人の尊厳」というと	・国民が意識できていないので、国民一人ひとりの意識が変わらないといけない。 ・少数派の想いを具体化するべきだ。	

「問い」の工夫の部分は点線の枠で囲っている。

V 6期ステップの取組と「生徒とともに創る授業」の実現に向けた取組

(1) 6期ステップの取組

本校は平成30年度より、1年間の6期に分割して、各期でPDCAの4段階を繰り返すことで、学校教育目標の掲げる資質・能力の育成を目指している。

<6期ステップの意義>

- 学校行事や教育活動の効果をみつめなおし、意義ある活動に高めることが期待できる点
- 学校行事や教育活動、生徒会活動を同一の資質・能力をつけることを目標にしてリンクさせることで、相乗効果を生み出すことが期待できる点
- 大分県教育委員会中学校学力向上対策【3つの提言】「生徒とともに創る授業」の実現、県のモデル校としての役割を果たすうえで、県教育委員会が求める「学校が定めるめざす生徒像を生徒と共有し、生徒の授業評価を基とした授業改善を図ること」を具現化したものとして、6期ステップの取組は適合すると考えられる点。

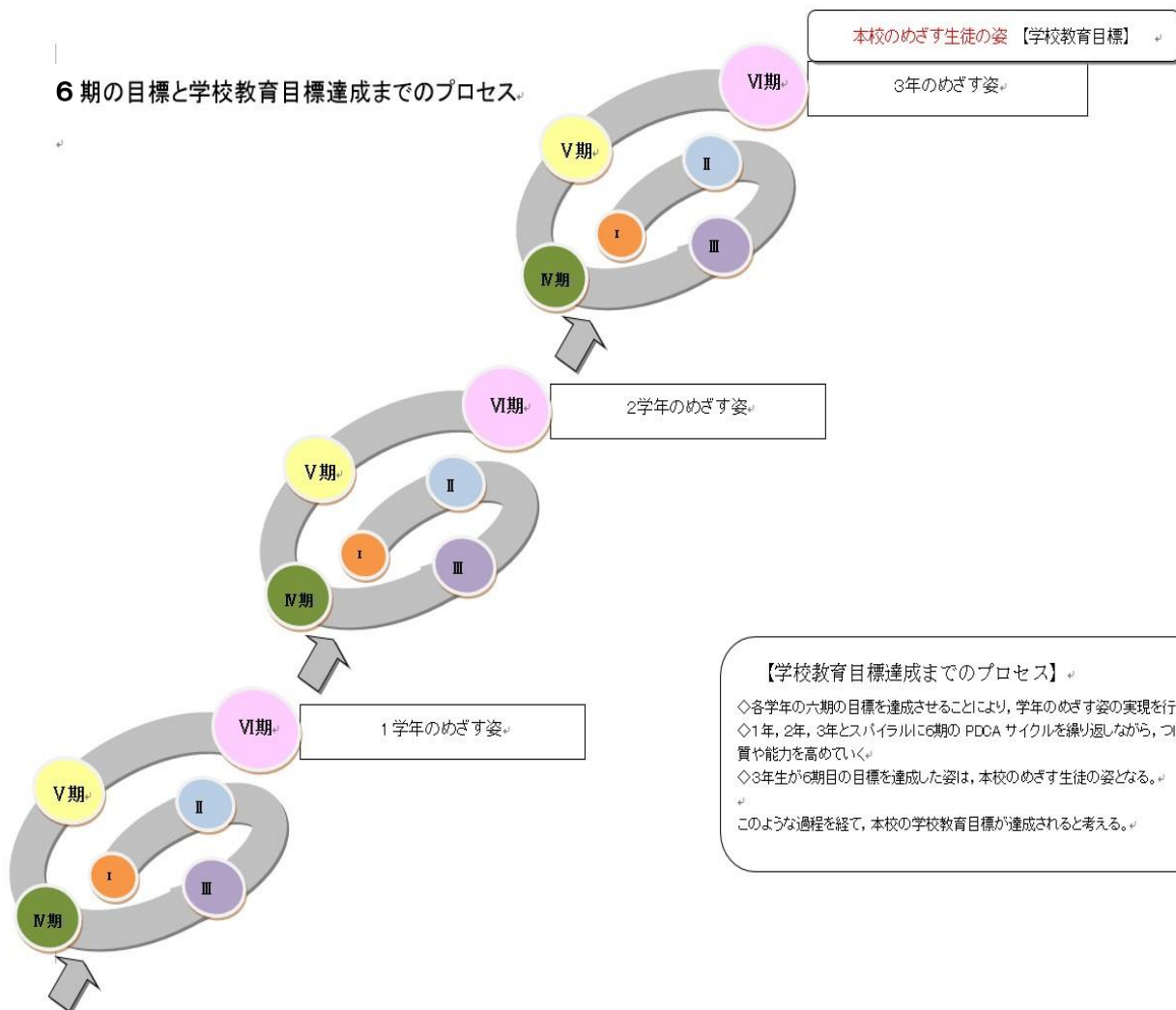
<学校教育目標の掲げる生徒像>

「豊かな学びを基盤とし、高い学力と確かな人間力を持つ実践力に富んだ生徒」
～高い学力・深い愛の心・耐え忍ぶ力～

第Ⅰ期目標	「附中〇年生としての自覚を持ち、集団の基礎をつくる」	生活委員会 整美委員会
第Ⅱ期目標	「主体的に行動し、協働できる集団になる」	全校評議委員会 奉仕委員会
第Ⅲ期目標	「Ⅰ・Ⅱ期で培った実践力をもとに研究会で学びの成果を発揮する」	学習委員会
第Ⅳ期目標	「青垣祭の成功に向けて、自立した主体となる」	生活委員会 奉仕委員会
第Ⅴ期目標	「体験学習や学校説明会で学びの成果を発揮する」	学習委員会 整美委員会
第Ⅵ期目標	「Ⅰ～Ⅴ期の取り組みを振り返り、次年度への心構えを作る」	全校評議委員会

※広報委員会は6期の活動を掲示、広報活動の常時活動を徹底する。
記載されている委員会がその期の活動の中心となる。

6期の目標と学校教育目標達成までのプロセス



- 広報委員会は掲示、広報活動の常時活動を徹底
- 専門委員会前後の各専門委員会担当会議の確保
- 期の目標に対する重点ポイントや手立て、振り返りの時間(アンケート・学活)を確保
- 常時活動の徹底のため、各担当内容の確認(帰りの黙想は広報委員会など)
- 各行事を提案する際に、マトリックスを確認して◎の資質・能力を要項の目標に明示し、意識的に指導する

(2)「生徒とともに創る授業」の実現に向けた取組

今年度は6期ステップⅢ期に、「生徒とともに創る授業」の実現に向けた取組を行った。具体的には、学習委員会の特別活動として、学級ごとに「学習重点目標」を定め、その達成に向けて、各教科担当が授業者とともに毎授業を振り返り、次の授業の目標を定め、授業に臨んだ。

学びに向かう集団づくり 大分附属中版

6期ステップⅢ期の取組 学習委員会 「共に創る授業」

学校教育目標

豊かな学びを基盤とし、高い志と確かな人間力を持つ 実践力に富んだ生徒の育成
～ 高い学力・深い愛の心・堪え忍ぶ力 ～

I期の取組 「附中〇年生としての自覚を持ち、集団の基礎をつくる」を目標に、体育大会に向けて学級・学年の土台づくりを行った。常時活動の徹底に加え、生活委員会による特別活動を行い、大きな声でのあいさつや生活信条の唱和に取り組んだ。



II期の取組 「主体的に行動し、協働できる集団になる」を目標に、日常生活を自分たちでより良くする主体性を培う取組を行った。学びに向かう環境をつくるために、整美委員会による無言清掃の徹底を目指した特別活動や、奉仕委員による校外の美化活動、ペットボトルキャップや古切手、古本の回収に取り組んだ。



III期の取組 目標「I期、II期で培った実践力をもとに研究会で学びの成果を発揮する」

◆前半の取組「授業規律の徹底」～10(火)まで

各授業後に教科担当者による評価

項目 1. 着席・黙想 2. 授業前準備 3. 忘れ物 4. 聞く態度(授業態度)

◆後半の取組「共に創る授業」12(木)～27(金)

「各授業をクラスの重点目標を視点に振り返り、次の授業の目指す姿へと繋げる」

- ①授業後、授業(目指す姿)の振り返りを、重点目標を視点に、教科係が教科担当教諭と行う。
- ②振り返りと次の授業内容をもとに、次の授業の目指す姿を、教科係と教科担当教諭で考える。
- ③次の授業の黙想中に、振り返りと目指す姿を伝え、共有する。

クラスの重点目標 顔を上げて話を聞き、40人の意見から学びを深めよう

振り返り(よかった点、改善点 → 次の授業に向けて)

鑑賞の授業

- みんな興味をもって鑑賞していた
 - 班活動で活発な意見が出ていた
 - △友だちの意見に関心をもていなかった
 - △班の意見が一人の意見になっていた
- 他の人の意見をしっかりと聞き、
考えを広げよう

「振り返りと目指す姿シート」

[取組の計画と取組の様子]

8/28(水) 専門委員会

9/3(火) 全校朝会(「これからの社会、求められる力」)



9/4(水) 学活(各クラスの重点目標を決める話し合い)



9/9(月) 臨時学習委員会

9/10(火) 全校朝会(重点目標発表会)



9/11(水) 全校教科係会議


9/18(水) 重点目標を意識した授業の様子



9/26(木) Ⅲ期の振り返り




1年 C組 考えを身につける
～話す・聞くカ～



設定理由(クラスの思い)
全校朝会で吉任先生の話を聞き、1年C組の課題は、話を聞いても考えが深められていないことであると分かりました。そこで、「話す・聞く」力から「考えるを身につける」考えを深めよう!という事で、この目標にしました。

振り返り



(広報委員会による取組の可視化)



1 A みんなで授業を創る

一人ひとりが考えをもち、それを発表を通して相手に伝えることで、どんな未来が来ても応用できる力を付けたいと思います。この取組を通して、みんなで授業を創る意識が高められるように頑張りたいです。



1 B 反応・共感・受容・思いやり

私たちのクラスは発表に対する反応が少ないため、自分の考えを発信しにくい雰囲気があるという意見が出ました。そのため、発表者に対して反応、共感をし、意見を尊重し合えるクラスになりたいという思いを込めました。



1 C 様々な考えを身に付ける

～話す、聞く力～

授業で発表したり、クラスメイトの意見を聞いたりすることで、多くの考えを知り、身に付けることができると考えました。自分の考えに様々な意見を加え、深めていきたいです。より活発な授業を創っていきます。



1 D 互いの意見を取り入れ合い、授業の理解を深めよう

I期、II期では、発言する人が決まっていた、意見をクラス全員で交流することができませんでした。全員が意見を発表し、交流することで考えが深まり、新しい考えを生み出すことができると思います。



2 A 思考・吟味・交流・吟味

まずは自分でしっかりと考えます。次に、その考えについて個人で再思考します。そして、互いの意見を交流し、交流して自分の意見がどのように変化したのかを考えることで、新たな考え方がつくり、これからの社会を創っていく力が付くと思い、この目標にしました。



2 B HTML

(have tell meet listen)

～意見をもつ、伝える、交流する、聞く～
クラスの仲間の意見を聞き、自分の意見をもち、交流することで考えを幅を広げ、周りに伝えることで、深い学習ができると思ったからです。自分の考えと相手の考えを大切に、互いに高め合える学習を目指します。



2 C 考える・交流・伝える

考える・交流する・伝えることを重視し、より主体的で活発な授業をつくることで、一人ひとりが広い視野をもち、新しい考えに気づくことができ、その結果、未来の社会を生き抜く力につながると考え、この目標を設定しました。



2 D S→R→E→C→

～send, receive, exchange, create～
自分の意見を発信し、それをみんなが受け取る、そして、互いに意見を交換し合い、交流することを繰り返すことで、多様な考えを取り入れながら、自分の意見をより磨いていける主体的な授業を創ることができると考えました。



3 A 発言しやすい雰囲気になろう

みんなが消極的で、反応が少なく、発表者が意見を言いにくい雰囲気があると思います。そこで、発表者に体を向けて聞き、あいづち等の反応をすることで、みんなが意見を伝え合える雰囲気をつくり、授業を活発にし、学びを深め合いたいです。



3 B Let's think

周りと協力しながら発表しよう

授業中の挙手が少なかったり、発表者が固定化されているのが私たちのクラスの課題です。挙手を増やし、自分と他者の双方向に意見が飛び交う、より主体的な学びを創りたいと考えました。



3 C 顔を上げて話を聞き、40人の意見から学びを深めよう

I期、II期を通して、話を聞く態度や挙手をする人の固定化が課題です。そこで、このIII期は、顔を上げて互いの意見を聞き合い、考えを尊重し、受け入れ、40人みんなが意見を発信することで、主体的で、自分たちの考えが広がっていく授業を目指します。



3 D 時間を意識し、積極的に学びを深めよう

私たちの課題は、着席や黙想、移動教室のときの時間厳守ができていないことです。まずは基本である時間を意識します。そして、自分たちで課題を見つけ、探究することで、IV期、V期につなぎ、卒業に向かって成長できるよう、この目標を設定しました。

教科の実践とまとめ

1 取組の実際

実践事例 1

- ① **単元** 附中生が選ぶ絵本大賞2019～お薦めする物語の魅力を、根拠を明確にして伝えよう～
（「大人になれなかった弟たちに…」米倉斉加年 他）
- ② **対象学年** 1年生
- ③ **単元設定の理由**

〈学習者について〉

この学級の学習者は、文学的な文章を対象とした「読むこと」の「学び」については教材「花曇りの向こう」を用いて「場面の展開や登場人物の相互関係」の捉え方を確認し、心情描写・行動描写・情景描写を読み進めることを通して、「心情の変化などについて、描写を基に捉えること」を学習した。読書生活についてのアンケートでは、読書が好きと答える学習者が90%おり、理由として多かった回答は「物語の世界に入り込んで楽しめるから」「面白いから」であった。本を選ぶ基準についての質問に対しては「あらすじを読んで面白そうと思えるもの」を全員が選択し、次いで「気軽に読めるもの」「タイトル」という回答が多かった。この結果から、学習者は文学的な文章をストーリーに着目し、気軽に楽しむために読んでいることがわかる。そのような傾向を認めるならば、学習者は本単元で付けたい力である、言葉による見方・考え方を働かせた、物語の構成や展開、表現の効果に着目した読み方に対しては関心が薄いと考えられる。

〈単元について〉

教科書教材「大人になれなかった弟たちに…」は、ストーリーを支える構成や展開、表現の効果に着目させるのにふさわしい教材である。作者自身の戦争体験を現代の子供たちに語り継ぎたいという思いが出来事を淡々と語る敬体の文章から伝わってくる。回想という物語の構成、戦時中の食べ物についてのエピソードと締めくくりの一文の呼応という展開の妙、繰り返し表現の多用、悲しみと対比するように情景の美しさを際立たせる描写、省略、名詞をカタカナ表記にしている意味など、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして読めば、文学的な文章の魅力に迫ることができる。本単元では、選んだ絵本の文章（物語）の魅力を発表し、もっとも共感を得た班の発表内容を県立図書館に掲示していただくようにすることで、伝える対象者である図書館を利用する人たちへと意識を向けて意欲的に活動することを目指した。選んだ物語の魅力を伝えるために教科書教材での学びを生かすことで、文章をストーリー以外の視点から読むことの面白さを理解させ、本単元の目標へと迫れるであろう。

〈指導・「問い」の工夫について〉

指導に際しては、単元の課題に主体的に取り組みさせるために、まず教科書教材を範読し、この単元の目標を示した上で、学習者と共に学習計画を立てることから始める。教科書教材での「学び」を生かして単元の課題解決に迫るにはどのような「学び」が適切かを考えさせる。その中で「教科書教材で得た読みの『学び』を他の作品で活用する」という気付きを引き出したい。学習計画を立てるのは本単元ではA組であるが、年度当初より輪番で学習計画を立ててきており、毎回他3クラスにおいても教師主導の単元計画で学習する時よりも主体的に学ぶ姿が見られた。これを本単元の「問い」の工夫Ⅰと位置付ける。「大人になれなかった弟たちに…」は絵本として出版された作品である。教科書教材学習後に選択する作品を絵本とし、その物語の魅力を伝えるという目的は、学習者の読むことへの意欲が「学び」を推進するエンジンとなり、選択した作品にみられる表現の魅力に主体的に迫ろうとするであろう。ここで、ストーリー以外の文学的な文章の読みの着眼点に気付けない学習者には、教科書教材で学んだこと振り返らせる指導場面や他の人の気づきに触れさせる対話的な場面を設け、自分の読み方との違いに気付かせることで、多面的な読みの「学び」へと導きたい。これを「問い」の工夫Ⅱと位置付ける。

④ 単元の目標

お薦めの物語の魅力を伝えるために、ストーリー以外の文章の工夫を捉え、分類シールで可視化することを通して、文学的な文章の構成や展開、表現の効果について根拠を明確にして考えることができる。

⑤ 単元の評価規準

○10冊の絵本を読み、最も心に響く1冊を選んでその理由に迫ろうと、「大人になれなかった弟たちに…」で学んだ読み方を参考にしたり、辞書や国語便覧を用いて表現技法の効果を理解しようとしたりしながら、物語を繰り返し読んでいく。 [関心・意欲・態度]

○文学的文章の構成や展開、表現の効果に気付き、その物語の魅力がどこにあるか、根拠を明確にして自分の考えを伝えることができる。 [読む能力ーエ]

○語句の辞書的な意味と文脈上の意味との関係に注意し、語句や文の効果に気付いている。 [言語についての知識・理解・技能ーイ (イ)]

⑥ 単元指導計画 (総時数 7 / 9 時間)

単元のめあて		お薦めする物語の魅力を根拠を明確にして伝えよう		
展開	時間	学習活動	指導上の留意点	評価
導入	1 2	○単元の目標を知り、単元の学習計画を立てる (本単元担当クラス)	<ul style="list-style-type: none"> 教科書教材の目標を確認する。 「問い」の工夫Ⅰ 配当時間を伝え、自分たちで計画を立てさせることで見通しをもたせる。 本文を読み、初読の感想を書かせる。 絵本の魅力を、本文に根拠を求めて説明するスピーチをする内容へもっていく。 	関・意・態
	3	○「大人になれなかった弟たちに…」はなぜ人の心を打つのかに迫る	<ul style="list-style-type: none"> A組が作成した学習計画をシラバスにして配付し、見通しをもたせ、範読を聞かせる。 この文章の魅力はどこにあるのか個人で考え、教科書に線を引かせる。 見つけた工夫を分類し、行頭にシールを貼らせる。 分類…表現技法 描写 構成や展開 その他 	
		○人に薦めたい絵本を1冊選ぶ	<ul style="list-style-type: none"> 朝読書の時間に帯で10冊の絵本のテキストを読ませ、物語の魅力を感じる一冊を選ばせる。 	
展開	4 5	○「大人に…」の文章の工夫を見つけ、伝え合う	<ul style="list-style-type: none"> 模範スピーチを見せ、ゴールイメージをもたせる。 前時に個人で捉えた工夫を、班で発表させる。 	関・意・態 読むーエ
	6	○お薦めする物語の素晴らしさを見つける	<ul style="list-style-type: none"> 「大人に…」での読みを活かして各自で自分の選んだ物語の魅力を探させる。(本文を印刷した紙に線を引き、シールを貼らせる) 	関・意・態 読むーエ
	7 本時	○お薦めする物語の魅力の伝え方を考える	<ul style="list-style-type: none"> グループ内で、個人の意見を発表させる。 教科書教材で学習した内容や新たな気づきを発表させることでより多くの視点からの読み方を促す。 「問い」の工夫Ⅱ ○文章を読む観点を増やさせるための「問い」「他にも魅力はないだろうか。」 	関・意・態 読むーエ
終末	8	○発表会をする	<ul style="list-style-type: none"> 班ごとに、1人あたり1分以内のスピーチをさせる。 各自が文章の魅力と感じた部分について、根拠と共に述べる部分を必ず入れるよう指導する。 	関・意・態
	9	○振り返り	<ul style="list-style-type: none"> 読み取る力がどのように深まったか、選んだ物語の表現に新たな気づきや考えがもてたかを振り返らせる。 	

⑦ 本時案

- (1) 題 材 附中生が選ぶ絵本大賞2019～お薦めする物語の魅力を、根拠を明確にして伝えよう～
- (2) ねらい 各自が読み取った物語の魅力とその根拠を班で交流し、発表内容を吟味する活動を通して多面的な読みに触れ、文章の構成や展開・表現の工夫に気付かせる。
- (3) 本時における「問い」の工夫

班で読みを深める前に、教科書教材で学んだことを想起させる発問（「大人に…」ではどんな視点での読み方を学んだだろうか。）を挟んだり、今読んでいる作品で新たな視点を得た班に発表させたりすることで、新たな視点からの読みを促す。

(4) 展開

学習活動	時	指導及び指導上の留意点	期待される反応	○評価・備考
1. 本時の活動を 確認し、本時の 目標を知る	3	○単元計画を確認し、本時のめあてを確認させる。		
めあて：お薦めする物語の魅力を探そう。				
2. 各自の読みを 班で伝える	10	○選んだ物語のどこに魅力を感じるか、本文に根拠を求め、班員に説明させる。 ・本文の拡大コピーに線を引いて分類シールを貼り、工夫とその効果を説明させる。 (黄)人物(緑)情景描写 (青)表現の工夫 (白)構成や展開の工夫 (赤)その他 ・発表を聞き、理解したことを赤で自分のプリントに追記させる。	・分類に従って進んでシールを貼っている。	本文コピー 分類シール 伝国 (ワークシート) 赤ペン (各自)
3. 他の人の読み から学ぶ	10	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>「問い」の工夫Ⅱ</p> <p>○他にも魅力はないかを問う。 ・「大人に…」を振り返り、どんな視点での読み方があったかを確認する。 ・今読んでいる作品での気づきを発表させる。 ・他の班の気づきを聞きに行かせる。</p> </div> <p>具体的な視点…一文の長さ 文末表現 せりふ 語り (地の文) キーワード</p>	・新たな視点を 得てシールを 追加できている。	
4. 班で読みを深 める	15	○班で新たな視点や解釈を出し合わせる。 ○新たに見つけた魅力を全体に発表させる。 ○出し合った意見を基に、発表の構成を話し合わせる。	・新たな視点で 読もうとして いる。	関・意・態 (観察) 読むーエ (本文へのメモ) 読む (エ) (ワークシート)
5. 本時の振り返 りをする	5	○本時の振り返りをワークシートに記入させる。		
振り返り：お薦めする物語の魅力を探すためにどんな視点から読んだか振り返ろう。				
<p>(予想される振り返りの姿)</p> <p>A 構成や展開、表現の工夫から登場人物の心情に迫り、作者の意図を読み取ることができ、そうした読み方を他の作品にも生かそうと考えていることが記述からわかる。</p> <p>B 物語の読み方について新たな視点を得、その中で、できるようになったこととまだ不十分などところがあることに言及できている。</p>				
6. 次時の活動を 確認する	5 2	○振り返りを発表させる。 ○全体に対して問い、確認する。		

(5) 板書計画

附中生が選ぶ絵本大賞2019
お薦めの物語の魅力を根拠を明確にし
て伝えよう！

めあて
お薦めする物語の魅力を探そう

① 班で発表↓赤でメモ
② 話し合い
・ もっと他に魅力はないか？
・ 物語の魅力をどう伝える？

③ 振り返り

○ 文章の魅力
表現の工夫

- ・ 比喩↓イメージしやすい
- ・ 反復法↓感情を強調
- ・ 省略法↓読者に考えさせる

構成・展開

- ・ 過去を振り返る（額縁構造）
- ↓昔のことが現実とつながっている

人物の描写

振り返り
お薦めする物語の魅力を探すために
どんな視点から読んだか振り返ろう。

- ・ 場面の順序や一文の長さ、文体に着目して読む。↓テンポの良さ、心情
- ・ 表現技法の役割↓心情を強く伝える

⑧ 結果と考察

本単元において、主体的な学びを引き出すために学習者と共に学習計画を立てることを「問い」工夫Ⅰとして設定したが、この実践は想定以上の成果があったと感じている。本年度は1クラス1回ずつ単元の学習計画を立てさせた。自分たちで学習計画を立てることにより、習得すべき事項を把握して学習に臨めることや、学習への意欲が高まることアンケートにより明らかになった。授業中の観察によってもそれは明らかに見て取れ、授業者が単元計画を立てた場合と比較して、「前時に何を学んだか」「本時はどのような活動をし、何を習得するのか」



下部：教科書教材への書き込みを可視化した

を明確に発表できる学習者が多かった。国語への苦手意識をもつ学習者も好意的な受け止めであり、見通しをもって学習できていた。このことから、主体的な学びにつながる問いとなっていたと言えるだろう。授業時間の確保、意見のすり合わせなど煩雑な部分も多く大変ではあるが、1クラス年に1回ずつであっても、行う価値はあったと言える。

「問い」の工夫Ⅱで効果的だったのは、他班の話し合いの内容を聞きに行く活動であった。教科書教材での学びの振り返りは教科書を読みながら書き込みをしたものを板書したことで学習者はすでに理解できていた。各班の話し合いの内容を数名に発表させたことで、新たな視点に気づき、もっと知りたいという思いが湧いていたので、他の班を自由に見て回るときに、熱心に話を聞くことができていた。他の班に聞きに行き、その内容を自分の班で説明する役割と、自分の班に聞きにきた人に説明をする役割とを分けたことで、双方が説明する必要が生まれるよう仕組んだことで、真剣さが増すと同時に、学びのメタ認知をする機会ともなった。学習者が渴望するタイミングで適切な話し合いをの形態を選んで入れることにより、教材とも人とも対話しながら深い学びへと結びつけることができることを本実践で実感した。

～アンケート～（1月実施）

自分達で学習計画を立てたり、他のクラスが立てた学習計画で勉強したりしましたが、やってみてどうでしたか。

○自分とは違うプランを考えていて、とても新鮮だったし、自分たちでプランを立てることで、学ぼうという意欲が高まった。単元の内容も印象に残っている。

○自分たちで立てた計画に沿って進めるので、目的もよくわかっているし、頭の中でゴールにいくまでの手順が組み込まれていて、わかりやすい。

△自分達が立てたほうが自分のしたいようにできてよかった。他のクラスだと、こうしたほうがいいのにとと思うところがあった。



他班の魅力の見つけ方を学んでいる

附中生が選ぶ絵本大賞2019

～お薦めする物語の魅力を根拠を明確にして伝えよう～

①単元の目標は何か（資質・能力）

魅力的だと感じる物語の良さを伝えるために、ストーリー以外の文章の工夫を捉え、分類シールで可視化しながら読むこと通して、文学的な文章の構成や展開、表現の効果について根拠を明確にして考えることができる。

学習指導要領「読むこと一エ 文学的文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えること。」

④問題意識を持たせるために、どのような導入を図るか（③を届けるために）

目標を確認し教科書教材を読んだ後、本単元の担当クラスと共に学習計画を立てる。

教科書教材を共通教材として、物語の構成や展開、表現の工夫を読み取る。

魅力的だと感じた絵本を自分で選ばせる。

10冊の絵本を全員が読んでおくことで、クラスメイトの発表を聞いて自分の読みを振り返り、新たな視点で読もうとする意識を高めさせる。

③どのようなめあて、課題にするか
（各教科の見方・考え方が働くもの）

お薦めする物語の魅力を、根拠を明確にして伝えよう。

⑤どんな追及活動を行わせるか（言語活動含む）

魅力的だと感じた物語について、その文章の魅力を伝えるために文章の構成や展開・表現の効果に着目して作品を読む。発表を聞いた学習者、国語科教員、図書館司書から物語の魅力が伝わる発表だったと評価を得たひと班については、紹介の様子と紹介文を県立図書館に掲示していただく。

②単元の最後に理解させたいこと、発言させたいことは何か
（単元のゴール+振り返りの視点）

文章の構成や展開、表現の効果に気付き、それらについて考える読み方ができるようになる。

【予想される振り返り】

今までは、文章を読むときにストーリーを追うだけだったが、今後は、構成や展開、表現の工夫にも着目し、もっと深く物語を楽しみたい。

⑥使える資料は何か。どこで使うか。

教科書教材
「大人になれなかった弟たちに…」

事実を基にした絵本10冊
国語便覧
国語辞典
類語辞典

「問い」の工夫Ⅱ

お薦めする物語の魅力に迫るためにどのような読み方ができるかを問い、教科書教材を想起させたり、他班の読みを参考にさせたりして視点を広げさせる。

⑦まとめの表現活動をどうするか

・県立図書館に特設展示していただく。

「問い」の工夫Ⅰ

学習者の興味・関心を高めるために、単元の学習計画を担当クラスで話し合せて立てさせる。担当クラスが選んだ10冊から魅力的だと感じた一冊を個人で選ばせる。

実践事例2

① 単元 コミュニケーションについて論じよう

～「国語に関する世論調査」にプラスワンの情報を加えて自分の意見を述べる～

② 対象学年 3年生

③ 単元設定の理由

〈学習者について〉

学習者は、1・2年時の国語科でスピーチの相互評価やプレゼンテーション等、日常生活や社会生活から話題を求め、報告、説明、発表をしたり、それらを聞いて意見を述べたりする活動を重ねてきている。そのため、4月に行われた「全国学力・学習状況調査」の「学習者質問紙調査」においては、「国語の授業で自分の考えを話したり書いたりするとき、うまく伝わるように根拠を示したりするなど、話や文章の組立てを工夫していますか」に肯定的回答の学習者が82.0%と、国語科の学習においては、内容や論の展開を意識できている学習者が多いと考えられる。しかし、同調査「1, 2年生のときに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していたと思いますか」に肯定的回答の学習者が67.3%にとどまっており、国語科で受けた指導が3割以上の学習者には十分に定着していないことが伺える。

〈単元について〉

本単元は、「平成28年度国語に関する世論調査」結果を読んで、「コミュニケーション」についての自らの考えを提案し、聞き手がその内容や表現の仕方を判断する言語活動を行いたい。「国語に関する世論調査」は、国語に関する意識や理解の現状について調査し、国民の国語に関する興味・関心を喚起することを目的とするもので、平成28年度は、「コミュニケーションの在り方・言葉遣いについて」「相手に配慮したコミュニケーション」等、コミュニケーションに関する意識調査が行われている。これを基に、自分たちのコミュニケーションについて考えることは、学習者の関心を一定程度以上喚起することと考えられる。

〈指導・「問い」の工夫について〉

言語活動については、少人数のグループで、一人の発表者がコミュニケーションに関する自分の意見をパワーポイント（以下「PP」とする）を使って述べ、その内容についての賛否や論の展開、活用された資料などについて話し合うこととする。意見については、国語に関する世論調査から得た情報を基にコミュニケーションについて考えたことを中心とするが、この際、課題に主体的に取り組みせるために、指導者から示された情報だけでなく、書籍、新聞、雑誌、ウェブ上の情報から自ら探してきた情報を加えることを条件とする。これを本単元の「問い」の工夫Ⅰと位置付ける。また、話し合いについては、聞き手が意見の内容や表現の仕方を判断することが中心となるが、それが適切なものとなっているのかという点について、客観的に判断する数名の評価者を設定したい。これにより、自分がよりよい聞き手たりえているかどうかを実感することにつながると思っている。これを「問い」の工夫Ⅱと位置付ける。

④ 単元の目標

「国語に関する世論調査」結果概要を基にコミュニケーションについて考えたことを述べたり、その内容や表現の仕方を評価したりする活動を通して、聞き手を説得するための資料の活用や論理の展開を工夫することができる。

※参考 想定する指導事項について

- | | |
|---------------|----------------------------------|
| 平成20年度指導要領の場合 | ・ [A 話すこと・聞くこと] (第2弾) イ 及びア ウ |
| | ・ [伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項] (イ(7)) |
| 平成29年度指導要領の場合 | ・ [知識及び技能] (2)情報の扱い方に関する事項 ア |
| | ・ [思考力、判断力、表現力] A話すこと・聞くこと ア イ エ |

⑤ 単元の評価規準

- コミュニケーションに関する諸事象に関心をもち、そこから得た自分の意見について話し合う活動を通し、聞き手が納得できるように伝えたり、話し手の提案について根拠をもって評価したりしようとしている。 [国語への関心・意欲・態度]
- 自分の考えについて説得力を増すために、話し方や論理の展開を工夫したり資料などを活用したりして、コミュニケーションに関する意見を発表している。 [話す・聞く能力 一第2群イ及び第3群ア]
- 発表者の意見を聞いて、その内容についての賛否や論の展開、活用された資料などを評価し、自分のものの見方や考え方を深めたり、自分の話し方の参考にしたりしている。 [話す・聞く能力 一ウ]
- 社会生活における敬語の役割を理解して話している。 [言語についての知識・理解・技能一 (イ(7))]

⑥ 単元指導計画（総時数5／7時間）

展開		時間	学習活動	指導上の留意点	評価
<p>単元のめあて コミュニケーションについての意見発表を基に、その内容の賛否や論理の展開などについて話し合い、より良い話し手、聞き手になる。</p>					
導入	1		○単元の目標、言語活動の内容を確認する	<ul style="list-style-type: none"> ・単元の目標を確認する。 ・「国語に関する世論調査」結果概要の抜き刷りを読ませその際の気づきを共有する。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>「問い」の工夫Ⅰ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・気づきから自分が論じたいことを考え、それを述べる際に必要となるプラスワンの情報を各自で探すことを伝える。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・イメージ作りのために、指導者が作成した4枚のPPシートを示す。 	関・意・態
	2		○コミュニケーションについての提案の論の展開を考える	<ul style="list-style-type: none"> ・以下の点を確認する。 (1)PPシートは3, 4枚, (2)発表は4, 5分程度 (3)プラスワンの情報を必ず位置付けること ※プラスワンの情報は、自分の考えの補強、根拠、具体的な事例、話題提示、と様々に使用してよいこと ・既習事項である、基本的な文章の構成や、論の展開について確認する。 ・ワークシートに提案の展開を記述させる。 	話・聞-ア (ワークシートの記述) ※C評価者への支援 話題と結論を明確にさせ、 班員からアドバイスさせる
	3		○PPシートを作成する	<ul style="list-style-type: none"> ・前時のワークシートを基にPPシートを作成させる。 ・それぞれのシートを示すときに、何を話すのか、箇条書きにまとめさせる。 	同上
展開	4		○話し合いの際の発表者、聞き手、評価者の役割を考える	<ul style="list-style-type: none"> ・以下のことを留意して話し合い活動を行うことを確認させる。 (1)発表者：場面に応じた言葉遣い、論理の展開の工夫、効果的な資料活用などについて留意する。 (2)聞き手：発表者の主張の根拠や自分の立場との違いを明確にする。論理的な展開などに留意して評価する。 (3)評価者：(1)(2)を適切に判断する役割であること。 	話・聞-ア・ウ (ワークシートの記述)
	5・6 本時		○自分が考えるコミュニケーションについて述べ、それを基に話し合う	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>「問い」の工夫Ⅱ</p> <p>評価者の視点から話し合いを客観的に判断し、より良い話し手、聞き手になるための視点を得る。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・話し合いの際の役割を明確にし、そのとき自分が何について考えればよいのかを事前に把握させておく。 ・iPadによる動画も撮影させるが、あくまで補助アイテムとする。 	話・聞-ウ (観察・ワークシートの記述)
終末	7		○単元全体の振り返りを行う	<ul style="list-style-type: none"> ・導入時、展開時、それぞれで留意すべきこと、達成すべきことは何であったのか、それに対し、自分はどれだけ意識でき、達成できていたのかを分析させる。 	話・聞-ア・ウ 関・意・態 (ワークシートの記述)

⑦ 本時案

- (1) 題材 コミュニケーションについて話し合い、より良い話し手、聞き手について考える。
- (2) ねらい 「国語に関する世論調査」結果概要と学習者自身で探したプラスワンの情報をもとに考えたコミュニケーションに関する意見を発表し、その内容や論理の展開を吟味する話し合い活動や話し合いを評価する活動を通して、各学習者が話し手、聞き手としての課題に気付かせる。
- (3) 本時における「問い」の工夫
話し合いについては、聞き手が意見の内容や表現の仕方を判断することを中心とし、それが適切なものとなっているのかという点について、客観的に判断する数名の評価者を設定する。

(4) 展開

学習活動	時	指導及び指導上の留意点	期待される反応	評価・備考
1. 前時を振り返り、本時のめあてを確認する	1	○前時を簡潔に振り返らせ、本時のめあてを確認させる。		
めあて：コミュニケーションについての意見発表を基に、その内容の賛否や論理の展開などについて話し合い、より良い話し手、聞き手になるための視点をもとう。				
2. 本時の活動と課題を確認する	4	○本時の活動は、意見の発表とその内容や論理の展開を吟味する話し合い活動や話し合いを評価する活動ということを確認させる。		
課題：発表者や聞き手の優れている点や、今後、気を付けなければならないことはどのような点か				
3. コミュニケーションに関する話し合いを行い、気付きを全体で交流する	3 5	○前時まで確認していた、発表者及び聞き手の留意事項を確認させる。 ○各グループで、発表4分以内→質疑、意見交流5分以内→評価2分以内という順で話し合う。 ・発表者1名、聞き手4名、評価者3名 ・これを2回行う。 ・グループでの話し合い終了後、評価者からのコメントをもとに、自分の良かった点や足りなかった点について発言させる。 ・各自で「よりよい話し手、聞き手になるための視点」をまとめる。	問いの工夫Ⅱ 聞き手の判断が適切なものとなっているのかという点について、客観的に判断する数名の評価者を設定。そのコメントをもとにまとめ、振り返りをさせる。	話・聞-ウ (観察・ワークシートの記述)
まとめ：評価者からの指摘から、○○の点が自分にとっては伸ばすべき点であると分かった				
4. 本時の振り返りを行う	1 0	○本時の活動で自分が特に意識した点や、自他への評価者からのコメントをもとに振り返りを行わせる。		話・聞-ウ (ワークシートの記述)
振り返り：本時の活動で自分が特に意識した点や、評価者からの自他へのコメントをもとに本時の成果や今後の課題について、記述しよう。				
予想される振り返り A 活動に臨む際、自分が意識していたことと評価者からのコメントと同じ点や違う点、他者が指摘されたことから気付いた点について言及し、次の活動への展望を記述している。 B 本時の活動で自分が特に意識した点についてできたこととできなかったこと、評価者からの評価について言及し、次の活動への展望を記述している。 C 上記以外の内容				

(5) 板書計画

〈側面〉大型ディスプレイ

留意事項：評価者の評価のポイント

発表者

- A 経験や知識を再構成して自分の考えを形成している
- B プラスワンの情報を効果的に用いている
- C 目的や場面に応じた言葉遣い、聞き取りやすい語句を選んでいる
- D 論理的で分かりやすい話の構成や展開を工夫している
- E 資料の見やすさや提示の仕方を工夫している

聞き手

- a 意見の根拠を確かめて判断している
- a 発表者と自分の考えや立場との違いを聞き分けている
- b 話の意義や価値を考えて自分の意思決定に役立っている
- b プラスワンの情報がどのような役割を果たしているのか理解している
- c 発表者の語句や文の使い方、声の出し方や言葉遣いを意識している
- d 話の構成や論理的な展開について具体的に述べている
- e 資料や機器の活用方法を述べている
- 独 発表者の優れている点を自らの表現に生かそうとしている

〈正面〉ホワイトボード兼用スクリーン

振り返り

本時の活動で自分が特に意識した点や、評価者からのコメントをもとに、記述しよう

まとめ

評価者からのコメントをもとに、自分の良かった点や足りなかった点を考える

課題

発表者であった場合、「意見を述べたこと」プラスワンの情報を効果的に用い、論理的な構成になるよう気を付けたい。
見やすい資料の提示を意識したい。

めあて

発表者や聞き手の優れている点や、今後、気を付けなければならないこととはどのような点か

コミュニケーションについて論じよう
「国語に関する世論調査」にプラスワンの情報を加えて自分の意見を述べる

⑧ 結果と考察

本単元では、「国語に関する世論調査」結果を基にコミュニケーションについて自説を述べ、その内容や表現の仕方を評価する活動を通して、聞き手を説得するための資料の活用や論理の展開を工夫できるようになることを目指した。本時では、発表者1名、聞き手3名、評価者4名のグループで、発表に加え、聞き手の評価も同時に行い、より良い話し手、聞き手に近づくために自分たちのできている点と課題に気づかせることをねらった。

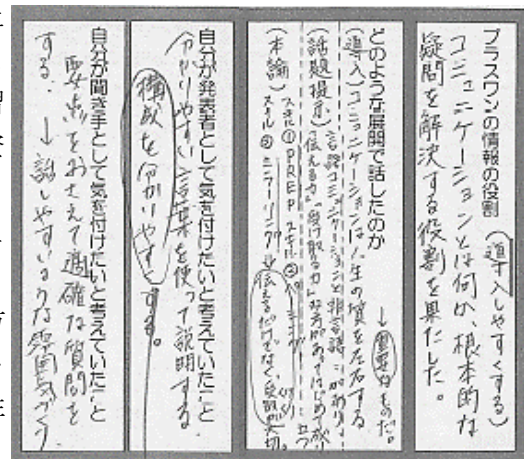
文部科学省・国立教育政策研究所の杉本直美調査官からは、下記のような指導・講評をいただいた。

- (1) 今回の授業で目指すところは、①資料の工夫、②話の構成の工夫の2点に絞るべき。
- (2) 聞き手が、プラスワンの意図を話せるか、その資料の価値について話せるか、「このようなシートをここに追加すると良い」「このシートを入れ替えると良い」などのコメントが出れば、ねらいが達成できたと判断できる。
- (3) 本時の話し合いにおける「論理の展開を考える」といったことは、2時間目の書く活動でもできる。本時のねらいは、「話の構成を工夫する」、「聞き手に応じて工夫する」に絞る。
- (4) 「問い」の工夫Ⅱである評価者を立てた点について、学習指導要領では「聞くこと」に評価する力も必要とされている。3年生であれば、発表しつつ聞き手を評価することが求められるため、評価役は不要ではないか。
- (5) ICTが活用されていた授業だった。iPadは評価のための記録補助ツールとしても使える。また、ポイントシートを簡単に入れ替えられる特徴があり、構成を考えさせるツールとして大変優秀。話題を簡単なものにして、スライドを入れ替えたり、加えさせたりするとよい。

上記のコメント及び右の学習者の振り返り等から、想定していた「問い」の工夫Ⅰ及びⅡに関して、下記のようなことが考えられる。

「Ⅰ」については、課題に対し主体的に取り組ませるために学習者の裁量や工夫を認めたいと考え設定したものである。これは「資料の工夫」という点では、一定の成果があったと言える。しかし、杉本調査官のコメントの(2)のような発言が授業中に少なかったことから、「話の構成の工夫」という点につながったとは言えない。

「Ⅱ」については、客観的に「聞き手が意見の内容や表現の仕方を判断する」ことをねらったものであるが、杉本調査官のコメント(4)にあるとおり、本単元のねらいや発達段階をふまえれば、必要性としては低かったと言わざるを得ない。



〈「振り返り用紙」中の生徒のコメント〉

2 国語科における成果と課題

富山哲也氏は学習指導要領「解説総則編」における授業改善の視点①～③を示したうえで次のように述べている。「①からは、『真面目な学習態度＝主体的な学び』というわけでないことが分かります。生徒自身が見通しをもって学習に取り組み、学習活動を振り返ることを生涯の学びにつなげていけるような姿が望まれます。②からは、『話し合い活動＝対話的な学び』というわけではないことが分かります。対話によって、それぞれの考え方が広がったり深まったりしていることが重要です。また、生徒同士の対話だけでなく、生徒と教師もしっかり対話しなくてはなりません。それが「深い学び」のきっかけになります。③からは、「深い学び」のポイントが「見方・考え方」を働かせることにあることが分かります。国語科において育成を目指す資質・能力が確実に育成され、生徒への言葉への自覚が高まっている姿が、深い学びの状態であると言えます。」（「中学校学習指導要領国語科の授業づくり」27ページ 明治図書）

本校国語科では、これを手掛かりに「めあて、学習内容が学習者に届き、共有させ、主体性を生むための手立て（＝「問い」の工夫Ⅰ）」と「深い学び（単元の目標の達成）に迫るための手立て（＝「問い」の工夫Ⅱ）」を設定した2本の単元を構想した。「問い」の工夫Ⅰと「問い」の工夫Ⅱとに分けて成果を述べたのち、今後の課題を述べたい。

（1）「問い」の工夫Ⅰを設定したことの成果

実践事例1「附中生が選ぶ絵本大賞2019～お薦めする物語の魅力を、根拠を明確にして伝えよう～」では、「単元の学習計画を担当クラスで話し合っ立てさせること」「魅力的だと感じた一冊を個人で選ばせること」「成果物を県立図書館に展示すること」を「問い」の工夫Ⅰと位置付けた。これは、学習者の主体性を生むために、教材を自ら選択したり、単元のゴールイメージを具体的にもたせたりすることで、学習に対する興味・関心を高めることをねらったものである。このことに関する学習者の反応は「自分たちが立てた学習計画だから責任をもって頑張ろうという気持ちで取り組めた。」「A組の学習計画のお陰で楽しく学べ、これまで苦手だった物語の読解に抵抗がなくなったので、A組には感謝したい。」という意見も見られ、学習に対する興味・関心を高めることに一定の成果を得られたと考えてよい。また、富山氏は、「単元の見通しを生徒に示すことは、学習すべき内容を教師と生徒が共有することである。ともすれば、学習内容や学習計画を教師だけが知っていて、教師からの指示や発問がなければ全く学習が進まないという状況に陥ることがある。これでは、生徒は主体的になりようがない。単元全体を通して、あるいは一単位時間について、何を目指してどのような学習を進めるのか生徒とともに理解することが必要である。（中略）また、このような単元の見通し自体を生徒に考えさせることも大切である。それはすなわち、課題解決の見通しを立てることになるからである。」（「主体的・協働的に学ぶ力を育てる！中学校国語科アクティブ・ラーニングGUIDEBOOK」12・13ページ 明治図書）と述べている。このことから、本実践の「単元の学習計画を担当クラスで話し合っ立てさせること」は、学習に対する興味・関心を高めることに限らず、目指すべき方向性と学習の方法を学習者とともに理解させることで主体的な学びを生み、さらに課題解決の見通しをもつことにも繋がっていると見えよう。

実践事例2「コミュニケーションについて論じよう」では、「コミュニケーションについて考えたことを論じる際の参考とする情報を指導者から示されたものだけでなく、自ら探してきた情報を加えることを条件」とすることを「問い」の工夫Ⅰと位置付けた。これは、それぞれの学習者が、自由に情報を探す中で、興味・関心を喚起し、それによって主体的な学びにつなげることを目的としている。さらに、探してきた情報を、それぞれの学習者がどのような資料として位置づけるのか（自分の考えの論拠、効果的な導入のための資料、発表のまとめにつなげるための言葉など）、ひいてはそれを基に、どのような話の展開にするのかを考えさせることもねらったものである。学習者の振り返りとして、自分で探してきた情報の役割は何であったのかを書かせたところ、「具体的な出来事について示すことによって相手の理解を深めたり、相

手への説得力をもたせたりするために今大切にされているコミュニケーション(スキル)の名称を示した」「コミュニケーションとは何かを具体的に示す資料となるよう意識した」等の記述があった。このことは、学習者たちにとっては、与えられた課題ではあったが、自分で必要な情報を探す中で、受動的な課題解決でなく、比較的、能動的な学習の姿の一端であると言えるのではないか。その意味で、本実践の「問い」の工夫Ⅰで、主体的な学びにつなげることができたと言えよう。

(2) 「問い」の工夫Ⅱを設定したことの成果

実践事例1では「お薦めする物語の魅力に迫るためにどのような読み方ができるかを問い、共通教材を想起させたり、他班の読みを参考にさせたりして視点を広げさせる」ことを、実践事例2では「話し合いについて、それが適切なものとなっているのかという点について、客観的に判断する数名の評価者を設定し、これにより、自分がよりよい聞き手たりえているかどうかを実感することにつなげる」ことを、それぞれ「問い」の工夫Ⅱとした。

本校国語科としては、言語活動を充実することが深い学び(単元の目標の達成)に迫ることにつながると考え、それを「問い」の工夫Ⅱと捉えた。ゆえに実践事例1、実践事例2ともに言語活動の充実を図ることをねらうところとなっているが、実践事例1の「問い」の工夫Ⅱは活動の充実そのものをねらっているのに対し、実践事例2の「問い」の工夫Ⅱでは、自分たちの言語活動を客観的にとらえなおすことをねらっており、そこに両実践の違いがある。

言語活動の充実を図ったことで、学習者からの「同じ絵本を選んだ人たちの発表で、自分たちとは全く違う視点から魅力を伝えていて、自分たちより深く読んでいると思った。」という意見も見られ、これが深い学びに迫るために一定の成果を得たと言える。

「平成29年度告示学習指導要領国語編」の「3 指導計画の作成と内容の取扱い」においては「単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、生徒の主体的・対話的に深い学びの実現を図るようにすること。その際、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、言葉の特徴や使い方などを理解し自分の思いや考えを深める学習の充実を図ること。」とあり、「問い」の工夫Ⅱとして、言語活動そのものについて、深堀していったことは重要であり、成果であると言える。

(3) 課題

次に実践を通して、見えてきた課題を2点について述べる。

まず、振り返りの充実という点である。「問い」の工夫Ⅰとして単元の学習計画を学習者自ら立てさせ、それにより主体的な学びや課題解決の見通しをもつことにつながっていると述べた。この「見通しをもつ」と同様に必要なのが、単元の中で、学習を見直し振り返りすることである。一単位時間や単元の振り返りをするのはこれまでも行ってきたが、情意的な振り返りに偏りがちで、その時間はどのような学びを行いどのようなことが分かったのか、他の人の意見の中で参考になったことは何か、この学びを今後どのように生かしていきたいか、など学習過程をメタ認知できるような振り返りになっていない。課題解決力を高めるために「問い」の工夫Ⅰと振り返りをセットに考える必要がある。

次に言語活動の充実を図る際、共通して留意すべき点の洗い出しが必要という点である。例えば、言語活動を行う際、グループ活動を採ることが多いが、その際のグループ編成はどのように行うのか、また、グループ活動で個々の学習者の考えがどのように変容したのかを捉えるにはどのような方法を採るのか、等様々に考えておくべきであるが、それが果たして十分なものであったかは、非常に疑問である。

以上の2点であるが、この2点は、①当該単元で育成を目指す資質・能力、②①に適した「言語活動」、③①の定着を確認する学習評価とその方法を明らかにしたうえで、指導の詳細を練っていく中で考えるべきことである。①～③の3点が明快な単元づくりを今後とも目指していきたい。

1 取組の実際

実践事例 1

① **単元** 個人の尊重と日本国憲法 ～より良い社会を実現するために必要なことを考えよう～

② **対象学年** 3年生

③ **単元設定の理由**

〈単元について〉

平成 20 年度学習指導要領(社会科)では、目標として「(2) 民主政治の意義、国民の生活の向上と経済活動とのかかわり及び現代の社会生活などについて、個人と社会とのかかわりを中心に理解を深め、現代社会についての見方や考え方の基礎を養うとともに、社会の諸問題に着目させ、自ら考えようとする態度を育てる。」と示されている。平成 29 年度版においても、「(2) 社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を現代の社会生活と関連付けて多面的・多角的に考察したり、現代社会に見られる課題について公正に判断したりする力、思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。」と示されている。公職選挙法の改正に伴い、選挙権年齢が満 20 歳以上から満 18 歳以上に引き下げられ、現代社会はグローバル化・少子高齢化・超スマート社会化(Society5.0)が急速に進んでいる。変わりゆく社会の中、社会科においては、基本的な知識・技能を習得するとともに、現代社会に関する説明的知識、社会科的な見方・考え方を働かせながら社会における課題を多面的・多角的に考察し、公正に判断し、説明、議論する力を付ける必要がある。

本単元では、基本的人権の尊重の根幹にある「個人の尊厳」・「法の支配」の概念の獲得のために、公民的分野の単元「個人の尊重と日本国憲法」を題材として設定する。基本的人権の尊重は人類が歴史上で獲得したもので、民主的な国家の形成に欠かせないものとなっている。我が国においても、自由民権運動・大正デモクラシー・戦後改革によって、民主的な国家が成立した。しかしながら、「社会的不公平感に関する世論調査」によると、「あなたは一般的にみて、現在の社会は公平だと思いますか、それとも不公平だと思いますか。」という問いに対して、「あまり公平だと思わない」、「不公平だと思う」と回答した国民は 63.6%の割合を占めている。この結果から、憲法で権利は保障されているにも関わらず、平等で自由な共生社会は実現できていないとも言える。そこに課題を見出し、より良い社会の実現に向けての解決策を考察し学び合うことで、その実現の礎となる「個人の尊厳」・「法の支配」の知識や概念を獲得し、国家・社会の順応者になるだけでなく、自ら判断し、国家・社会の形成者になるための資質・能力・態度を身に付けるために適した単元である。

〈学習者について〉

学習者はこれまで歴史的分野にて、基本的人権を獲得するに至った経緯やその歴史的な意義について学んでいる。その推移や比較、相互の関連などに着目し、近代社会の形成において重要な考えであったことも理解している。事前アンケートの中でも、「基本的人権の獲得が歴史に大きな影響を与えている」という項目については「そう思う」と回答した学習者は 99%いた。また、「基本的人権の尊重が実生活の生活に影響をしているか」という項目については「そう思う」の割合は 90%程度であった。しかし、「現代の社会は不公平だと思う」に関しては 60%となっており、世論調査の結果とほぼ同様な数値であった。学習者は基本的人権について歴史で獲得され、実生活に影響している社会科の事象とは考えているが、まだまだ機能していないと捉えているといえる。

〈指導・「問い」の工夫について〉

本単元では、日本国民が社会は「不公平だと思う」と感じている割合が 60%以上ということが、学習者の考えと社会の考えが同じであるということに着目させる。歴史上で獲得してきた基本的人権があるにも関わらず、なぜ不公平感を生むのかという疑問から、主体的・対話的な学習を生みたい(I)。具体的には、学習者自身が授業の振り返りで考えた「どんなことに日本人は不公平を感じているのか」、「不公平を感じる原因・背景は何なのか」、「どうすれば不公平感を解消できるのだろうか」といった疑問を調査していくことで、授業をすすめていく(II)。そして、現代社会における課題を調査し、比較・分類することを通して、基本的人権の尊重の根幹にある「個人の尊重」・「法の支配」の概念を獲得し、社会的事象を考える上での見方・考え方として使ってほしいと考えている。また、「1枚ポートフォリオ」を使い、振り返りで授業ごとの発見や疑問をまとめることで、単元を通して学習者自身に学びの深さを実感させたい。

④ 単元の目標

基本的人権の尊重について、現代社会にみられる課題について考えることを通して、より良い共生社会を形成するためには、法の支配のもとで個人の尊厳を国民一人ひとりが意識し行動することが重要性を理解することができる。

⑤ 単元の評価規準

ア	イ	ウ	エ
関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
基本的人権に関する現代社会の事象に関心を高め、意欲的に追及して、民主社会の個人と社会の関わりをとらえようとしている。	基本的人権の尊重について、現代社会の事象を基に多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	現代社会の事象に関する様々な資料を収集し、有用な情報を適切に選択することができる。	基本的人権の尊重が民主社会を形成していること、法に基づいた政治が基本的人権を保障していることを理解し、その知識を身に付けている。

⑥ 単元指導計画（総時数 5／6 時間）

単元を通したためあて「不公平感がない世の中にするには何が必要かを考える。」

時間	めあて	学習活動	問いの工夫	振り返り	評価規準	評価方法
1	不公平感を感じることにについて考えることができる。	不公平感に関するアンケートの結果を知り、社会にある不公平について考える。	「問い」の工夫Ⅰ 世間と学習者の考えの一致から単元のめあてを設定したり、学習者自身が課題に対して、学習の見通しを考えたりすることで(シラバス化)、学習者の意欲を高める。	色々な不公平感を考えることができた。次はその背景を考えたい。	ア	1枚ポートフォリオ
2	基本的人権の尊重の内容を理解できる。	基本的人権について知る。	「問い」の工夫Ⅱ シラバスをもとに、学習者の振り返りから疑問を抽出し、そこから	細かく基本的人権について理解したので、次はそれに従って、解決策を考えたい。	エ	
3 4	不公平感の原因・背景の情報を調査することができる。	不公平感の原因・背景の情報を収集する。	次回のめあてを設定したりすることで主体的な学習を生む。	自分で調査することができたので、みんなと共有したい。	ウ	
5 本時	より良い社会をつくるために大切なことを考えることができる。	集めた情報をみんなで共有し、様々な角度から考察する。	また、学習者の調べたことや考えたことを比較させたり(思考ツール等の利用)、矛盾した内容の資料を提示したりすることで、学習者の思考を活性化させる。	より良い社会づくりのためには、個人の尊厳を意識することが必要だ。実際にはどんな風になってきたかを知りたい。	イ	
6	どのような権利が社会では認められてきたかを理解できる。	新しい人権について、その内容と背景を知る。		たくさんの人権が認められたことがわかった。大人になってもより良い社会づくりに関わりたい。	エ	

⑦ 本時案

- (1) 題材 「より良い社会をつくるために必要なことを考えよう」
- (2) ねらい 基本的人権の尊重について、現代社会の諸課題を基に話し合い考察することを通して、より良い社会の形成のために、個人の尊厳を意識し行動することの重要性を理解できるようにする。
- (3) 本時における「問い」の工夫 前時の振り返りよりめあてを確認することで、主体性を生む。マトリクス等の思考ツールを用い、調べた内容を比較させることで背景・原因を捉え、根拠とすることで学習者の思考を促す。

(4) 展開

学習活動	時間	指導	期待される学習者の反応	備考・評価
1 前時を振り返り、本時の課題を確認する。	3	<p>○前時の学習者の授業の振り返りの中から、本時につながる内容のものを紹介し、本時のめあてを確認する。</p> <p>「みんなが不公平・不当感を感じているが、解決する方法を話し合いたい。」「不公平感の解決の方法を考えるために、みんなの意見を聞きたい。」という思いを全体で共有する。</p>		
めあて：意見を交流し、良い社会をつくるために、必要なものを考えよう。				
課題：どうしたら不公平感を解消できるだろうか。				
2 各自で不公平等を感じることにについて調べたことを共有する。	10	○自分が調べた不公平等を感じる事象について、「どんな場面で」・「どんな権利が保障されていない」・「原因」という観点でグループに情報を共有させる。		
(例)どんな場面	「男なのに」「女なのに」など	LGBTに関する配慮	障がい者への配慮	格差社会
どんな権利	平等権	平等権	平等権・社会権	社会権
背景・原因	権利や法律では保障されているので、個人の意識の変化が必要。	法の整備・個人の意識の変化が必要。	偏見をなくすことや、国としての法や制度も問題がある。	法律があいまいな部分がある。また、国民が制度を知らない。
3 個人で考えた解決策を付箋を用いて交流し、班としてのホワイトボードを使い、クラスで交流する。	32	<p>○マトリクス等の思考ツールを用い、背景・原因を比較させながら不公平な事象の解決策について考えさせ、発表させる。</p> <p>○すべての個人がお互いに尊重し合うことを「個人の尊厳」というと説明する。</p> <p>○不公平感解消のために、近年多くの新しい人権が生まれていることを伝える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・多くの国民が意識できていないので、国民一人ひとりの意識が変わらないといけな ・少数派の想いを具体化するべきだ。 ・憲法で規定されているから、細かく法律を作って守るべきだ。 	
まとめ：不公平感を解消するためには法律の整備の下で、個人の尊厳を意識して生活する必要がある。				
4 本時の振り返りを行い、次回の課題を発見する。	5	○今日わかったこと、新たに生まれた疑問の視点で振り返りを行わせ、振り返りをもとに次回の課題を設定する。		
<p>予想される生徒の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基本的人権は国によって多くのものが保障されているから、個人の意識を変えなければならないと感じた。どんな問題があるか、もっと知りたい。 ・共生社会をつくるために、個人の尊厳を意識するべきだ。どんな困りがあるのかを勉強したい。 				
次回の課題：多様化する社会の中でどのような権利が新しく認められているのだろうか。				
				より良い社会の形成のために、個人の尊厳を意識し行動することの重要性を考えている。

(5) 板書計画

めあて：より良い社会をつくるために、意見を交流し、自身の考えを深めよう。				
課題：どうしたら不公平感を解消できるだろうか。				
ホワイトボード	国民一人ひとりの意識が変わらないといけない。	少数派の想いを具体化するべきだ。	憲法で規定されているから、細かく法律を作って守るべき	
まとめ：不公平感を解消するためには法律の整備の下で、個人の尊厳を意識して生活する必要がある。				
振り返り ・基本的人権は国によって多くのものが保障されているから、個人の意識を変えなければならないと感じた。どんな問題があるか、もっと知りたい。				

⑧ 結果と考察

本学習単元では大きく二つの深い学びを実現させる「問い」の工夫を設定した。一つめは、世間と学習者の考えの一致から単元のめあてを設定したり、学習者自身が課題に対して、学習の見通しを考えたりすることで(シラバス化)、学習者の意欲を高めること(「問い」の工夫Ⅰ)。二つめは、シラバスをもとに、学習者の振り返りから疑問を抽出し、そこから次回のめあてを設定したりすることで主体的な学習を生むこと。また、学習者の調べたことや考えたことを比較させたり、矛盾した内容の資料を提示したりすることで、学習者の思考を活性化させることである(「問い」の工夫Ⅱ)。

「問い」の工夫Ⅰについて、この「問い」の工夫を設定したことで、自ら学習活動・内容を設定し、探究的に学習に臨むという主体的な学習を生むことができた。ただし、改善点も挙げられる。まず、世間と学習者の考えの「一致」から課題を生むということに難しさがあった。世間の現状と学習者の思考や知識の間にある「ズレ」や「ひずみ」こそが、社会の本質を問う課題となり得るものである。その部分を取り上げるからこそ、主体的な学びは生まれる。今回、「世の中は不公平である」という考えを学習者の多くはもっており、「基本的人権があるにも関わらず、なぜ不公平なのか」等の課題設定を学習者が行ったことには、やや誘導的な側面も感じた。

「問い」の工夫Ⅱについて、深い学びを実現するという面で、非常に効果が高いと考えた。自らの振り返りから次の課題を設定することで、次に学ぶべきこと、学ぶ方法を考える必要がある。また、その結果が学習者自身の予想と異なっていれば、そこに課題が発生し、さらに学びは深まる様子を単元の中で、何度も目にすることができた。ただし、授業者のアドバイス(発問)は確実に必要であり、そのアドバイス(発問)が深い学びを阻害するものではなく、なおかつ学習者の思考を活性化させるものであるという条件を満たすことに難しさを感じた。学習者の思考に沿った教科・教材研究を今後は行っていく必要がある。



単元構想メモ

※澤井先生の著書より作成

単元「 個人の尊重と日本国憲法 ～より良い社会を実現するために必要なことを考えよう～」

①単元の目標は何か（資質・能力）

現代社会の事象から課題を見出し、共生社会の実現に向けての解決策を考察し学び合うことで、より良い社会の実現の礎となる「個人の尊厳」・「法の下での支配」の知識や概念を習得し、現代社会に関する説明的知識、社会科的な見方・考え方を働かせながら社会における課題を多面的・多角的に考察し、公正に判断し、説明、議論する力を養う。

④問題意識をもたせるために、どのような導入を図るか（③を届けるために）

日本国民が社会は「不公平だと思う」と感じている割合が 60%を超えているということに着目させ、学習者の考えとの共通性から本当に自由に平等な共生社会を生むにはどうすればよいかを学習者に意識させる。

問いの工夫Ⅰ

社会と学習者の意識の差について考え、生徒自身に疑問を生むことで、主体的な学びを生む。
学習者とともに見直しをつくる。

⑥使える資料は何か。どこで使うか。

・ギャップを生む資料

③どのようなめあて、課題にするか

（各教科の見方・考え方が働くもの）

より良い社会をつくるために大切なことを考えることができる。

問いの工夫Ⅱ

○振り返りにて、授業で見つけた新たな疑問を全体で共有し、次の授業のめあてとすることで、主体的な学びを生む。

○効果的な思考ツール

○思考の活性化

⑤どんな追及活動を行わせるか（言語活動含む）

「どんなことに日本人は不公平を感じているのか」、「不公平を感じる原因・背景は何なのか」、「どうすれば不公平感を解消できるのだろうか」といった学習者自身が授業の振り返りにて、考えた疑問を調査していくことで、授業をすすめていく。

調べ学習の成果をグループで共有することで、基本的人権について、対話の中で多角的な視点を生み出す。

②単元の最後に理解させたいこと、発言させたいことは何か

（単元のゴール+振り返りの視点）

基本的人権の尊重について、現代社会にみられる課題について考えることを通して、より良い社会を形成するためには、法の支配のもとで個人の尊厳を国民一人ひとりが意識し行動することが重要性を理解することができる。

⑦まとめの表現活動をどうするか

1枚ポートフォリオで文章化し、学習前後を比較する。

実践事例 2

- ① 単元 中国・四国地方 ～都市と農村の変化と人々の生活～
- ② 対象学年 2年生
- ③ 単元設定の理由

〈単元について〉

本単元は平成 29 年告示の学習指導要領社会編、地理的分野内容 (3)「日本の諸地域」について、「②人口や都市・村落を中核とした考察の仕方」を基に構成した。本単元では、中国・四国地方の地域的特色や課題を調査や諸資料から調べ、理解し、その成立条件を、地域の広がりや地域内の結び付き、人々の対応などに着目して、他の事象やそこで生ずる課題と有機的に関連付けて多面的・多角的に考察し、表現できることが目標とされている。瀬戸内海のある中国・四国地方は古くから九州や東アジアと都をつなぐ重要な交通路が発達していた。そして、戦後には山陽新幹線が開通し、本州四国連絡橋も建設されるなど、交通網が著しく発達した。これに伴い、人や物の移動が激しくなり、都市化、過疎化も進んでいる。とりわけ、過疎地域では少子高齢化が著しく、社会生活の維持が困難となる限界集落も見られる。その中で、様々な方法や人々の努力で地域の活性化を行っている例も見られる。本単元を学ぶことで、これからの日本や九州、大分県、学習者の身近な地域の在り方を考える概念的知識の獲得、思考力の育成を目指したい。

〈学習者について〉

学習者はこれまで地理的分野の「日本の地域的特色と地域区分」において、日本全体を概観した。そして、九州地方を「自然環境を中核」として考察している。単元の最後に「九州はこれから農業に力を入れていくべきか、工業に力を入れていくべきか」を考える活動を行った。活発な議論が行われたが、データや根拠に乏しい意見が多かった。アンケートより社会科が好き、どちらかという如果喜欢と回答する学習者が 9 割を越えるものの、グループワーク、全体共有の場、ともに発言する学習者が固定化されていることも課題である。

〈指導・「問い」の工夫について〉

本単元では、これまでの既習事項を活用し、「中国・四国地方といえば」というテーマで、付箋を用いてブレイン・ストーミングを行う。学習者から出た意見をもとに、単元のめあて「中国・四国地方の人口分布の偏りの原因を調べ、その影響と対策を考えよう」を導出する。また、このめあてを達成するためには、何を調べなければならないかを学習者と考え、シラバス化を行い、見通しをもたせることを「問い」の工夫Ⅰと位置付け、学習者の主体的な学びにつなげたい。また、地理的な見方・考え方を単元の中に位置づけ、中国・四国地方を多面的・多角的に考察させ、資質・能力の育成を目指す。その際、学習者自身が調べた情報を思考ツールを用いて整理・分析させ、根拠を明らかにした意見をもたせ、学習者全員が自信をもって発言できるようにすること、そして、単元の最後に、獲得した概念的知識を用いて、大分県の人口分布、これからの大分県の在り方について考える活動を仕組むことを「問い」の工夫Ⅱと位置付け、単元の目標に迫りたい。さらに、「問い」の工夫Ⅰ、Ⅱの両方に関連して、学習者の振り返りを共有し、次時のめあてや課題に繋げるサイクルを単元を通して行うことでも、学習者の主体性を高め、深い学びの実現を目指す。

④ 単元の目標

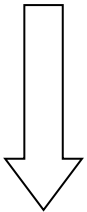
中国・四国地方の地域的特色や課題を、調べ学習を通して理解し、その背景を、地域の広がりや地域内の結び付き、人々の対応などに着目して、他の事象やそこで生ずる課題と有機的に関連付けて多面的・多角的に考察し、根拠を明らかにして表現することができる。

⑤ 単元の評価規準

ア	イ	ウ	エ
関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
中国・四国地方の地域的特色や課題に対する関心を高め、それを意欲的に追究し、捉えようとしている。	中国・四国地方の地域的特色や課題について、人口や都市・村落を中核とした考察の仕方を基に、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を根拠を明らかにして適切に表現している。	中国・四国地方に関する様々な資料を収集し、その資料から有用な情報を適切に選択している。また、選択した情報を基に、中国・四国地方について読み取ったり、図表にまとめたりしている。	中国・四国地方について、都市・村落を中核とした考察の仕方を基に地理的特色を理解し、その知識を身に付けている。

⑥ 単元指導計画（総時数 4 / 6 時間）

単元のめあて「中国・四国地方の人口分布の偏りの原因を調べ、その影響と対策を考えよう」

時間	めあて・課題	学習活動	問いの工夫	振り返り	評価 規準	評価方法
						見方・考え方
1	めあて 「中国・四国地方といえは」 既習事項をもとに、中国・四国地方の特色と課題を考えてみよう。	ブレーション・ストーミングを用い、中国・四国地方の特色や課題を考える。 全体で共有した上で人口分布の資料を提示する。単元のめあてを設定し、学習計画を立てる。	「問い」の工夫Ⅰ 学習者の既習知識から中国・四国地方の特色、課題を予想させる。予想に対して、人口分布の資料を提示し、単元のめあてを設定する。 その上で、学習者自身が学習の見通しを考えることで(シラバス化)、意欲を高めさせる。	自分の既習知識や考えをたくさん書いたり、他者と付箋を出し合ったりすることで、中国・四国地方の特色や課題について予想することができた。 自分たちで見通しを立てることで、調べたい気持ちになった。	ア	ポートフォリオ
2	課題 中国・四国地方の自然環境はどのような特色があり、人口分布とどのように関係しているだろうか。	地図帳や雨温図、写真資料から、中国・四国地方の特色を読み取り、整理し、共有する。 自然環境と人口分布との関係を考える。	「問い」の工夫Ⅱ 学習者が調べた情報を、思考ツール(思考シート)を用いて整理させ、根拠を明かにした意見をもたせ、学習者全員が自信をもって発言できるようにする。	自然環境と人口分布の関係がわかった。 住みやすい環境に人口が集まり、山地に人口が少ないことに気づいた。	エ	位置や空間的な広がりとの関わりに着目する
3	めあて 中国・四国地方の人口分布とその要因について調べよう。	インターネット、資料集、教科書を用い、人口分布とその要因について調べ学習を行う。	・地理的な見方・考え方を働かせ、めあてや課題に迫らせる。	中国・四国地方の人口分布の偏りの理由や背景がわかった。	ウ	環境条件や他地域との結び付きなどを地域等の枠組みの中で人間の営みと関連付ける
4 本時	課題 中国・四国地方の人口分布の偏りは人々にどのような影響を与えているのだろうか。	調べた内容を思考ツールを用いて整理し、人口分布が人々にどのような影響を与えているか考え、根拠を明らかにして発表する。	・振り返りから次時の課題を設定する。 + ・次時につながる学習者の思考を活性化させる発問を行う。	人口減少と人口集中、都市化のどちらにも問題点があることに気づいた。 ・過疎化が社会サービスの低下につながり、さらなる人口減少につながることに気づいた。 ・都市化や過疎化に対して、どのような対策がとられているのを調べてみたいと思う。	イ	 社会事象の特色や相互関連・意味を多面的・多角的に考察する力  (地域に見られる課題解決に向けて、複数の立場や意見を踏まえて選択・判断する力)
5	めあて 都市と農村において、どのような取組がされているのかを調べよう。	都市化における諸問題や過疎化に起因する課題に対して、中国・四国地方ではどのような取組がされているのか調べて、共有する。	単元の最後に、獲得した概念的知識を用いて、大分県の人口分布、これからの大分県の在り方について考える活動を仕組み、単元の目標に迫らせる。	～市では…という取組をしていて、その成果と課題がわかった。 ～のような取組をすると大分県でも効果的だと思った。	ウ	
6	めあて 中国・四国地方の地域的特色と課題についてまとめ、それをもとに九州の人口分布とその課題解決について考えよう。			ただ過疎地域に人口を増やすという取組を考えるのではなく、都市化と過疎地域のつながりを考えて対策を考えることが大切だと思った。	イ	

⑦ 本時案

- (1) 題材 「中国・四国地方の人口分布の偏りが人々にどのような影響を与えているのかを考えよう」
- (2) ねらい 中国・四国地方の人口分布の偏りが人々に与えている影響について、思考ツールを用いて整理した意見を伝え合う活動を通して、多面的・多角的に考えることができるようにする。
- (3) 本時における「問い」の工夫
 - ・思考ツールを用いて考えを整理させることで、根拠を明らかにして自分の意見をもち、表現できるようにする。
 - ・次時につながる学習者の思考を活性化させる発問を行う。

(4) 展開

学習活動	時間	指導	期待される学習者の反応	備考・評価
1 前時を振り返り、本時の課題とめあてを確認する。		単元のめあてを確認し、前時の学習者の振り返りを紹介し、本時の課題を設定する。	自分の調べ学習の内容や振り返りの内容を確認し、課題を受け入れている。	
課題 中国・四国地方の人口分布の偏りは人々にどのような影響を与えているのだろうか				
めあて 意見を交流し、様々な視点から考えられるようになろう				
2 自分の考えを伝え合う。		<ul style="list-style-type: none"> ・思考シートを用いて考えた自分の意見を確認させる。 ・思考シートを用いて、自分の考えを伝え合わせる。 ・交流した内容をから、2つの考えをカードに書き出させる。 	思考シートを用いて、自分の考えを根拠を明らかにして伝えている。 他者の意見を聞き、自分の考えを広げている。	
3 数班が発表し、チャートで整理しながら、全体で共有する。		<ul style="list-style-type: none"> ・カードの内容や交流したプロセスを発表させながら、カードをチャートを用いて分類させる。 ・他の班、個人で反対意見や関連する意見を発言させ、対話を促す。 	チャートのどの部分に分類されるかを考えている。 発表に対して、関連する意見や疑問、反対意見を考え、発言できている。	
4 まとめ、振り返りを行う。		まとめを学習者の言葉で文章で記述させ、数人に発表させる。	交流した意見や板書をもとに自分の言葉でまとめている。	
まとめ 広島市や瀬戸内周辺の一部では都市化が進み、人口増加による交通渋滞などの都市問題が起こっている一方で、多くの市町村で人口減少が著しく、過疎化が進んでいる。学校や役場などがなくなったり、鉄道やバスの便数が減少したり、病院や店がなくなることで、社会生活が困難になり、より人口が流出することにつながっている。				
		今日わかったこと、新たに生まれた疑問の視点で振り返りを行わせる。 振り返り+発問を行い、次時の課題を設定する。		
発問 「過疎化を止める必要があるのだろうか」				
予想される生徒の振り返り <ul style="list-style-type: none"> ・人口減少ばかりに注目していたが、人口が集中し、都市化することでの問題点に気づいた。 ・過疎化が社会サービスの低下につながり、さらなる人口減少につながるという悪循環が生まれていることに気づいた。 ・都市化や過疎化に対して、どのような対策がとられているのを調べてみたい。など 				
				中国・四国地方の人口分布の偏りが人々に与えている影響について、調べ学習をもとに、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を根拠を明らかにして適切に表現している。

⑧ 結果と考察

【「問い」の工夫Ⅰ】 本単元では、「問い」の工夫Ⅰとして、学習者の既習知識や旅行などの実体験から中国・四国地方の特色と課題を予想させ、その内容を単元のめあてへと繋げた。具体的には、ブレーン・ストーミングを行い、個々の学習者にイメージを持たせ、そのイメージを交流させることで、特色でもあり、課題でもある「人口分布の偏り」という共通項を導出した。共有より生まれたこの共通項を単元のめあてに繋げることで、学習者に関心を持たせることができたと考える。全体交流の際に、指導者が準備した中国・四国地方の人口分布の資料は学習者の考えを裏付けるものであり、意欲喚起の一因となった。その上で、学習者自身に学習の大まかな見通しを考えさせた。「人口の少ない地域と多い地域の原因を調べる時間が必要」「過疎と過密の利点と欠点を調べるのが大切」といったように、単元のめあてを達成するために必要な学習を考えさせる活動であり、様々な単元でこの活動を行っているが、このことも学習者が主体的に学ぶ要素となると考えている。

【「問い」の工夫Ⅱ】 「問い」の工夫Ⅱとして、本単元では3つのことを仕組んだ。

①思考ツール（思考シート）の活用、地理的な見方・考え方について

演繹的な思考や帰納的な思考などができるよう、学習者が調べた内容を「事実・データ」→「言えること」→「考えられること」と思考ツールを用いて整理させ、根拠を明かにした意見をもたせ、学習者全員が自信をもって発言できるように試みた。昨年度から用いているが、一定の成果があり、調べた内容を整理・分析して、自分の考えを持つことができた。しかし、「事実・データ」の有効性が認められないものもあり、情報をどこに求めるかに課題が残った。この点は地理的な見方・考え方を学習者に明確に示すことで解決に向かう問題でもあり、どの見方・考え方を働かせてめあて・課題に迫るのかを指導者が明確にしておく必要があると再認識した。

②学習者の振り返りから次時の課題を設定することについて

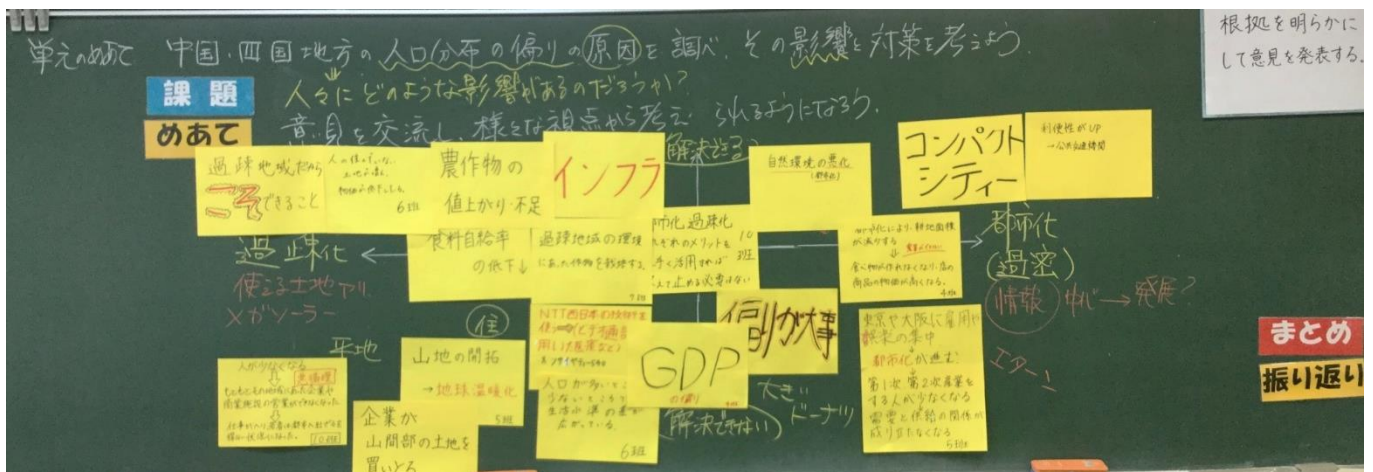
単元の初めに大まかな見通しを学習者と立てた上で、毎時間の振り返りを学習者同士が共有し、そこから、次時の課題へと繋げるサイクルを仕組んだ。単元後のアンケートから、学びが単元を進めるごとにステップアップし、単元のゴールへと向かっている実感を学習者ももつことができた（関連項目肯定的評価100%）。振り返りの記述からも、次時の授業への関心が伺えた。

③次時につながる学習者の思考を活性化させる発問について

本時では「過疎化を止める必要があるのだろうか」という発問を指導者側が準備していたが、全体共有の場で議論する中で、学習者より同様の意見が出された。学習者たちの頭を悩ませる様子から、過疎化はもちろん、都市化について多面的に考察をすすめていく上で、深い学びに向かう一助になったと考える。

①～③より、「問い」の工夫Ⅱは一定の有用性があったと考える。しかし、本時においては、チャートの視点を吟味する等、「問い」の工夫として重きを置いた部分以外の主要な手立てに課題が残った。この点は大きな反省点である。

【本時の板書】



単元「 中国・四国地方 ～都市と農村の変化と人々の生活～」

①単元の目標は何か（資質・能力）

1. 中国・四国地方の地域的特色や課題を理解する。
2. その背景を他の事象やそこで生ずる課題と有機的に関連付けて多面的・多角的に考察する。
3. 2について、根拠を明らかにして表現することができる。

④問題意識をもたせるために、どのような導入を図るか（③を届けるために）

- 学習者の既習知識から中国・四国地方の特色，課題を予想させる。予想に対して，人口分布の資料を提示し，単元のためを設定する。
- 人口分布のデータを用いて，視覚的・数値的に理解させる。印象付ける。
- 都市や農村の写真を用いて，イメージをもたせる。

問いの工夫Ⅰ

- 既習知識 →ブレイン・ストーミング →KJ法
- 学習者自身が学習の見通しを考える(シラバス化)

⑥使える資料は何か。どこで使うか。

- ・写真資料 (自然環境，都市，農村等)
- ・人口分布のデータ

③どのようなめあて、課題にするか（各教科の見方・考え方が働くもの）

中国・四国地方の人口分布の偏りの原因を調べ，その影響と対策を考えよう
 （地域的特色や課題の成立条件を，地域の広がりや地域内の結び付き，人々の対応などに着目して，他の事象やそこで生ずる課題と有機的に関連付けて）

問いの工夫Ⅱ

- 振り返りにて，授業で見つけた新たな疑問を全体で共有し，次の授業のめあてとすることで，主体的な学びを生む。
- 思考ツール（思考シート）
- 思考の活性化
過疎化＝問題点を問い直す発問
- 獲得した概念的知識を用いて，大分県の人口分布や今後について考察する。

⑤どんな追及活動を行わせるか（言語活動含む）

- 調べ学習（情報収集）
- 整理・分析して自分の考えをもたせる
 - 事実，原因・背景，対策
 - グループでの交流
 - 全体交流（チャート） 多面的・多角的な視点
 - 九州・大分県との比較
- ※人々の対応（多角的に）に留意

②単元の最後に理解させたいこと，発言させたいことは何か（単元のゴール+振り返りの視点）

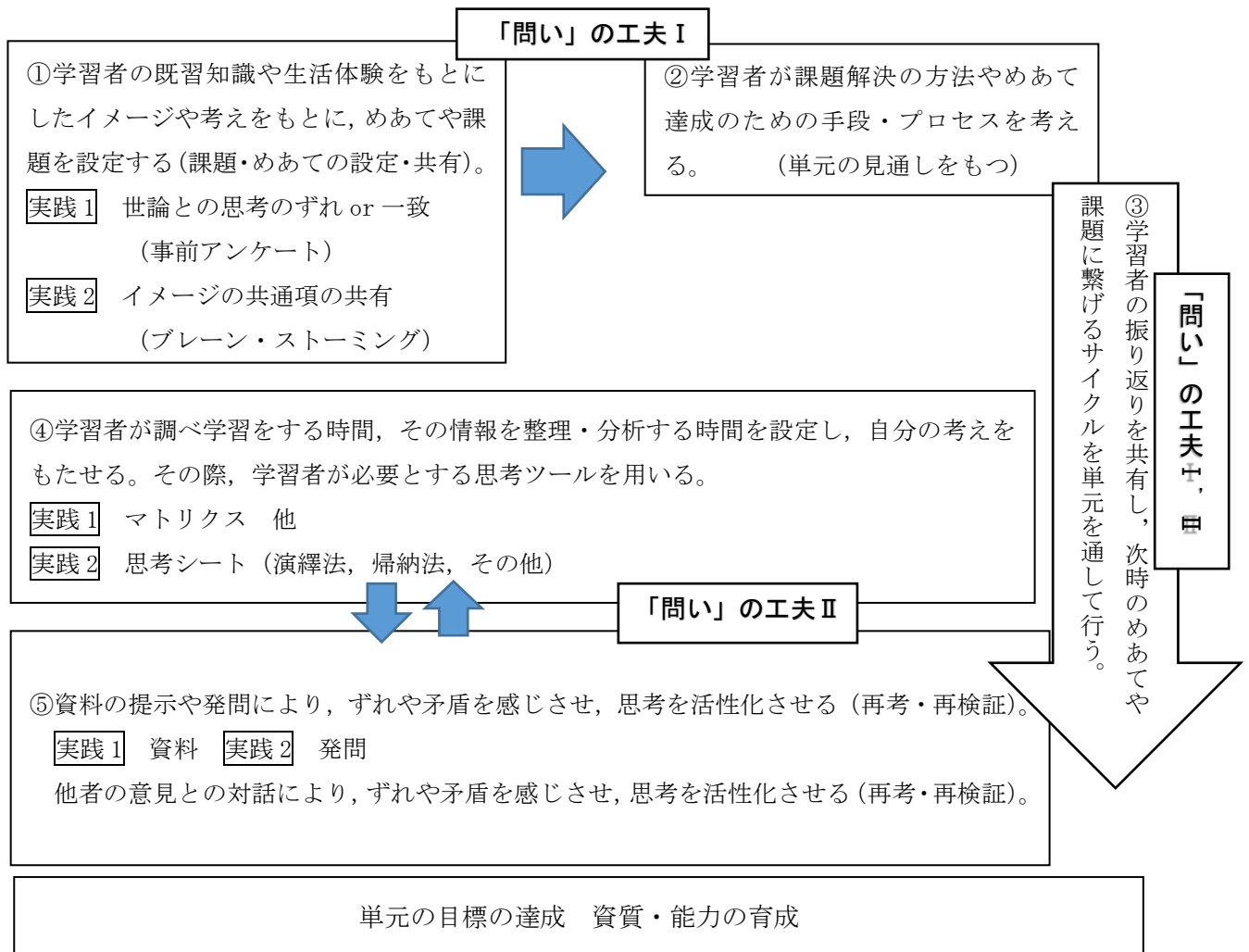
- 人口減少と人口集中のどちらにも原因がある（産業，交通網，自然環境，歴史など）。
- 過疎，過密の問題に対して，それぞれ町おこしや再開発等の対策を行っていることがわかった（具体的に）。
- 大分県，大分市でも，中国・四国地方で学んだことが当てはまる。～のような対策はできないだろうか。

⑦まとめの表現活動をどうするか

- ワークシート
- ・特色，課題
 - ・原因，背景
 - ・対策
 - ・大分県では

2 社会科における成果と課題

社会科では次のような構造で「問い」の工夫Ⅰ，Ⅱに取り組んだ。



〈①②単元のめあてや課題の設定，単元の見通しの作成について〉

本校社会科では、既習知識や生活体験をもとにめあてや課題を設定し、その後、学習者とともに単元の見通しを作成する活動を行っている。今回、実践1では事前アンケートを取り、学習者と世論（不平等感に関するアンケート）が一致していること（当初は学習者と世論がずれていると考えていたが、アンケートの結果一致していた）から社会とのつながりを実感させ、関心を高めた。実践2ではブレイン・ストーミングを行い、イメージをKJ法で分類する中から共通の特色・課題を出し、共有することで学習者の関心を高めた。その後、めあての達成や課題解決のためには、何を学ぶ必要があるのか、何をすればよいのかを出し合い、単元の見通しを立てる。この①の手立て、②の活動については、実践2の1時の振り返りにも「特色などを書き出して、大体どんなものなのかがわかった。次はもっと深く学んでみたい。」とあるように、学習者が自ら学習内容・活動を設定し、探究的な学習の計画を立てるため、主体的な学びに繋がる有効な手立てだと考える。

〈③毎時間の振り返り → 次の授業のめあて・課題〉

①②と同様に、学習者の振り返りから疑問を抽出し、全体で共有することで、次時のめあてや課題を設定するサイクルを毎時間行っている。このことは学習者の学びを繋いでいくことになり、主体的な学習を生んでいる。この点では、「問い」の工夫Ⅰと捉え

特色は世論を書き出して、大体どんなものなのかがわかった。次はもっと深く学んでみたい。

ることができる。次時のめあてや課題を設定した後、この達成や解決の方法やプロセスを学習者は考え、取り組んでみる。この結果が上手くいかなかったとしても、そこには新たな課題が生じ、学習者は再考を余儀なくされる。このことは深い学びの要素になるだろう。さらに、予想通りになった場合でも、⑤の手立てにより、再考したり、再検証させたりすることで、深い学びに近づいていくと考える（後述）。

〈④自分の考えをもつためのプロセス〉

予想をもとに、調べ学習をして情報を集め、その情報から自分の意見を形成する。個人で調べ学習を行うことで、「問い」の工夫Ⅰとして、学習内容を自分事と考えることができ、めあてや課題をより引き受けることができる。そして、その自分で調べた情報を整理・分析する時間を設定することで、根拠のある自分の考えをもつことができ、このように形成された考えを対話によって再考、再検証することで深い学びが実現させると考えるため、重要なプロセスである。また、整理・分析の段階で思考ツールを用いた。実践1ではマトリクスを中心に、実践2では演繹的な思考シート、帰納的な思考シート等を活用した。思考ツールは必要に応じてではあるが、自分の考えを表現することが不得手である学習者が思考ツールを用いることで、考えを図で表し、文章化できたことから、学習者が思考を整理し、必要な要素を取捨選択しながら、自分の考えを形成する上で有効であるといえる。

〈⑤思考の活性化の場面設定〉

既習知識等を用いて課題に対する「答え」を予想し、調べ学習等を通して自分の考え（「答え」）をもつ、その上で必要なのが、それを再考したり、再検証したりする手立てやプロセスだと考える。広い視野をもち、社会事象を多面的・多角的に考察し、主体的によりよい社会を形成していくための資質・能力を育成するためには、様々な資料やデータ、他者の考えと自分の考えを比較して、より妥当性のあるよりよい考えを構築していかなければならないからだ。

それ故に、実践1、2ともに、グループで他者と自分の考えを交流する場面、全体で考えを共有したり、議論したりする場面を取り入れた。どちらの実践でも、グループでは自分の考えにより確かな根拠をもったり、自分の考えを練り直したりする様子が見られた。また、全体共有の場面では議論が生まれ、単元の目標に迫っていく姿があった。

さらに、実践1では男女格差に関するもの、経済格差に関するものなど様々な資料を適宜提示することで、多面的・多角的な思考を促した。実践2では、今考えている課題よりも根本的な課題に迫る発問をすることで（実際には全体共有の場面で、学習者より同趣旨の意見が出され）、学習者の思考の活性化を狙った。どちらも、学習者は困惑した表情を見せながらも、懸命に自分の考えを見つめ直していた。

学習者の思考を狭めたり、阻害したりしないように吟味する必要があるが、このように「問い」の工夫Ⅱは深い学びを実現させるために不可欠なものであると考える。

〈今後の取組について〉

以下の4点を中心に取り組み、授業改善を行い、学習者の資質・能力を育成していきたい。

- (1) より学習者の思考に沿うとともに、社会と繋がったパフォーマンス課題に取り組むなど、公民的な資質・能力を育成するための単元を考え、めあてや課題を設定する（「問い」の工夫Ⅰ）。
- (2) 教材研究（資料研究）も含め、より学習者の思考を活性化させる手立てやプロセスを蓄積していく。また、社会的な見方・考え方を明確に設定する（「問い」の工夫Ⅱ）。
- (3) 単元の効果的なタイミングで単元のめあてや課題を視点に、しっかりと振り返る場面を設定したい。そのことで学習者にそれまでの学びをメタ認知させ、形成的評価をさせることで、深い学びを実現し、学びに向かう力等の資質・能力を育成していく（「問い」の工夫Ⅰ、Ⅱ）。
- (4) 情報の確かさを見極めたり、主張に有効な資料を吟味したりするなど、調べ学習の質の向上に向けた手立てを考え、実践する。

1 取組の実際

実践事例 1

- ① 単元 $y = ax^2$
- ② 対象学年 3年生
- ③ 単元設定の理由

〈単元について〉

関数の学習では、1、2年時に、関数関係に着目し、その特徴を表、式、グラフを相互に関連付けて考察する力を高めてきている。本単元では、この学習の上にたち、具体的な事象における二つの数量の変化や対応を調べることを通して、関数 $y=ax^2$ について考察していく。その際、表、式、グラフを相互に関連付けながら、変化の割合やグラフの特徴など関数の理解を深めていく。また、関数は具体的な事象との関わりの中で学習することが大切であり、 $y=ax^2$ を具体的な事象の中で捉えて考察し、表や式、グラフに表現できる技能を身につけさせる。表現する際には、事象を理想化したり単純化したりすることで関数 $y=ax^2$ とみなして事象を捉え、問題を解決することができるようにする。事象を論理的に考察したり、数学的な表現を用いて的確に表現したりする力を養う重要な単元である。

〈学習者について〉

本学年では、数学の授業において意欲的に取り組む学習者が多く、計算力も高い学習者が多い。授業中、積極的に挙手や発言を行う姿も見られるが、考え方や理由などを問う場面では活発な意見が出されることが少ない。また、苦手意識を持っている学習者も各クラスにおり、得意、不得意の差が大きく、定期テストの結果でも二極化の傾向にある。レディネステストでは、関数に関する基本的な知識・技能については多くの学習者が理解できていたが、身の周りの事象を関数として捉え、解決する問題については正答率が低い状況であった。同様の傾向が本学級でも見られ、得意な学習者と不得意な学習者との差が大きくなってきている。本単元については、基本的な学習内容については理解できている学習者がほとんどだが、具体的な事象の中で関数関係を見だし、解決することについては、苦手意識をもつ学習者が多いと考えられる。

〈指導・「問い」の工夫について〉

指導に関しては、前時の内容を振り返ったり、必要に応じて一次関数の学習内容を振り返り、関数 $y=ax^2$ の特徴と比較したりしながら、理解を深めていきたい。本単元では、現実世界の具体的な事象を扱った問題を、関数として捉えることで解決する活動を通して、関数の有用性を感じさせていく。その際、予測や考えを比較・検討したり、説明しあったりする活動を仕組み、友達の考えを自分の考えの参考にしたり、自分の考えに自信をもたせたりすることで活発な意見交換をさせていきたい。また、いろいろな考え方に触れることで事象の考察を深めさせたい。「問い」の工夫Ⅰを通して学習者が主体的に学ぶことができるよう発問をし、苦手意識を取り除いていきたい。また、「問い」の工夫Ⅱとして数学的な見方・考え方を働かせる場面を設定し、思考、態度の変容を促したりするように発問をしていきたい。これらの「問い」の工夫を適切に仕組むことにより、学習者が事象を数学化したり、関数として捉え、数学的に表現したりするなど、深い学びにつながることを期待している。

④ 単元の目標

具体的な事象の中から二つの数量を取り出し、それらの変化や対応を調べることを通して、関数 $y=ax^2$ について理解するとともに、関数関係を見だし表現し考察する能力を伸ばす。

- ア 事象の中には関数 $y=ax^2$ としてとらえられるものがあることを知ること。
- イ 関数 $y=ax^2$ について、表、式、グラフを相互に関連付けて理解すること。
- ウ 関数 $y=ax^2$ を用いて具体的な事象をとらえ説明すること。
- エ いろいろな事象の中に、関数関係があることを理解すること。

⑤ 単元の評価規準

ア	イ	ウ	エ
数学への関心・ 意欲・態度	数学的な見方や 考え方	数学的な技能	数量や図形などに ついての知識・理解
いろいろな事象と関数に 関心をもち、表やグラフ などで表したり、その特 徴を考えたりしようとし ている。	具体的な事象の中から見 出した関数関係を既習の 関数関係と比較し、その 特徴を考えることができ る。	具体的な事象の中から見 出した関数関係を、表、 式、グラフなどを用いて 表すことができる。	具体的な事象の中には、 関数 $y=ax^2$ とみなすこと で変化や対応の様子につ いて調べたり、予測した りできるものがあること を理解している。

⑥ 単元指導計画（総時数 2 / 6 時間）

時 間	めあて 課題	学習活動	「問い」の工夫	振り返り まとめ	評価 規準	評価 方法
単元のめあて 身のまわりの事象から関数関係を見つけ、その関係を利用して問題を解決しよう。						
1	自動車の速さと 制動距離は、どの ような関係にな っているか。	ある自動車の速さと制動 距離の関係を表したグラ フから、速さと制動距離の 関係を式に表す。	I : 身のまわりの事象 の問題を扱い、ICT な どを用い、イメージを もたせ、問題、課題を つかませる発問を行 う。	自動車の速さを時速 x km、制動 距離を y m とすると、速さが2倍 3倍となると、制動距離は4倍9 倍になるので、 $y=ax^2$ の関係になっている。	イ	・観察 ・発表 ・ノート
2 本 時	電車が自転車に 追いつく時刻は どのような方法 で求められるか。	x 秒間に進む距離を y m とした時、関数 $y = a x^2$ の関係で表された電車が 一次関数の関係で表され た自転車に追いつく時刻 を、表、式、グラフを用い て求める。	I : 考えを整理させ、 どうすれば解決でき そうか見直しをもた せる。 I : 振り返り問題や振 り返りを行わせ、次時 につなげる。 II : 対話的な学びを通 じて多様な考えに触 れ、自分の見方を増や したり、新たな考え方 につなげたりする。 II : 表、式、グラフを 相互に関連付けさせ るための発問を行う。 II : どの方法が良いと 思ったか聞き、全体で 交流する。 II : 「何ができるよう になったか」「調べて みたいことは何か」な どの視点で振り返り を行う。	電車と自転車の、速度と時間の関 係を関数として捉え、表、式、グ ラフに表すことで求めることが できる。	ア イ	・観察 ・発表 ・ノート
3	振り子の周期と 振り子の長さは、 どのような関係 になっているか。	振り子の実験を行い、周期 と長さの関係を、表、式、 グラフから考察する。	II : 表、式、グラフを 相互に関連付けさせ るための発問を行う。 II : どの方法が良いと 思ったか聞き、全体で 交流する。 II : 「何ができるよう になったか」「調べて みたいことは何か」な どの視点で振り返り を行う。	振り子の周期を x 秒、振り子の長 さを y cm とすると、①周期が2 倍3倍になると、長さは4倍9倍 になるので、その関係は $y = a x^2$ の関係になっている。②周期と 振り子の関係をグラフに表すと、 放物線になるので、その関係は $y=ax^2$ の関係になっている。	イ	・観察 ・発表 ・ノート
4	2つの駐車場の どちらに駐車す るほうが料金か お得になるか、そ の理由をどのよ うに説明できる か。	2つの隣接している駐車 場の時間と料金の関係か ら時間によって、どちらが お得であるかその理由を 「根拠」と「成り立つ事柄」 を明らかにして説明する。	II : 「何ができるよう になったか」「調べて みたいことは何か」な どの視点で振り返り を行う。	2つの駐車場の駐車時間 (x) と 料金 (y) の関係のグラフから、 全ての時間帯で駐車料金 y の値 がA駐車場の方が小さいので、お 得になることがいえる。	ア イ	・観察 ・発表 ・ノート
5	「関数 $y=ax^2$ 」の 学習を活用した 入試問題にチャ レンジしよう。	入試問題を教材として「関 数 $y = a x^2$ 」の学習を用 いて考察し、問題を解決す る。			イ	・観察 ・プリント
6	「関数 $y=ax^2$ 」の まとめをしよう。	関数 $y=ax^2$ のいろい ろな問題を解く。			ウ エ	・観察 ・発表 ・プリント

⑦ 本時案

(1) 題材 $y=ax^2$ の利用

(2) ねらい ・具体的な事象の問題を、表、式、グラフを使って話し合ったり、説明し合ったりする中で、多様な考えに触れる。
 ・関数 $y=ax^2$ とみなして解決することができるようにする。

(3) 本時における「問い」の工夫

I：学習者が主体的に学んだり、見通しをもったりするための発問や手立て

II：数学的な見方・考え方を働かせたり、思考、態度の変容を促したりするような発問や手立て

(4) 展開

学習活動	時	指導・留意点	期待される学習者の反応	備考
1. 本時の学習内容を確認する。	10	<p>○これまで学習してきたことを確認し、動画を見せる。</p> <p>・止まっている電車が動き出す動画を見せ、速さが一定ではなく、だんだん速くなるイメージをもたせる。</p> <p>I：電車の速度はどんなふうに変化しているかな？</p>	<p>・だんだん速くなっている。</p>	<p>・PC</p>
<p>【問題】 駅に電車が止まっており、自転車が電車の後方から一定の速さで走ってきた。電車は出発と同時に自転車に追い越されたが、しばらくすると自転車に追いついた。電車が自転車に追いつくのは何秒後でしょうか。</p>				
2. 課題について個人で考える。	5	<p>I：他に何が分かれば求められそうかな？</p> <p>○他に何が分かれば求められそうか考えさせ、見通しをもたせる。</p> <p>○2つの関数を考えると解決できそうだと感じさせる。</p> <p>○電車と自転車の進む距離と時間を5秒後まで表で提示する。(電車 $y=1/5x^2$) (自転車 $y=5x$)</p> <p>I：自転車は何秒ぐらい電車に勝ち続けそうかな？</p>	<p>・速さが分かればいい</p> <p>・時間と進む距離が分かればいい</p> <p>・グラフが分かればいい</p> <p>・式が分かればいい</p>	
3. 考えをグループ・全体で交流する。	25	<p>課題 自転車は何秒後に電車に追いつかれるかはどのような方法で求められるだろうか。</p> <p>○個人で自由に考えさせる。</p> <p>・必要であればグラフ用紙、電卓も使ってよいことを伝える。</p> <p>○個人で考えた後、グループで考えを交流させる。</p> <p>○自分の考えをもてた学習者は班員に考えを説明する。</p> <p>II：他に求める方法はないかな？</p> <p>○友達の考えを自分の考えの参考にさせる。</p> <p>○考えに自信がない学習者は助言をもらって自分の考えに自信をもたせる。</p> <p>○他の考え方はないか考える。</p> <p>○全体で考えを交流させ、多様な考えに触れさせる。</p> <p>・表、式、グラフ、それぞれを用いた解決方法を説明させる。</p>	<p>・他の方法でも考えてみようとする姿</p> <p>・友達の考えを参考にしようとする姿</p> <p>・他の考えと比較・検討し、どちらの方法がいいか考える姿</p>	<p>・グラフ用紙</p> <p>・電卓</p> <p>◇個人</p>
4. まとめを行い、本時の振り返りを行う。	10	<p>まとめ 電車と自転車の、速度と時間の関係を関数として捉え、(表、式、グラフ)に表すことで○○秒後と求めることができる。</p> <p>○どの方法がよりよいか考えさせる。</p> <p>II：どの方法で求めるのがいいと思いますか？</p>		<p>【考】 具体的な事象を関数 $y=ax^2$ でとらえ、それを利用して問題を解決できる。(観察・発表・ノート)</p> <p>◇グループ</p>

	<p>○表, 式, グラフのそれぞれのよさを考えさせる。</p> <p>振り返りの視点：何ができるようになったか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・追いつく時間を求めるには, 関数を使えばいいことが分かった。 ・グラフをかくと見やすく分かりやすかった。 ・式を使えば連立方程式を使って解決できる。 ・関数の考え方を使えば簡単に解決できる。 ・他の問題も考えてみたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・式を使う方が早い ・グラフをかくと見た目分かりやすい ・表は手間がかかる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート ◇個人
--	---	---	--

(5) 板書計画

課題 自転車は何秒後に電車に追いつかれるだろうか。

自転車

x					
y					

電車

x					
y					

表を使った考え

式を使った考え

グラフを使った考え

振り返り
何ができるようになったか

まとめ

電車と自転車の, 速度と時間の関係を関数として捉え(表, 式, グラフ)に表すことで○○秒後と求めることができる

⑧ 結果と考察

今年度は, 深い学びを生み出す「問い」の工夫について, 研究を進めてきた。本研究を通して, 数学科で深い学びを生み出す「問い」について, 学習者が主体的に学んだり, 見通しをもったりするための発問や手立てを「問い」の工夫Ⅰ, 数学的な見方・考え方を働かせたり, 思考, 態度の変容を促したりするような発問や手立てを「問い」の工夫Ⅱと位置づけ, 研究をすすめてきた。

本単元は, 関数領域の最後に位置付けられており, これまでに学んできた関数では捉えられない数量の存在に気づき, 変化の様子やその特徴を表や式, グラフで捉えることにより, 関数的な見方や考え方をさらに伸ばす単元である。単元を通して, 授業の中で, 学習者の生活に身近な教材を扱ったり, 考えを整理させたり, 収束させたりしていくような投げかけを行い, 見通しをもたせ, 主体的に学ぶ工夫を行った。また, 理由や根拠を考えさせたり, 新たな方法や, 思考と思考をすり合わせるような投げかけを行い, 数学的な見方・考え方を働かせたり, 思考・態度の変容を促したりする工夫を行った。本時でも, 実際の映像で, 電車と自転車の速さの変化に注目させ, 時間と距離に焦点を当てたり, 追いつく時間を予想させたりして, 事象を関数として捉えさせ, 変化の仕方や考えを整理したりすることで見通しを持たせることにつながったと考える。また, 速さの変化の仕方や距離から, これまでに学習した関数と結び付けて考えさせ, 予想した根拠や理由を交流させることで多様な考えに触れ, 自分の考えをさらに深めたり, 多面的に考察したりすることにつながったと考える。

「問い」の工夫は新しいことを何か取り入れるのではなく, 以前からやってきたことと大きく変わるものではない。これまでやっていた取り組みに, 「問い」の工夫を明確に位置付け, 単元を作成したり, 教師側が意識して指導したりしていくことで, 学習者は深い学びを生み出していく可能性は大いに感じる事ができた。

単元「 いろいろな関数の利用 」

①単元の目標は何か（資質・能力）

身のまわりの関数 $y=ax^2$ の事象について、具体的な事象の中から二つの数量を取り出し、それらの変化や対応を調べることを通して、関数関係を見いだし考察・表現できるようにする。

④問題意識を持たせるために、どのような導入を図るか（③を届けるために）

「問い」の工夫Ⅰ

（学習者が主体的に学ぶための工夫）

それぞれの学習内容において、見通しをもたせたり、日常生活や社会の現象をできるだけ身近にイメージさせたりするような発問や声掛けを行う。

⑥使える資料は何か。どこで使うか。

共通教材
教科書
基礎の学習

③どのようなめあて、課題にするか

- a 自動車の速さと制動距離は、どのような関係になっているか。
- b 振り子の周期と振り子の長さは、どのような関係になっているか。
- c 電車が自動車に追いつく時刻を求めるにはどうすればよいか。
- d 2つの数量の関係を表す式はどのように表せるか。
- e どちらの駐車場の料金がお得になるかをどのように説明すればよいか。

⑦まとめの表現活動をどうするか

何を学習したのか
確認する場としての
の振り返り

⑤どんな追及活動を行わせるか（言語活動含む）

- a ある自動車の速さと制動距離の関係を表したグラフから、速さと制動距離の関係を式に表す。
- b 振り子の実験を行い、周期と長さの関係を、表、式、グラフから考察する。
- c x 秒間に進む距離を y m とした時、関数 $y=ax^2$ の関係で表された電車で1次関数の関係で表された自転車に追いつく時刻を求める方法を「用いるもの」と「用い方」を明らかにして説明する。
- d 指数関数の変化の特徴を実感し、その変化や対応の様子をとらえて問題を解決する。
- e 2つの隣接している駐車場の時間と料金の関係から時間によって、どちらが得か、その理由を「根拠」と「成り立つ事柄」を明らかにして説明する。

「問い」の工夫Ⅱ

（各教科の見方・考え方が動く工夫）

身のまわりの事象から関数関係を見つけ、その関係を利用して問題解決に取り組みさせるための発問や授業形態の工夫。

（個人、グループ学習）

（思考、態度の変容が見られる工夫）

「関数 $y=ax^2$ の学習を通して、何ができるようになったか」「新たに調べてみたいことは何か」など振り返りの工夫。

②単元の最後に理解させたいこと、発言させたいことは何か

（単元のゴール+振り返りの視点）

- ・車の制動距離が時速の2乗に比例することから、式を用いて与えられた速度を代入すると、停止距離が求められる。
- ・交通機関や郵便物の料金など、二つの数量の関係を式で表すことが困難な場合でも、表やグラフを用いて変化や対応の様子を調べると判断することができる。

実践事例 2

① 単元 4章 平行と合同 2節 平行線と角

② 対象学年 2年生

③ 単元設定の理由

〈単元について〉

これまでの算数・数学の図形の学習では、主に直観的な取扱いをしており、それを通して、図形を直観的に捉える力を高めてきている。本単元では、既習の知識を論証の対象として扱い、それぞれの必要性和意味について理解できるようにするとともに、必要な場面に応じて適切に用いることができるようにすることが求められている。論証によって図形の性質を調べることが取り扱うはじめての単元であることを鑑み、学習者が見いだしたこと、確かめたこと、そして工夫したことなどを数学的な表現を用いて論理的に説明し伝え合う活動を行う必要がある。この学習を通して、論理的に考察し表現することのよさを実感できるようにする。

〈学習者について〉

本学年の学習者は、基本的な図形の性質等について理解している。4月に行われた大分県学力定着状況調査の図形領域において正答率83.5%（目標値57.4）であり、図形についての豊かな感覚をはぐくみ、図形についての理解を深めてきたといえる。また扇形の弧の長さや面積、基本的な柱体、錐体及び球の表面積と体積などを求める計算力も高い学習者が多いといえる。一方、数学的な用語を正しく理解できていないことが課題である。定期考査の説明を求める設問において、誤った用語の用い方をしている答案が見られた。また方法の説明における「何を用いたか」、理由の説明における「正しさを示す（根拠）」の記述が不十分であることも少なくない。これらの学習者は、解答に導くことが得意であっても解き方の説明や自分の意見を自主的に述べることができている。小集団なら良いが全体の場で発表するのは苦手とする学習者もいる。「問題を解くのは良いが、説明は苦手だ。」という学習者は、自分の考えに自信が持てなかったり、正しい意見を言わなくてはいけないと身構えたりすることを理由に挙げている。授業において、「何を説明するのか」を明確にし、そのために「どんな準備（情報）が必要か」を考える場面を多く設定する必要がある。

〈指導・「問い」の工夫について〉

「平行線と同位角」「対頂角は等しい」の2つの事柄からいろいろな性質を演繹的に導く、既習の知識を体系的に理解できるように単元計画を立てた。そこで角の大きさを求める場面では、興味・関心を引き出すような題材を通して、角の大きさを求めるだけでなく、その過程で何を根拠として説明するかを考えさせる（「問い」の工夫Ⅰ）。さらに解決の過程や結果といった活動の学びの中で、式を用いて一般化する必要性を感じさせたり、より複雑な図形においてどの解法が使えるか検討したりする機会（統一的・発展的な学習活動）を設定する（「問い」の工夫Ⅱ）。数学的な見方・考え方を豊かにし広く働かせようとする思考・態度の変容を促すために、図形の性質に着目して図形の特徴や本質を捉え、論理的に考えながら解決過程を振り返る活動を授業に位置付ける。

また、この単元より事柄・事実を説明する学習内容が本格的に始まることになる。また次の単元「証明」につなげるために推論の過程を正確に、しかもできるだけ簡潔・明瞭に表現することができるようにしたい。根拠を明らかにして説明し伝え合う活動を通して、推論の過程を自分なりに工夫して他者に分かりやすく表現することを大切にする。そのために「ゆえに」、「または」、「かつ」、「したがって」、「一方」、「よって」などの言葉や用語、記号を積極的に使うことを促す。自分が納得できるとともに他人に説得できるように導いていく。

④ 単元の目標

観察、操作や実験などの活動を通して、基本的な平面図形の性質を見だし、平行線の性質を基にしてそれらを確認することができるようにする。

ア 平行線や角の性質を理解し、それに基づいて図形の性質を確認説明すること。

イ 平行線の性質や三角形の角についての性質を基にして、多角形の角についての性質が見いだせることを知ること。

⑤ 単元の評価規準

ア	イ	ウ	エ
数学への関心・意欲・態度	数学的な見方・考え方	数学的な技能	数量や図形などについての知識・理解
図形の性質や角の大きさを求めることに関心を持ち、いろいろな方法で確かめたり、求めようとしたりしている。	平行線の性質、三角形の角についての性質をもとに、補助線をひく等をして論理的に考察し表現することができる。	平行線の性質、三角形の角についての性質をもとに角の大きさを求めたり、用語を用いて説明したりすることができる。	平行線の性質、三角形の角についての性質を体系的に理解することができる。

⑥ 単元指導計画（総時数 4/6 時間）

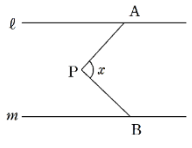
時間	目指す子どもの姿（振り返り）	学習活動	「問い」の工夫（めあて・課題）	振り返りまとめ	評価規準	評価方法
<p>小単元のめあて：いままで具体的な操作で説明していた図形の性質を、平行線と同位角、対頂角の性質をもとにして説明する活動を通して体系的に整理しよう。</p>						
1	対頂角は等しいことを、理解する。 同位角、錯覚の意味を理解する。	対頂角が等しいことを論理的に筋道を立てて説明する。	I, 2直線が交わってできる対頂角が等しいことを説明するにはどうしたらよいか。 II, 身の回りの対頂角はどうだろう。	2直線が交わってできる角を文字でおく。隣り合う角の和が 180° になることを用いる。	ウエ	ノート 発表 話し合い
2	平行線と同位角の性質を理解する。 平行線と錯角の関係を理解する。	平行線と錯角の関係を平行線と同位角、対頂角をもとにして説明する。	I, 2つの性質をどのように使えばよいか。 II, 逆もいえるか。	$A=B, B=C$ ならば $A=C$ (ユークリッド原論)もう一方も同様におこなう。	ウエ	ノート 発表 話し合い
3	三角形の外角は、隣り合わない2つの内角の和に等しいことを見出すことができる。	三角形の内角の和が 180° であることを平行線と同位角・錯角の性質をもとにして説明する。	I, 合同な三角形を敷き詰めた図からどのようなことがいえるか。 II 発見したことがらが正しいことをいうための根拠はなんだろう。	三角形の内角の和同位角等しい平行線より3つの角の和直線 180° に等しいことを示す。同様に外角の定理もできる。	ウエ	ノート 発表 話し合い
4 本時	角の大きさの求め方を補助線や根拠となる図形の性質を示しながら説明できる。	平行線と折れ線の角の大きさの求め方を説明する。	I, 図形にどのように補助線をいれればよいか。 II, 点P動かしても同様に考えることができるだろうか。	点Pが2直線の内側にあるときできる。 点Pが外にあるときは、 $a-b$ または $b-a$	アイ	ノート 発表 話し合い
5	既習の内容から角の大きさを求めることができる。	三角形の内角や外角の性質を根拠として角の大きさの求め方を説明する。	I, 角の大きさは、どのような性質をもとにして求められるか。	平行線や三角形を手掛かりにどの性質を使うか判断する。	ウエ	ノート 発表 話し合い
6	これらの性質を使っているいろいろな図形の性質を説明したい。	まとめの練習 ※小単元テスト	II, 「見いだした平行線や三角形の角にはどのような性質がありましたか	「対頂角の性質」 「平行線の性質」 「平行線になる条件」 「三角形の内角・外角の性質」がある。		ノート テスト

⑦ 本時案

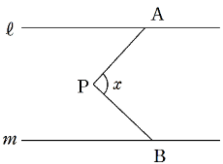
- 題材 平行線と角（4/6）
- ねらい 点Pの位置を変えたときの角の求め方を、点Pが平行な2直線の間にあるときと外側にあるときの求め方を比較する活動を通して説明できるようにする。
- 本時における「問い」の工夫

- I, 学習者が主体的に学ぶための発問や課題を持たせるための発問（点Pを動かしても $a+b$ になるかにつながる発問）
- II, 数学的な見方・考え方を働かせたり、思考、態度の変容を促したりする発問や手立て（どんな性質を根拠にしたかを考えさせる発問）

(4) 展開

学習活動	時	指導上の留意点	期待される学習者の反応	備考
単元を通したためて : 説明し合う活動を通して, 図形の性質をとらえよう				
1. 本時の学習内容を確認する。	5	<p>平行な2直線 l, m とそれぞれの直線上に A, B があります。</p> <p>このとき, $\angle x$ の値を求めなさい。</p>		
2. 課題について, 考えを持つ。個人またはペア	10	<p>○問題を提示する。</p> <p>○xを求めるためにどんな情報が必要か。Ⅰ</p> <p>○使えるのはどんな知識か。Ⅰ</p> <p>○着目するのはどこか。Ⅰ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・AとBの角度が必要。28と55 ・平行線に着目したら… ・錯角や同位角が使える。 83°になる。(どうして?) 	WS①
3. 自分の考えを説明する。他者の考えに触れる。	5	<p>○個人でいろいろな方法を試させる。</p> <p>○個人でじっくり考えてもペアで話し合っても良いことを伝える。</p> <p>○「どのように補助線引いたか」板書させる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・l, mに平行で点Pを通る直線をひく。 $x=28+55$ ・垂線を引く。 ・PB (PA) の延長線をひく。 ・ABを通る直線をひく。 ・この補助線のひき方では, どう解くのだろう。 ・この方法は, わかりやすい。 ・変わる⇒文字で表す (a, b) ⇒一般化 ・使える。使えない場合があるのでは? ・いろいろな図をかいてみよう。 	<p>・平行線と角の性質</p> <p>・三角形の内角の和</p> <p>・三角形の外角の性質</p>
4. いろいろな場合を試し, 課題を解決する。個人・グループ等	15	<p>○それぞれの見方における解き方を発表させる。</p> <p>○簡潔・明瞭・的確の視点を持たせる。</p> <p>○平行線, 延長線の考え方の良さを持たせる。Ⅰ</p> <p>○点Pを動かしたら28や55はどうなるか。Ⅰ</p> <p>○点Pを動かしたとき28+55になる考え方は, いつも使えるのだろうか。Ⅰ</p>	<p>【課題】点A, Bを固定して, 点Pを動かしたとき $\angle x$ の大きさは, いつも和になるといえるか。(どんなときいえる? どんなときいえない?)</p>	<p>WS②</p> <p>【見方・考え方】点Pの位置を場合分けして, 演繹的に説明することができる。</p>
5. 意見を交流し, まとめる。	10	<p>○どんなときをかんがえればいだろうか。Ⅰ</p> <p>○点Pを動かした図をかき, 場合分けを提示する。</p> <p>○個人でじっくり考えても仲間と一緒に考えても良いことを伝える。(立ち歩き自由)</p> <p>○言えない場合はどんなときかを考えさせる。Ⅱ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・文字で一般化して説明しよう。 ・点Pが平行線の中にあれば… ・l上やm上に動かしたら… ・2直線の外に出たら… ・abの角度の設定が変わるから言えない。 	
6. 振り返りを行う。	5	<p>【まとめ】2直線 l, m が平行のとき,</p> <p>点Pが2直線の間にあるときは, $\angle x = a + b$ となる。</p> <p>点Pがmの下にあるときは, $\angle x = a - b$,</p> <p>点Pがlの上にあるときは, $\angle x = b - a$</p>	<p>視点: どんな見方・考え方を増やすことができたか。さらに考えてみたいこと。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・別と思っていた図形も同じように解けそう。 ・この性質を根拠に説明できた。 ・形がちょっと違っていても点Pの位置で見分ければ解くことができそう。 	ノート

(5) 板書計画

<p>平行線と角④ 見方・考え方</p> <p>問題</p>  <p>どんな情報が必要か どこに着目するか</p>	<p>どのように考えたか <方法> 学習者の多様な考え方</p>	<p>課題</p> <p>点A, Bを固定して, 点Pを動かしたとき $\angle x$の大きさは, いつも和になるといえるか。</p>	<p>どのような場合を 考えるのか。 その場合一つ一つ を検証</p> <p>まとめ</p> <p>2直線 l, m が平行のとき, 点Pが2直線の間にあれば, ... 点Pが m の下にあれば, ... 点Pが l の上にあれば, ...</p>
--	--	--	---

⑧ 結果と考察

I, 学習者が主体的に学ぶための発問や課題を持たせるための発問として, 点Pを動かしても $a+b$ になるかにつながる発問を位置づけた。本時の取り組みは, 2本の平行な直線と点Pの変化をいろいろと調べることにより証明の一般性を感じ取れるのではないかという思いで実践をした。

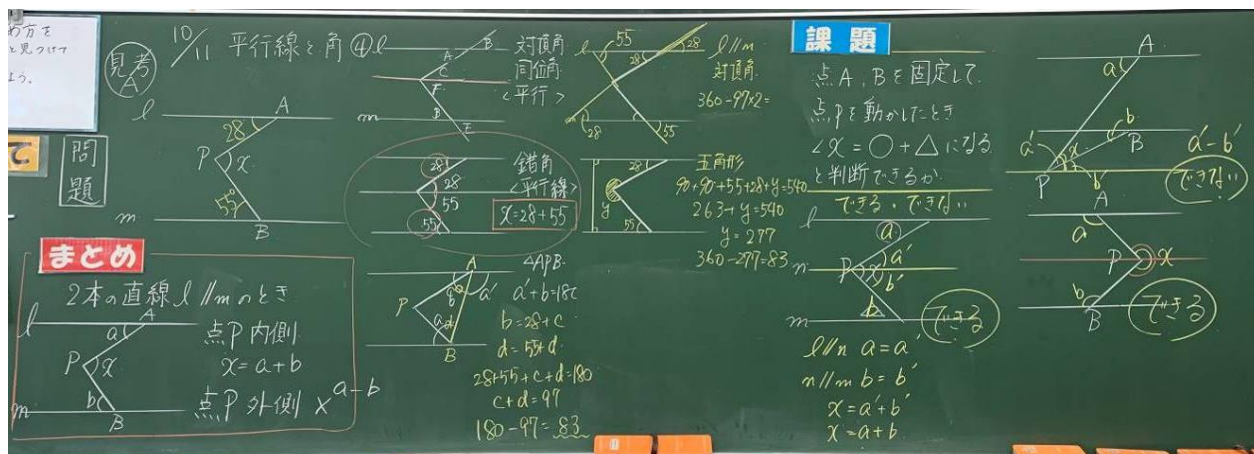
学習者が「この場合は～」と場合分けをしながら, 物事の特徴や本質を捉える視点や思考の進め方や方向性を豊かにすることができたと感じる。また具体的な数値で考えたときの考え方のうちの考え方が使えそうかを判断することもできたと感じる。

このように数学的な見方・考え方を働かせるための「問い」として深い学びにつながるものであったと考える。

一方で「何を」「どのように」動かすのかなど一部しぼりを設けて考えたのでレポート活動を通して2本の平行線を動かすことやAとBを動かすことなどの考え方にも触れさせていきたい。

II, 数学的な見方・考え方を働かせたり, 思考, 態度の変容を促したりする発問や手立てとしては, 情報収集活動と説明し合う活動を取り入れて, どんな性質を根拠にしたかを考えさせるように心がけた。「別の問題と思っていた図形なのに同じ図形として考えることができるんだとわかった」「今度はAやBを動かしたらどうなるかな」「友達に聞いてわかった」などの振り返りがあり, 学習者の変容を感じることができたことで深い学びにつながったと考える。

一方, 学習者が出す解法のアイデアを比べ合う時間を多くとることができなかったことが課題である。適切な授業時間の配分など意識していく必要がある。



実践事例3

- ① 単元 5章 平面図形 2節 基本の作図
- ② 対象学年 1年生
- ③ 単元設定の理由

〈単元について〉

私たちの身の周りは様々な図形がある。身の周りにある図形について、「形」「大きさ」「位置関係」という観点で考察することは、数学的な思考力、判断力、表現力を養ううえで大切である。小学校算数科では、ものの形についての観察や構成などの活動を通して、図形を構成する要素に少しずつ着目できるようにしている。三角形や四角形、二等辺三角形や正三角形、平行四辺形や台形、ひし形などについて理解し、図形の合同、縮図や拡大図及び図形の対称性について学んでいる。中学校数学科において本単元では、平面図形の対称性に着目することで見通しを持って作図し、平面図形の性質や関係を直観的に捉え論理的に考察し表現する能力や態度を養っていくことが求められる。また、図形の移動について理解し、二つの図形の関係について調べることを通して、図形に対する見方を一層豊かにする重要な役割を果たす。このような学習を通して、第2学年以降における図形の証明や図形の合同における論理的な考察や表現することへの関心と意欲を高めていきたい。

〈学習者について〉

本学級の学習者は元気で明るく、数学の授業において話し合い活動を活発に行うことができ、意欲的に取り組む学習者が多い。計算力は高く、積極的に挙手や発言を行う姿もみられる。しかし、説明を求める際には消極的な姿がみられる。また得意、不得意の差が大きく、定期テストの結果でも二極化の傾向にある。本単元についてはアンケートから、作図の基本は理解している学習者が9割を超え、苦手意識を持っている学習者はごく少数である。また、NRTの分析でも平面図形の領域で非常に高い正答率であった。しかし、今後作図を組み合わせることの見通しを持つことに苦手を感じる学習者が出てくると考えられる。

〈指導・「問い」の工夫について〉

指導に関しては、前時の内容を振り返ったり、基本的な作図の仕方を掲示したりするなどして、既習事項を確認させながら理解を深めていきたい。その際には、数学的用語を使うことを意図しながら授業をすすめたい。また、様々な考え方が予想される課題を用いて自分の考えを伝えあったり、数学に対する苦手意識を持っている学習者の手助けになるよう教え合ったりする場面を設定する。そこで、どの学習者にも「わかった」「できた」という達成感を少しでも味わわせ、数学が苦手な学習者にも数学への興味・関心を高めるように工夫したい。学習のまとめでは、思考の過程や結果を自分の言葉でまとめさせ、学習内容の定着を図るとともに課題解決の達成感を味わわせる。「最後まで集中して授業に取り組むことができたか（粘り強さ）や、「他の人の意見を取り入れて考えることができたか」（調整力）等の項目から、主体的に取り組む態度の評価の参考にしたい。

本時では、『「問い」の工夫Ⅰ』として今まで作図した角度から法則性を見出させ、他にどのような角度がかけそうか問うことで全体での課題の共有をさせたい。また、『「問い」の工夫Ⅱ』では、 75° を既習の角度を用いて作図をするという見通しを持たせ、例えば $30^\circ + 45^\circ$ といった式を作らせることによって課題解決へつなげていきたい。

④ 単元の目標

- ア 知識及び技能
 - (ア) 基本的な作図の方法を理解すること。
 - (イ) 平行移動、対称移動及び回転移動について理解すること。
- イ 思考力、判断力、表現力等
 - (ア) 図形の性質に着目し、基本的な作図の方法を考察し表現すること。
 - (イ) 図形の移動に着目し、二つの図形の関係について考察し表現すること。
 - (ウ) 基本的な作図や図形の移動を具体的な場面で活用すること。

⑤ 単元の評価規準

ア	イ	ウ
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
平面図形についての性質や関係，基本的な作図の方法，平行移動や対称移動及び回転移動などを理解し，知識を身に付けている。また，基本的な作図をするなど，技能を身に付けている。	平面図形についての基礎的・基本的な知識及び技能を活用しながら，事象を見通しを持って論理的に考察し，その過程を振り返って考えを深めたりすることなどを通じて，考えたり判断したり表現したりしている。	様々な事象を平面図形などで捉えたり，それらの性質や関係を見出したりするなど，数学的に考え表現することに関心を持ち，意欲的に数学を問題の解決に活用して考えたり判断したりしようとしている。

⑥ 単元指導計画 基本の作図（総時数 7 / 7 時間）

時間	めあて・課題	学習活動	「問い」の工夫	振り返り・まとめ	評価規準	評価方法
単元のめあて 図形の作図の仕方を理解し，いろいろな作図ができるようになる。						
1	作図における定規とコンパスの役割と使い方を理解しよう。	弦や弧などの名称を知り，作図における定規とコンパスの役割と使い方を理解する。	I：小学校の作図の復習をしよう。 II：コンパスと定規は何をするための道具だろうか。	コンパスは一点からの距離が等しい点の集まりとして円をかくことができる。定規は直線を引くために使う。	ア	・観察 ・プリント
2	交わる2つの円にはどのような性質があるだろうか。	交わる2つの円の対称性から，性質を導く。	I：いろんな半径の2つの円をかかせる。 II：たこ形やひし形にはどのような特徴があったか。	・円の直径は対称の軸になっている。 ・2つの円の中心を通る直線はそれぞれの円の対称の軸になっている。 ・半径の違う2つの円が交わるとたこ形ができる。 ・半径の等しい2つの円が交わると，ひし形ができる。等	イ	・観察 ・発表 ・プリント
3	垂線の作図ができるようになる。	たこ形の対角線の性質をもとに，垂線の作図を理解し，垂線の作図ができる。	I：折り紙を使って性質を考えてみよう。 II：どうしてその作図で（垂線・垂直二等分線・角の二等分線）がかけるのだろうか。	垂線をかく手順を確認できた。	ア	・観察 ・ノート
4	垂直二等分線の作図を理解し，その作図ができるようになる。	ひし形の対角線の性質をもとに，垂直二等分線の作図を理解し，垂直二等分線の作図ができる。		垂直二等分線をかく手順を確認できた。	ア	・観察 ・ノート
5	角の二等分線の作図を理解し，その作図ができるようになる。	図形の対称性から，角の二等分線の作図を理解し，角の二等分線の作図ができる。		角の二等分線をかく手順を確認できた。	ア	・観察 ・ノート
6	円の接線はどのようにしてかくことができるだろうか。	円の接線の性質から，円の接線の作図の仕方を考え，説明する。	I：円の接線とはどんな性質があるか。 II：どこにどんな線をかけばよいか。	円の接線は，その接点を通る半径との垂線を作図すればよい。	イ	・観察 ・発表 ・プリント
7 本時	75° はどのような方法で作図できるだろうか。	基本的な作図を活用して，75° の作図の方法を考え，作図する。	I：既習の角度の他にどのような角度がかけそうか。 II：75° はどのようにしてかけばよいか。	60°，90°，角の二等分線の作図を組み合わせればよい。	ウ	・観察 ・振り返りシート

⑦ 本時案

- (1) 題材 基本の作図の活用
- (2) ねらい 角度の作図について、既習の作図の角度を組み合わせるとい見通しを持つことを通して、関心を持ち、意欲的に取り組もうとしている。
- (3) 本時における「問い」の工夫
 - I：今まで作図できた角度を確認し、他にどのような角度がかけそうか全体で共有する。
 - II：既習の作図を掲示し、既習の作図を組み合わせる作図すればかけそうかを確認する。

(4) 展開

学習活動	時	指導・留意点	期待される学習者の反応	備考
1. 前時までの学習を振り返る。	5	<p style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">めあて：角度の作図をしよう</p> <p>○今まで学んできた作図を振り返る。 ・今までどんな角度を作図することができたか問う。 ・法則性を問う。 I：他にどんな角度がかけそうかな？ ・15°はどのようにして作図できそうか問う。</p>	<p>90°（垂線）、60°（正三角形）、45°、30°（角の二等分線）</p> <p>・15の倍数である。 他に15°、75°、105°等 ・30°をさらに半分にすればよい。</p>	・掲示物
2. 本時の学習内容を確認する。	5	<p style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">課題：75°はどのような方法で作図できるだろうか。</p> <p style="border: 1px dashed black; padding: 2px; display: inline-block;">II：75°はどのように作図すればよいかな？</p> <p>○すでに学習している30°や45°を組み合わせればよいことを全体で確認し、見通しを持たせる。</p> <p>○30°+45°を作図させる。</p>	<p>(例)45°と30°を組み合わせればよい。</p>	・プリント
3. 課題について考える。 ・個人で考える。 ・ペアで考える ・全体で交流する。	3 3 5	<p>○ペアで考えてもよいことを伝える。</p> <p>○作図できている学習者を指名し、発表させる。</p> <p>○作図の方法を分析し、確認する。</p> <p>○その他作図の方法がないか、交流する。</p> <p>○30°+45°以外の方法で75°の作図をさせる。</p>	<p>・友達の考えを参考にし解決しようとする姿</p>	・実物投影機
・個人で考える。 ・ペアで考える。	5 5	<p>○ペアで交流してもよいことを伝える。</p>	<p>・他の方法でも考えてみようとする姿 ・他の考えと比較・検討し、どちらの方法がいいか考える姿</p>	【粘】75°の作図の仕方について粘り強く考えている。(観察・ワークシート)
4. 全体で共有し、まとめる。	15	<p style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">まとめ：60°、90°、角の二等分線の作図を組み合わせる作図すればよい。</p>		【調】学習者同士の多様な考えを認め合い、取り入れて活動している。(観察・ワークシート)
5. 振り返りを行う。	4	<p style="border: 1px dashed black; padding: 2px;">振り返りの視点：自分の考え方にどのような変化があったか。 ・15の倍数の角度なら、正三角形や垂直と角の二等分線を組み合わせれば作図できそう。 ・自分が知っている作図を組み合わせることで75°が作図できることがわかった。 ・いろいろな作図の仕方があることが分かった。等</p>		【調】自己の変容を感じることができたか。(観察・ワークシート)

(5) 板書計画

めあて 角度の作図をしよう！			まとめ 60° , 90° , 角の二等分線の作図を組み合わせて作図すればよい。	今までの作図
課題：75° はどのような方法で作図できるだろうか。				
45° + 30°	150° ÷ 2	15° + 60°	振り返り この授業でどのようなことができるようになったか	
作図	作図	作図		

⑧ 結果と考察

基本の作図の学びを、2つの交わる円の性質から垂線の作図や角の二等分線の作図などにつなげ、見通しや作図の方法について論理的に考察しようとする態度を身につけることを念頭に置いて、単元計画を作成した。

本時では、今までの作図を振り返り、角度に着目することで15の倍数の角度が作図できると推測場面から始めた。「他にどのような角度がかけそうか」という「問い」を自ら持つことができ、仲間と共有することができた。その中でも問題として「75°」の作図の方法について練り合う場面を作ることができた。結果、C層の学習者も見通しを持ち、活動出来ていたと考える。

<学習者の振り返り>

○75°の作図は、最初は垂線の左側の角度だけかこうとしていたが、左側に着目するという新しい視点をもつことができた。

○15の倍数の角を組み合わせることによって思った以上に作り方の種類があったので、驚き、考えるのがとても楽しかった。どの組み合わせをすると75°を考えることができるのかを考えるのが面白かった。

○他の人が、角をひき算したりかけ算したりしていてすごいと思った。豊かな発想だと思う。違う視点から見るともっと他のやり方が見つけられそうだと思う。

○75°をなるべくかんたんに書こうとするのがとても難しかった。でも、いろんな書き方が見つかってとても面白かった。

<結果と考察>

今年度は、「深い学びを実現させる『問い』の工夫」について、研究を進めてきた。数学においても、全体で課題を共有したり、深い学びにつなげたりするための発問や手立て等を仕組んでいくことで、見通しを持ったり疑問を持ったりすることが可能になると考える。

本時では、課題を共有する発問の段階で、15の倍数の角度が作図できると気づき、作図に取り組むことができていた。75°の作図ができるかという課題を学習者達自身が設定することにより、その後の活動で違う方向へ思考が流れる学習者は見られず、しっかりと課題に向かう姿勢が伺えた。その中で、すべての学習者が授業時間中に1つ以上の作図を行うことができていた。

問題解決に向かうための発問の課題として、この発言は課題そのままであるため、もっと内容に迫る発問でもよかったと感じた。また、その後の展開として、多種多様な作図を求めたことで、授業の収束が難しくなってしまった。例えば、 $(180^\circ - 30^\circ) \div 2$ の式から全体で作図を考えると、その中で様々な作図が生まれ、図形の色々な捉え方などにつながるのではないかと感じた。

単元「 平面図形 」

① 単元の目標は何か（資質・能力）

観察，操作や実験などの活動を通して，見通しをもって作図したり図形の性質について調べたりして平面図形についての理解を深め，論理的に考察し表現する力を身に付ける。

④問題意識を持たせるために，どのような導入を図るか（③を届けるために）

「問い」の工夫Ⅰ（学習者が主体的に学ぶための工夫）

それぞれの学習内容において，見通しをもたせたり，折り紙や自作の模型などの教具から操作活動を取り入れたりすることで，興味を持たせると共に，図形に触れさせる。

⑥使える資料

は何か。どこで使うか。

共通教材
教科書
基礎の学習

③どのようなめあて，課題にするか

- a 交わる2つの円にはどのような性質があるだろうか。
- b（垂線，垂直二等分線，角の二等分線）の作図を理解し，その作図ができるようになる。
- c 円の接線はどのようにしてかくことができるだろうか。
- d 75° はどのような方法で作図できるだろうか。

⑦まとめの表現活動をどうするか

何を学習したのか確認する場としての振り返り

⑤どんな追及活動を行わせるか（言語活動含む）

- a 交わる2つの円の性質を直感的に見付けさせ，その理由を説明させる。
- b aの性質とつなげ合わせ，なぜその作図で目的の図がかけられるのか考察させ，説明させる。
- c 円の接線の性質から作図の完成予想を立てさせ，どのようにしたらその作図が出来上がるのか，班で共有させる。
- d 75° を既習の角度を用いることによって作図できるという見通しを持たせ，作図に取り組ませる。

「問い」の工夫Ⅱ

（各教科の見方・考え方が働く工夫）

直感的な発想と既習の事実を関連付けた，理由の説明をさせる工夫。

（グループ活動等）

（思考，態度の変容が見られる工夫）

「図形や作図の学習を通して，何ができたようになったか」「新たに調べてみたいことは何か」など振り返りの工夫。

②単元の最後に理解させたいこと，発言させたいことは何か

（単元のゴール+振り返りの視点）

- ・平行移動，対称移動及び回転移動について理解し，二つの図形の関係について調べることができる。
- ・角の二等分線，線分の垂直二等分線，垂線などの基本的な作図の方法を理解し，それを具体的な場面で活用することができる。

2 数学科における成果と課題

① 数学科での共通理解

研究テーマ「深い学びを実現させる『問い』の工夫」を受けて、本校数学科では、主体性を生むための『問い』の工夫Ⅰ』と対話を生むための『問い』の工夫Ⅱ』の2つに整理をした。また単元計画には、算数・数学の問題発見・解決の過程（図1）を意識した発問を位置づけた。

授業研究を行う際には、どんな力をつけたいか（資質・能力）を明確にし、「深い学び」を生むためにはどうすればよいかをそれぞれがテーマを持ち、授業計画を立てることにした。

深い学びを目的として

数学的な見方・考え方を働かすことでより豊かにするために
子どもの知識構造や思考、態度の変容を実感させるために

「問い」の工夫Ⅰ（主体を生む）

学習者が、見通しを持ち、課題を見出すことができるような「問い」をどのように設定するか。（主体性）

例えば、「平行四辺形の2組の対辺はそれぞれ等しいことを証明しなさい。」の問題において、次のように見通しを持たせる発問を考える。

- A 数学の問題にするには…（図と記号が必要。こんな図をかいてみよう。）
- B どこに着目すれば…（ Δ と Δ の合同を証明すればいいのではないか。）
- D（他の性質もこの学習内容のように証明できるかもしれない。やってみよう。）

- A 日常生活や社会現象、数学の事象を数学化する発問
- B 数学的に表現された問題を焦点化し、課題として学習者と教師が共有するための発問
- D 学習内容について、一般化したり、条件を変えたりして考えさせる発問

「問い」の工夫Ⅱ（対話を生む）

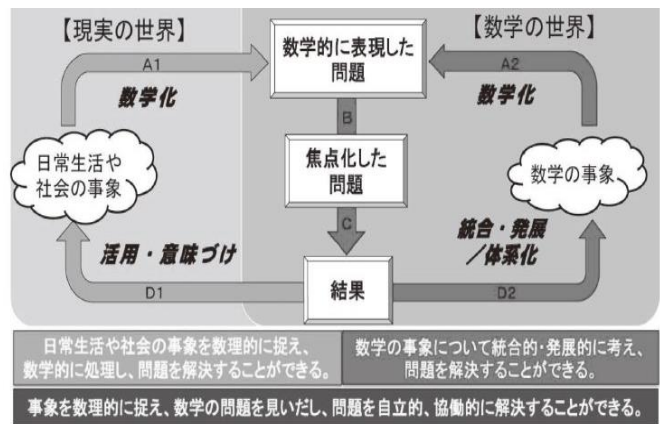
日常生活の場面に活用したり、数学の事象として体系的に理解し統合・発展的に取り組めたりと見方・考え方を働かせるように、互いに説明しあったり、意見を聞き合う活動をどのように位置付けばよいか。また学びによる学習者の思考、態度の変容が見られるような振り返りをどのようにすればよいか。

例えば、日々の授業の中で自分の思考や態度の変容を実感できる機会を設定する。

- B 平行四辺形の性質が正しいことをどのように…（簡潔かな。明瞭かな。的確かな。）
- （根拠をもって説明することができた。もっとこうしたらいいのではないか。）
- （いろいろな図形の性質を調べてみたい）

- B より良い考えや事柄の本質について話し合ったり、数学的、論理的に表現したりする発問
- 変容を実感する振り返りを促す発問

図1



授業構成

見通しを立てる

⇒ 変容 ⇒

見通しを振り返る

深い学び

主体的な学び

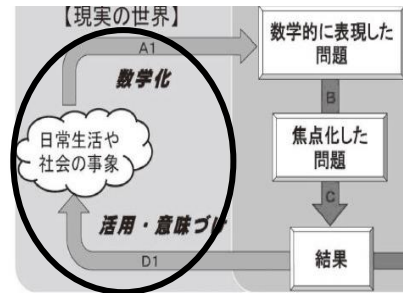
よりよいものか、本質的かを話し合う

対話的な学び

②授業研究でテーマにしたこと及び所感

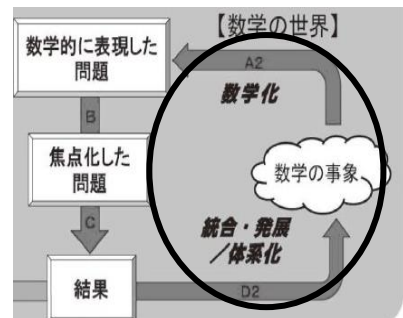
【事例1】では、 $y=ax^2$ の活用の分野で計算によって求めたデータが本当に正しいかを検証するにはどうすればよいかをテーマにした。日常生活や社会の事象を数学化するにはどのような情報が必要かを考え、それらを数値で示し、問題として焦点化した。

今回、自転車と電車の速度の変化が可視化できるように、西大分駅で動画を撮影した。この動画の撮影を繰り返す中で列車の長さ（重量）などが結果に影響するなど、深く教材研究を進めることができた。教科書に掲載されている問題ではあるが、身近な場所で撮影した動画を活用するなどして、自身に密着した内容だと感じることができ、生活のなかに潜む数学を見つける視点を増やすことができた。また「他に関数関係が使えるような事象はないか考えたい」「グラフより計算がより正確だ」などの振り返りもあり、充実した学習となった。



【事例2】では、ある問題の解き方が一般的に使えるかどうかを考える統合的・発展的な学習をテーマにした。場合分けをし、それぞれにおいて成立や不成立を考えるとときには、それらを判断する根拠となる平行線の性質などを示しながら話す様子が見られた。互いに考えを交流する中で、式をつかうことの良さを感じたり、友達の話す手順を参考にしたりできたという振り返りも見られた。

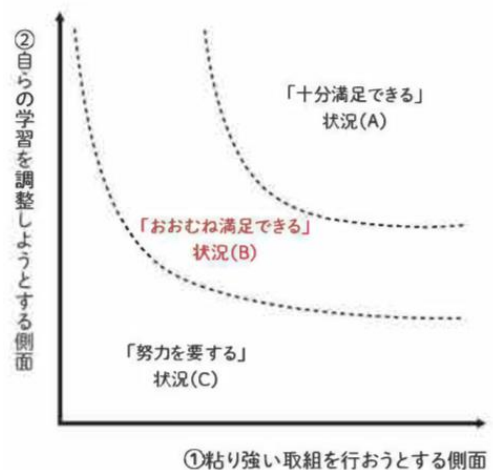
本学年の学習者は、問題を解くときに様々な考え方の可能性を探ることに興味を持っている。しかしながら受容するにとどまることも多くみられる。これからも多様な考え方を出し合う中で学習者同士が指摘し合い、修正し合う場面の設定をしていくことが課題であると考えて。「簡潔・明瞭・正確」を規準として、より良いものを導こうとする学びに向かう態度を身につけさせたいと考える。



【事例3】では、基本の作図を組み合わせながら利用し、問題解決をさせる活動における評価をテーマにした。

この事例では、調整力の中でも問題解決の過程を振り返って検討しようとする態度に着目した。その際、結果の妥当性を検討したり、解決の方法や内容、順序を見直したり、自らの取り組みを客観的に評価したりする発問について部会で協議した。また、共同的な活動の中で、学習者同士の多様な考えを認め合ったり、粘り強く取り組んだりできる場面の設定も行った。

評価を意識した「問い」の工夫を単元計画に位置付けることで指導と評価の一体化を目指すにはどうすればよいかを考える良い機会となった。



③今後に向けて

主体的・対話的で深い学びの実現を目指すとき、図1を単元計画のどこに位置付けるかを明確にすることが「問い」を考えるにおいて必要だと実感することができた。特に「何に着目すればよいか」焦点化することや、問題解決の結果や過程を検討し体系化をしたり概念を形成したりすることについて部会として研鑽を深める必要があると考える。

深い学びにつながる「主体的・対話的」をどう生み出すかを念頭において「問い」を磨けば、学習者に良い学び方を示唆することができると考え、大学の先生方の支援をいただきながら部会としての学習を深めたいと考える。

1 取組の実際

実践事例 1

① 単元 「動物の生活と生物の進化」 第4章 動物のなかま

② 対象学年 2年生

③ 単元設定の理由

〈単元について〉

地球上には多種多様な生物が存在しており、私たちヒトもその一種である。生物の多様性は、太古から環境に適応してきた生物の進化の過程を示す指標でもあり、動物のなかまについて学ぶことは、自然界に様々な動物が共存していることに気付かせ、生命を尊重する態度を育てる上で大変意義深い。本単元では、いろいろな動物を比較して共通点、相違点について分析して解釈し、それらを基にして生物が分類できることを理解させるとともに、分類の仕方の基礎的な技能を身に付けさせることが主なねらいである。また、地層の重なりと過去の様子で学習したことと関連させ、生物を時間的なつながりで捉える見方・考え方を働かせることで、第5章「進化」についての学習を深めることにつながる。

〈学習者について〉

学習者は、小学校第3学年で「昆虫と植物」、第4学年で「人の体のつくりと運動」、第6学年で「人の体のつくりと働き」について学習している。また、中学校第1学年、「植物の生活と種類」において、植物の観察記録に基づき、植物が体のつくりの特徴に応じて分類できることを学習している。事前調査アンケートによると、「植物のなかまにはどのようなものがあるか」という質問に対して97%の学習者が「種子植物」などの系統分類で回答した。また、「なかまとは何か」という質問に対しては、「共通点や類似点をもつもの」「一定条件を満たしているもの」「いくつかの基準に基づいてわかるもの」と説明する学習者がほとんどであった。また、動物のなかまに関して「セキツイ動物」などの系統分類で回答した学習者は55%、その他にも「卵生」などの基準を回答する学習者が見られた。これらのことから、学習者は複数の生物の共通点を見比べることでなかま分けができることを理解しているが、その際の基準については系統分類に基づくものに限られると捉えていると考えられる。

〈指導・「問い」の工夫について〉

本単元においては、単元を通して「私たち動物のなかまはどのように分類されるか」を課題として学習を進めていく。初めに、「なかまとは何か」について複数の動物を様々な基準からなかま分けする活動を通して、共通点と相違点を比較することでなかま分けができることを理解させる。その際、系統分類の基準について発問を行うことで、分類に関する基本的な概念に対する理解を深めさせることを「問い」の工夫Ⅰと設定し、単元を通して体のつくりに着目する視点をもたせたい。次に、セキツイ動物を比較し、共通点や相違点を見だし、体のつくりや子の生まれ方などの特徴によって、五つのなかまに分類できることを理解させる。ここでは、身近な動物について個人で調べ学習を行い、調べたことを班で共有させる。そして、無セキツイ動物のうち節足動物のなかまの特徴を理解させる。複数の動物を観察する際に、共通点や相違点を見いださせる学習活動を繰り返すことを「問い」の工夫Ⅱとし、単元の目標に迫りたい。無セキツイ動物のうち軟体動物については、イカの解剖を行い、実物を観察することを通してセキツイ動物との共通点や相違点を見いださせるようにする。その際、予想を班で共有し観察の視点を明確にさせるとともに、説明することによって思考力・判断力・表現力の育成を図りたい。

④ 単元の目標

動物のなかまについて、複数の動物を比較することを通して、見いだした共通点や相違点を相互に関連付け基準を設定することが分類には必要であることを理解し、分類の仕方の基礎的な技能を身につけるとともに、自然界には様々な動物が生存していることに気付くことができる。

⑤ 単元の評価規準

ア	イ	ウ	エ
関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
動物を分類するために、共通点や相違点を見だし基準を設定しようとしている。	複数の動物を比較することを通して、自ら基準を設定し分類することができる。	観察・実験を通して複数の動物の共通点や相違点に気付くことができる。	動物の系統分類におけるなかまの特徴を説明することができる。

⑥ 単元指導計画（総時数 2／8 時間）

単元を通したためあて「私たち動物のなかまはどのようになかま分けができるのだろうか。」

	めあて・課題	学習活動・「問い」の工夫	振り返り	評価
1	めあて「動物をなかま分けの学習の流れを把握できる。」	I：身近な動物について想起することで、単元の課題を認識させ、解決するための見通しをもつ。	なかまについてや、動物の分類を学ぶことで動物をなかま分けしていく見通しをもつことができた。	単元における学習の流れの中でいろいろな動物に興味を持ち、それらの分類しようとしている(関・意・態)
2 本 時	めあて「「なかまとは何か」を説明しよう」 課題「なかま分けはどのように行われたのか」	なかま分けの基準について発問を行うことで基本的概念の理解を深める。	共通点や相違点に着目することで基準を定め、なかま分けを行うことができることが分かった。	なかまとは共通点と相違点から定めた基準によって分けられたものであることを理解できる(知・理)
3 4	めあて「セキツイ動物をなかまわけしよう」 課題「セキツイ動物の体のつくりの違いはどこに見られるだろうか」(第3時)	セキツイ動物を分類するための子孫の残し方と、体のつくりを基にした分類の基準を設定し、表の作成を行う。 II：体のつくりに着目して共通点と相違点を見いだす。単元を通して繰り返すことで、分類の仕方の基礎的な技能の定着を図る。	体の表面のようすなどの体のつくりに着目すると分類ができるのではないかと思う。 セキツイ動物を体のつくりや子孫の残し方などに注目して分類すると5つのなかまに分けられた。	セキツイ動物を分類するために、複数の動物を比較し、共通点や相違点から基準を設定することができる(思・判・表) セキツイ動物の系統分類についてそれぞれの特徴を説明できる(知・理)
5	めあて「甲殻類の共通点を説明しよう」	複数の甲殻類の資料を提示し、その共通点を見いだす。	水中で生活し、はさみになっているあしをもつ。頭胸部と腹部の2つの部分に分かれている。	甲殻類のなかまを比較することで共通点を見いだすことができる(技)
6	めあて「昆虫類の共通点を説明しよう」	複数の昆虫類の資料を提示し、その共通点を見いだす。	体が頭部、胸部、腹部の3つの部分に分けられる。胸部に3対のあしがある。腹部に2対の羽がある。胸部や腹部にある気門から空気を取り入れる。	昆虫類のなかまを比較することで見いだした共通点から、昆虫類の特徴を説明することができる(知・理)
7	めあて「イカのからだのつくりを調べよう」 課題「セキツイ動物とイカの共通点と相違点はなんだろう」	予想を立てることで、視点をもちイカの解剖実験を行い、体のつくりを観察する。	共通点「えら呼吸。食道や肝臓などの器官」 相違点「背骨の有無。吸盤の有無」など(実験結果から記述)	実験を通して、イカの体のつくりの共通点と相違点に気付くことができる(技)
8	めあて「軟体動物の特徴を説明しよう」	班で仮説に対する結果がどうであったか、分析・考察する。	胴部・頭部・腕部の3つの部分に分けられる。骨格がなく、節もない。筋肉のはたらきで動かしている。内臓は外とう膜で包まれている。	イカの体のつくりを踏まえ、軟体動物の特徴を説明することができる。

⑦ 本時案

- (1) 題材 「動物のなかま」
- (2) ねらい 動物のなかま分けが共通点と相違点に着目すると行えることを、複数の動物を様々な視点から分類することを通して理解することができる。
- (3) 本時における「問い」の工夫
 分類の基本となる科学的概念を理解したうえで、その概念について再度考察し理解を深めさせるために、次時から学習する系統分類の基準について考えさせる発問を行う。

(4) 展開

学習活動		指導内容	期待される学習者の反応	評価	
1 前時の振り返りを行う	5	○「動物のなかま」について分類していくことを伝える。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 2px;">課題を学習者に届けるための発問を行う。→ 「私とメダカはなかまだろうか。」</div>	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・なかまではない生活場所や体のつくり ・なかまである背骨がある </div>	複数の動物を比較し、基準を設定することができる。	
2 めあてを確認する	3	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> めあて 「なかまとは何か」を説明しよう。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> 課題 なかま分けはどのようにして行われたのだろうか。 </div>			
3 分類の基準(視点)を考え、分類する (1) 個人で考える (2) 班で話し合う	25	○12種類の動物を提示する。 ○班で複数の基準を話し合わせ記述させる。 ○外見的特徴・生態的特徴・環境面など複数の視点から重なりが少ないように選択し、各班に割り振る。 ○実際に複数の動物をなかま分けさせる。 ○12種類(12色)の動物をマグネットに色分けしたものを配布し、ホワイトボードに貼り分類させる。 ○様々な視点からなかまわけができることを確認する。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 2px;">セキツイ動物の分類はどんな基準だろうか。→</div> ○ホワイトボードに出た基準を参考にしながら考えさせる。	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・飛ぶかどうか ・からだの表面の様子 ・子の残し方 ・生息場所 </div>		
(3) 12種類の動物を分類する (4) 発表する			<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・子孫の残し方 ・体のつくり </div>		
4 セキツイ動物の分類の視点について考える	7	○植物の分類の基準に着目させる。 ○動物の分類でも、体のつくりに着目することをおさえる。			
5 まとめ・振り返り	10	○基準によってなかま分けが変わることをおさえる。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 2px;">なぜ体のつくり注目したのだろうか。</div> ○なかま分けの方法は様々あるが、これから学習するなかま分けに使われている基準が、系統分類の基準であることを説明する。 ○単元を通して系統分類が体のつくりに着目していることを捉える発問を行う。 ○なかまについて説明させる。			
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> まとめ 動物のなかま分けは共通点と相違点に着目し、基準をつくることによって行われた。 </div>					
振り返りの視点 なかまについて説明する 期待される振り返り ○なかまとは、複数の動物を比較し共通点や相違点から基準をもって分けたものであり、基準が変われば変わるものである。 ○なかま分けの基準は様々あることがわかった。 ○現在の基準の1つは体のつくり注目している。					なかまとは共通点と相違点から定めた基準によって分けられたものであることを理解できる。

(5) 板書計画

めあて	「なかまとは何か」を説明しよう		○ 1 2 種類の動物を分類してみよう！！			
課題	なかま分けはどのようにして行われたのだろうか。		ホワイトボード	ホワイトボード	ホワイトボード	ホワイトボード
○私とメダカはなかまだろうか？	ホワイトボード	ホワイトボード	ホワイトボード	まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・なかま分けは共通点と相違点に着目することによって ・基準を定めることによって行うことができる。 	
	・なかま	ホワイトボード	ホワイトボード			ホワイトボード
・なかまではない	ホワイトボード	ホワイトボード	ホワイトボード	振り返り		

⑧ 結果と考察

本実践では新学習指導要領と現行の学習指導要領との比較、分析により授業を構想した。まず、「なかまとは何か」という、そもそも分類をなぜ行うのかという考え方や分類学の基礎・基本を理解させ、その後系統的な分類について学習することによって、生物を共通性・多様性の視点で捉えさせ、目指す資質・能力を育成することを重視していると捉え、授業展開を考えた。

<深い学びを実現させる「問い」の工夫について>

工夫Ⅰ：「なかまとは何か」について複数の動物を様々な基準からなかま分けする活動を通して、共通点と相違点を比較することによってなかま分けができることを理解させる。

工夫Ⅱ：複数の動物を観察する際に、共通点や相違点を見いださせる学習活動を繰り返すことによって、分類法と系統的な分類の基準についての理解を深めさせる。

学習者は、「呼吸のしかた」「からだの表面に毛がはえているか」といった系統分類に沿った分類の他、「何を食べるか」「生活場所は水中か陸上か」といった生活、環境についての分類、また「危険かどうか」といった人間からの評価の視点での分類も試みていたので、各種の分類を指導者がピックアップする形で発表させることとした。授業実践の結果、工夫Ⅰによって、多くの学習者は分類について、「複数の動物を比較し、共通点や相違点から基準を設定することによってなかまに分けることができる」ことを理解し、まとめとして記述できていた。しかし、その基準が、系統分類法における基準に限定されると考えている学習者も一部見られた。第2時以降の内容に繋げるために、本時の終末に、「系統的な分類で体のつくりに着目するのはなぜか」という発問を行ったが、そのことは進化の過程に伴う分化が分類全般の基準と捉えてしまった学習者が見られた一因となったと考えられる。工夫Ⅱについては、第2時以降の授業においても、体のつくりに着目し共通点と相違点を繰り返し見いだすことによって、分類の技能や理解が深まっていったと考えられる。

事後研究において、「なぜ分類をするのか」という、工夫Ⅰで学習者になかま分けをさせる活動について注目が集まった。指導講評の中で、①今回の授業が現行の学習指導要領では抜け落ちている視点で、系統分類ありきの詰め込み感から抜け出したこのような授業が新しい指導要領下でも実践されていくだろうということ、②「どのような手順で分類したのか」の発問で活動のフィードバックを行うことが、学習者がまとめに行き着く一助となっていたこと、一方③「なかま」という語が理科より特別活動に近く、「わたしとメダカはなかまか」という問いが課題として届いている学習者と届いていない学習者が見られたため、補足またはわかりやすい問いにする必要があることといった指摘があった。生物の共通性・多様性と同時に分類の共通性や多様性についても気づかせ、学びの価値を伝え直させることで、深い学びに結びつけていきたい。



図1 ホワイトボード上で分類

「動物の生活と生物の進化」

①単元の目標は何か（資質・能力）

動物のなかまについて、複数の動物を比較することを通して、見いだした共通点や相違点を相互に関連付け基準を設定することが分類には必要であることを理解し、分類の仕方の基礎的な技能を身に付けるとともに、自然界には様々な動物が共存していることに気付くことができる。

④問題意識を持たせるために、どのような導入を図るか（③を届けるために）

- 動物のなかまを学習することを意識させ、単元の見通しをもつ時間を設ける。
- 実際に複数の動物を比較し、みいだした共通点や相違点から基準を設定しなかま分けすることで、分類の仕方の基礎的な技能を身に付けさせ、なかま分けの分類に関する基本的な概念について理解させる。
- 様々な基準がある中で、今後の学習では体のつくりに着目していくことに視点をもたせる。

問いの工夫Ⅰ

なかま分けの基準について発問を行うことで、分類に関する基本的な概念の理解を深める。

③どのようなめあてで、課題にするか（各教科の見方・考え方が働くもの）

私たち動物のなかまはどのようになかま分けができるのだろうか。

⑥使える資料は何か。どこで使うか。

共通教材
・教科書
・資料集

・インターネット
・写真資料

⑤どんな追及活動を行わせるか（言語活動含む）

- セキツイ動物について体のつくりに着目して分類する際の基準を考えさせる。
- セキツイ動物について分類を分担し、調べ学習を行い、班で共有する。
- 無セキツイ動物の甲殻類、昆虫類について体のつくりに着目し、共通点を見いだす活動を行う。
- 無セキツイ動物の軟体動物について、セキツイ動物との共通点と相違点を予想させ、イカの解剖によって検証する。
- 仮説に対して結果がどうであったか考察し、動物の系統図を作成する。

問いの工夫Ⅱ

体のつくりに着目して、分類の基準を考えたり、複数の動物を比較し共通点や相違点を見いだしたりする。

②単元の最後に理解させたいこと、発言させたいことは何か

（単元のゴール+振り返りの視点）

分類に関する基本的な概念を理解し、分類の仕方の基礎的な技能を身に付けるとともに、動物のからだのつくり注目することで現在の系統的な分類を行うことができることを理解させたい。

【予想される振り返り】

- 共通点や相違点を見だし、基準を設定することでなかま分けができる。
- 体のつくりに着目すると、動物のなかま分けができた。

⑦まとめの表現活動をどうするか

動物の分類の系統図を完成させる。

実践事例 2

- ① 単元 「運動とエネルギー」 2章 力と運動
- ② 対象学年 3年生
- ③ 単元設定の理由

〈単元について〉

物体の運動とは、日常生活でごく当たり前目にしている現象である。学習者にとっても、球技でボールを投げたり、自転車で平坦な道や斜面を走行したりと、身近な経験が豊富な題材であり、「物体の運動と力に関係がある」ということについても、それらの経験から体得しているといえる。本単元は、物体の運動とエネルギーについての観察、実験を行い、力、仕事、エネルギーについて日常生活や社会と関連付けながら理解させるとともに、それらの観察、実験などに関する技能を身に付けさせ、思考力、判断力、表現力等を育成することが主なねらいである。学習者にとって、物体の運動には規則性があり、そこに肉眼では見ることのできない「力」や「エネルギー」が関連しているということを見いだし表現することは、まさに理科の見方・考え方を働かせ、科学的な思考力、判断力、表現力等を育成するという、理科の目標に直結している単元であると考えられる。

〈学習者について〉

本学級の学習者は、学習課題に対して真面目に取り組み、班での活動や話し合いにも積極的に参加する。また、実験操作を的確に行うことができ、そのまとめや振り返りにも丁寧に取り組むことができる。学習者は第1学年の「力と運動」で、力の働きや表し方、弾性力や浮力について学習している。学習内容に素直に取り組む一方で、実験をする際に「なぜその実験が必要なのか」「何を調べていて、結果から何が言えるのか」を考え、言語化することに苦手を感じている学習者が見られる。また、挙手をする発表者が固定されていたり、班活動でも発言が消極的であったりする学習者も見られ、手立てが必要である。自然事象の中から情報を抽出・整理して課題を設定したり、結果から判断し、考察として表現したりする場面で、より主体的に発見し、発言することが期待される。

〈指導・「問い」の工夫について〉

本単元の指導にあたっては、単元を貫く課題として「力と運動、エネルギーにはどのような関係があるのか」に着目させ、物体の運動について日常生活や社会と関連付け、観察、実験に対する興味・関心を高めたい。また観察、実験に取り組ませる際に見通しをもたせ、結果を分析し解釈する際に予想との比較検討を行うことで、物体の運動と力の関係について量的な視点で説明ができるようにさせたい。さらに観察、実験の後に日常生活で見られる事象との関連を考える活動を通し、自然事象から物体の運動に規則性があることを主体的に見いだし、表現する力を養う機会にしたい。そして学習者一人一人に、自分自身の学びや変容を自覚できるように、学習過程を振り返る時間を十分に確保して指導を行っていきたい。

④ 単元の目標

物体の運動についての観察や実験などを通して、物体の運動の様子を記録する方法を習得させるとともに、物体に力が働くときの運動と働かないときの運動についての規則性を見いだし、理解させる。

⑤ 単元の評価規準

自然現象への関心・意欲・態度	科学的な思考・表現	観察、実験の技能	自然現象についての知識・理解
物体に力が働くときの運動と働かないときの運動の規則性に関する事物・現象に進んで関わり、それらを科学的に探究しようとするとともに、事象を日常生活との関わりでみようとする	物体に力が働くときの運動と働かないときの運動の規則性に関する事物・現象の中に問題を見いだし、目的意識をもって観察、実験などを行い、事象や結果を分析して解釈し、自らの考えを表現できている	物体に働く力と物体の運動の様子についての観察、実験の基本操作を習得するとともに、観察、実験の計画的な実施、結果の記録や整理など、事象を科学的に探究する技能の基礎を身に付けている	物体に力が働くときの運動と働かないときの運動の規則性に関する事物・現象についての基本的な概念や原理・法則を理解し、身に付けている

⑥ 単元指導計画（総時数 8 / 8 時間）

	時	学習活動	関	思	技	知	評価規準（評価方法）
導入	1	○日常生活で見られる運動の種類について比較することで、物体の運動が向きと速さの変化で表すことができることを知る	○				○自然事象を物体の運動ととらえながら進んで関わり、分類し表現することができる (行動観察・振り返り)
	2	○物体の速さを記録タイマーを使って調べる実験を行い、物体の速さは一定時間あたりの移動距離で表せることを理解することができる			○		○記録タイマーを正しく操作し、記録テープから一定時間ごとの移動距離を読み取っている (行動観察・ノート)
知識獲得	3 4	○斜面を下る台車の運動を調べる実験を行い、時間の経過とともに記録テープの打点間隔が大きくなることに気づき、斜面方向に一定の力が働き続ける物体の速さは、一定の割合で大きくなること、斜面の傾きが大きいほど、物体に働く斜面方向の力が大きくなり、物体の速さが増加する割合も大きくなることを見いだすことができる		◎		○	○物体の速さが一定の割合で大きくなっていること、斜面方向に一定の力が働き続けており、斜面の角度が異なると物体に働く斜面方向の力が大きくなり、物体の速さが増加する割合も大きくなることを説明している (行動観察・ノート)
	5 6	○水平な面上を移動する台車の運動を調べる実験を行い、時間とともに速さがほとんど変化しないこと、時間と距離が比例すること、物体に力が働かなければ等速直線運動をすることを見いだすことができる		◎		○	○物体に力が働かないときは等速直線運動をし、時間と速さ、移動距離の関係をグラフを用いて説明している (行動観察・ノート)
活用 (課題解決)	7 8 (本時⑧)	○ストロボ写真を使って物体の運動を調べる実験を行い、物体に働く力と物体の運動の様子を考えることで、物体に力が働くときの運動と働かないときの運動を運動の記録から見いだし説明することができる	○	◎			○物体に働く力と物体の運動の様子の違いについて指摘し、ストロボ写真の間隔の変化から物体の運動の様子について説明している (行動観察・ノート)

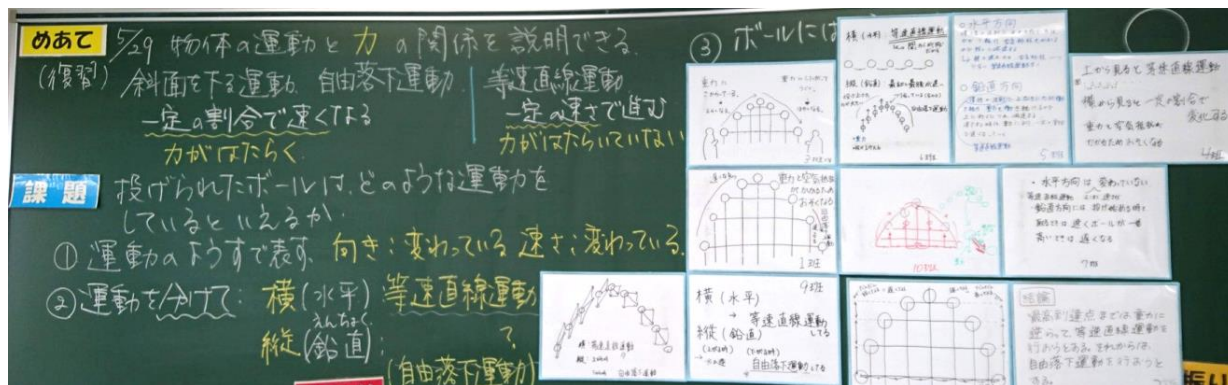
⑦ 本時案

- (1) 題材 「物体の運動」
- (2) ねらい 物体に力が働くときの運動と働かないときの運動の規則性について、ボールの運動の様子をストロボ写真から分析する活動を通して、量的・関係的な視点で説明することができる。
- (3) 展開

学習活動	時	指導	備考・○評価
1 本時の学習内容を確認する	7	○ボールの運動をストロボ写真で撮影したものを提示し、本時の課題を確認する 「投げられたボールの運動も説明できないだろうか」	ボール・カメラ 〈課題の意識づけ〉
めあて 物体に働く力と物体の運動の様子との関係を説明できる			
(課題) 投げられたボールは、どのような運動をしていると言えるか			

2 ボールの運動の様子について確認する	3	<p>○運動の様子が「向き」と「速さ」の変化で表現できること、運動を分析する手立てを確認させる</p> <p>「向きが変わっている運動をどう調べたらよいだろう」</p> <p>「運動を分けて考えることはできないだろうか」</p>	<p>プリント</p> <p>〈Ⅰ:分析の手立てに気づかせる発問〉</p>
3 ボールの運動を水平方向、鉛直方向の運動に分けて考察させる	10	<p>○補助線を引くことで、物体の運動の様子を速さの変化で調べさせる</p> <p>○個人の考えを持たせるようにする</p> <p>○考えを書く際に根拠も書くように指導する</p> <p>○机間指導を行う</p>	
4 グループ活動で個人の考えを検討し、改善する	15	<p>○物体に働く力と物体の運動の関係について指摘することを伝える</p> <p>「ボールに働く力と運動の様子についても、根拠として示すようにしよう」</p> <p>○互いの考察を班で見せ合いながら、話し合いや教え合いを通して検討し、改善させる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・班の中で、検討して改善する余地があると考えられる人の考察を丁寧にアドバイスし合うことで、自他の考えを広げる <p>○班でホワイトボードに考察をまとめさせる</p>	<p>〈Ⅱ:既習事項との関係を想起させる発問〉</p> <p>○話し合いを通して、考察を検討改善し、説明できている（記録用紙）</p>
5 考察を全体で交流する	10	<p>○全体で交流させる</p> <p>○本時のまとめを行う</p>	<p>ホワイトボード マーカー</p>
<p>(まとめ) 投げられたボールは水平方向には等速直線運動、鉛直方向には速さの変化する運動（自由落下運動）をしていると言える。なぜならば～～</p>			
6 本時の振り返りをする	5	<p>○振り返り用紙に記入させる</p>	
<p>振り返りの視点 ・ボールの運動の様子について、根拠をもって説明できたか</p> <p>《予想される振り返り》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボールの運動も、速さの変化や力とので説明できることがわかった ・物体に力が働くと運動の速さや向きが変化することが確かめられた ・他の運動についても同様に説明できるだろうか 			

(4) 板書計画（板書の実際）



⑧ 結果と考察

本実践では、「問い」の工夫Ⅰ、Ⅱの先行事例として、以下のように大きく2種類の問いを意識した発問を行った。

Ⅰ：「投げられたボール」という、身近だが複合的な運動を活用課題として提示し、力が働くことと運動との関係を説明させる（課題の意識づけを行う問い）

Ⅱ：学習者が「速さと向きが変わる」運動を、「鉛直方向、水平方向」に分割し、「運動のようすと力の関係」という既習事項を使うことで説明できるようにする（分析の手立て、既習事項を想起させる、活動のはしご掛けとなる問い）

学習者は、速さと向きが同時に変化する運動は初めての条件であり、ストロボ写真のそれぞれの区間を結んだり、高さが共通であることから水平方向、鉛直方向に線を引いたりすることで分析を試みた。水平方向、鉛直方向の分析に早い段階から気づいた様子であったため、どの分析を使えばよいか時間をかけて考えを交流させた。しかし、そのためにかえって鉛直方向や水平方向の距離を測るところに行き着かない、また、力と運動の関係から、投げ上げたボールに上向きの力がはたらいている等の誤概念によって、局面を上、下、水平方向の3つに分割し混乱する、といった学習者も見られた。

事後研究において、発問Ⅰ「投げられたボール」のストロボ写真という課題提示は、学習者の素朴概念に繋がり、意欲的な活動ができていた点で有効であったと考えられた。一方、発問Ⅱのはしご掛けについては、「教師主導であったのではないか」や「これまでの学習との関連をヒントとして出すべき」といった各議論があった。展開

についても「既習事項を押さえてから運動を解説させる」のか、「より多くのアイデアを出させた中から吟味させる」のか、賛否両論があった。素朴概念になるほど誤概念も生じやすく、その分析のためには既習事項の確認による意味理解と、目の前に起こる現象との関連づけを丁寧に行うことが重要であると改めて考えさせられた。指導講評の中でも、授業展開のあり方としては、2時間扱いでまず調べ方を学び、学習者のアイデアの交流にじっくり時間をかけることも提案された。

今後は授業の展開と活動のはしご掛けを計画的に準備することで、学習者が自らの思考を使い主体的に活動しつつ、活動のゴールに自然と近づくような授業づくりをしていきたい。そのための多くの示唆が得られた授業研究であった。

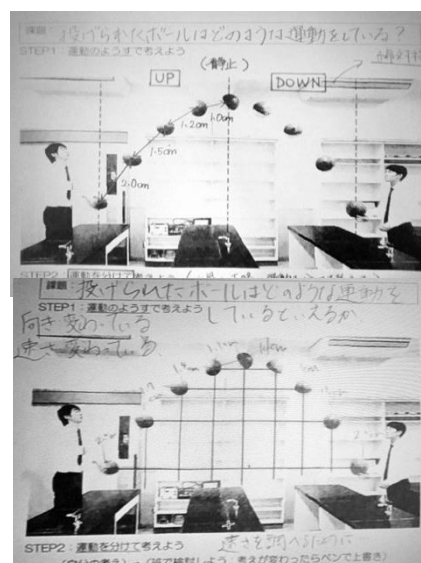


図2 授業の様子と学習者の作図例

2 理科における成果と課題

理科では、昨年度以来の研究の継続として、理科における「深い学び」を「探究の過程に沿って観察、実験などを行い、その結果を分析して解釈し、科学的な（理科の）用語を用いながら自己の言葉で表現できている姿」と位置づけ、課題解決型の学習が展開できるような単元構想および授業実践を行ってきた。その中で、本年度「問い」の工夫Ⅰとして、学習者に届くような課題の提示、また工夫Ⅱとして、授業展開において学習者が課題解決に向かって進むための、手立てとなるような発問について研究を進めてきた。

実践事例1では、従来の系統分類にとらわれない分類の多様性を問うことで、12種類の動物を意欲的に分類しようとする学習者の姿が見られ、新しい指導要領下での授業実践の形を示すことができた。一方で学習者が学問としての分類学の必要性に迫っていくためには、指導者からの働きかけやフィードバックが大切であることもまた明らかになった。実践事例2では、既習事項の活用となる課題を意図してボールの運動という身近な現象を扱うことで、学習者は意欲的にグループでの対話や比較検討を行い、分析を試行錯誤していくことができた。課題解決に向けた授業の展開について、意味理解を先に押さえるか、あるいは学習者の出したアイデアを既習事項と結びつけ吟味させるか、ゴールイメージをもった発問の積み重ねの重要性が明らかとなる授業実践であった。いずれの実践において、「問い」の工夫Ⅰが学習者に届くことで、学習者の意欲的な姿を引き出すことができた一方で、学習者の学びのプロセスをより深い学びへと導くためには、学習内容の本質に近づこうとするための意味理解や、学習活動で得た考えを、既習事項等と結びつけて次の課題を見いださせるような発問、「問い」の工夫Ⅱにさらなる工夫が求められるところであった。

理科という教科の特性として、探究の過程が1つの実験によって実践されることも多い。単元を通して課題を解決し、求める資質・能力を付けさせるためには、まず単元全体を見通させること、そして探究の過程をスパイラルのように繰り返し、探究全体を振り返った時に改めて変容が確かめられるような単元構想や展開の工夫が重要であると考え。「課題を子供たちが自分ごとにする、自分たちなりに思考して小さな結論をつくる、その結論をみんなでつなぎ合わせるというプロセスの重要性」（澤井陽介「教師の学び方」東洋館出版社(2019), p.62)を意識した、探究を重ねていくような展開と、それを繋ぐ連続的な「問い」の積み重ねが求められる。これからの研究では、単元全体を構想する中で課題解決に向かっていくための手立てとしての「問い」を深めていきたい。

1 取組の実際

実践事例 1

- ① 題材 思いや意図をもち、表現の工夫をしよう

教材名 混声三部合唱 『ヴルタヴァ (モルダウ)』による「河の歌」
スメタナ作曲 林 光／作詞・編曲

- ② 対象学年 1年生

- ③ 題材設定の理由

〈題材について〉

本題材は、平成 29 年告示の学習指導要領の表現 A ア「歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、歌唱表現を創意工夫すること」を身に付けさせるものである。平成 20 年告示の学習指導要領には表現 A ア「歌詞の内容や曲想を感じ取り、表現を工夫して歌うこと」と示されている。

スメタナが「ヴルタヴァ (モルダウ)」を作曲した 1874 年当時のチェコはオーストリア帝国の支配下であり、母国語を使用することさえも禁止されていた。このような圧政下で、人々は愛国心をもち、独立を強く願うようになった。スメタナはこうした願いを音楽に託し、祖国への思いに満ちた作品を世に送り続けた。原曲の舞台となった「ヴルタヴァ川」は、現在のチェコとドイツを流れる川である。またこの曲は、交響詩であり、物語や情景などをオーケストラによって演奏されている。①ヴルタヴァの二つの源流 ②森の狩猟 ③農民の結婚式 ④月の光、水の精の踊り ⑤聖ヨハネの急流 ⑥幅広く流れるヴルタヴァ ⑦ビシェフラトの動機という 7 つの部分からなり、曲が情景を鮮明に表している。

本教材は、連作交響詩「我が祖国」全 6 曲の 2 曲目「ヴルタヴァ (モルダウ)」を編曲した合唱曲である。原曲に近く、楽譜には音楽記号が書かれていないため、曲の背景や作者の心情から曲に対する自分の思いや意図をもつことができ、曲にふさわしい表現を工夫させるのに適している曲であると考えられる。

〈学習者について〉

学習者は、校歌や発声練習を通して、歌声作りを行ってきた。前期には校歌を 1 人で歌う公開実技テストを行った。テストに向けて自主的に練習し、積極的に声を出す姿が見られた。しかし、曲の背景や歌詞からどのように歌いたいのか思いや意図をもち、交流し共有し歌った経験は乏しい。

〈指導・「問い」の工夫について〉

本教材を合唱コンクールの課題曲に設定しており、導入部では合唱コンクールへの思いを共有させ、意欲を高めたり、昨年度のクラス合唱を聴かせ、強弱や音楽記号など表現の違いによって伝わり方が異なることに気づかせたりする（「問い」の工夫Ⅰ）。その上で、自分たちは「河の歌」の歌詞の内容や曲想から解釈したことをどのような思いや意図をもって表現を工夫していくのかを考えさせる。

楽譜に音楽記号を付け「歌い方メニュー」（柔らかく、威厳をもってなどいろいろな歌い方を一覧にしたもの）を用い、それをもとに実際に練習する創意工夫の過程の中で、曲の背景と作者の心情、曲想と歌詞の内容との関りに関する新たな知識を得たり、これまで身に付けた発声などを生かしながら、思いや意図を深めたりする（「問い」の工夫Ⅱ）。またその際、新たな思いや意図をもつことも考えられる。歌唱活動では、このように思いや意図をもつ過程を重視したい。

- ④ 題材の目標

曲の背景や作者の心情から、どのように歌いたいのかという曲に対する自分の思いや意図をもち交流し、音楽記号や「歌い方メニュー」を用いて歌唱表現を考え、試行錯誤しながら練習する過程を通して、曲にふさわしい表現に近づけていくことができる。

⑤ 題材の評価規準

ア. 音楽への関心・意欲・態度	イ. 音楽表現の創意工夫	ウ. 表現の技能
①正確な音程，リズムに関心を持ち，歌う学習に主体的に取り組もうとしている。 [観察] ②歌詞の内容（歌詞の言葉の意味，歌詞が表す情景や心情，歌詞の成立の背景など）や曲想に関心を持ち，音楽表現を工夫して歌う学習に主体的に取り組もうとしている。 [観察・ワークシート]	①音色，リズム，旋律の働きを知覚し，それらが生み出す曲想の美しさを感じ取りどのように歌うかについて思いや意図をもっている。 [観察(パート練習)・ワークシート] ②歌詞の内容や曲のもっている特質を味わい，自己のイメージを生かして曲にふさわしい歌唱表現を工夫している。 [発表・ワークシート]	①正確な音程やリズムで歌い，声部の役割や全体の響きを感じ合唱することができる。 [観察・合唱] ②歌詞の内容や曲想を生かした音楽表現をするために必要な発声，表情，強弱や抑揚などを身に付けて歌っている。 [観察(パート練習・合唱)]

⑥ 題材指導計画（本時5／8時間）

題材のめあて

「音楽記号や『歌い方メニュー』などを用いて，歌詞の内容や曲の背景・作者の心情が伝わるように表現の工夫をしよう」

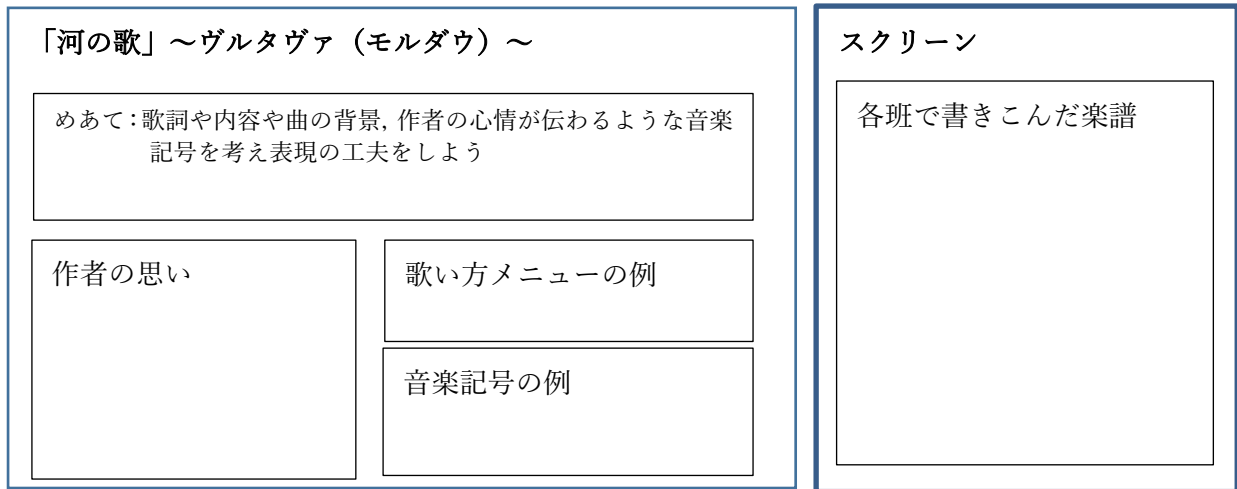
時	学 習 活 動	指導上の留意点	評価
1	○合唱への思いを共有する。昨年度の演奏を聴く。曲を知り，音取りをする。	・正確な音程，音楽記号や拍，テンポに気を付けながらパートごとに音取りをさせる。	ア①，ウ①
2	○パートごとに音取り，全体で合唱をする。	・他パートの音を聴きながら，ハーモニーを感じて合唱させる。	ア①，ウ①
<「問い」の工夫Ⅰ> ・合唱コンクールへの思いをクラスで共有し意欲を高める。 ・昨年度の演奏を聴き，音楽記号の違いによって伝わり方や表現の違いがあることに気づかせる。			
<振り返り> ・合唱コンクールでは練習の成果を発揮し，最高の歌声を届けたい。 ・音楽記号の違いで曲の雰囲気は全く違う。この曲で伝えたいことをしっかりと考えて歌いたい。			
3	○作者，時代背景，ヴルタヴァ川について知る。	・当時の情勢や国の様子を伝え，川を映像で見せることにより，作者がこの曲に込めた思いについて考えさせる。	ア②
4	○前半部分の音楽表現について表現を工夫して歌う。	・前時をふまえ，思いが伝わる合唱にするための音楽表現を考える。また班で共有させ，伝わる表現を聴き合うことにより，より深い表現の工夫を見つけ出させる。	ア②，イ②
5	○後半部分の音楽表現について表現を工夫して歌う。		
6	○クラスで音楽表現について共有する。		
7	○曲を深める。繰り返し練習をし，思いの伝わる合唱へと表現の工夫をする。	・クラスで合唱するために必要な表現の工夫を共有させる。 ・共有した表現の工夫ができるようになるため繰り返し練習をさせる。	イ② イ①，ウ① ウ②
8	<「問い」の工夫Ⅱ> ・楽譜に音楽記号を付け，「歌い方メニュー」を活用し，思いの伝わる合唱にするため練習を重ねる。 班で歌い聴き合う。 録音して聴いてみる。 原曲をもう一度聴く。		
<振り返り> ・音楽記号の中にはもっと細かい表現が隠れている。曲をしっかりと知ることによって，より一層深い表現を考え，思いの伝わる合唱にするために練習をしていきたいと思った。 ・互いに聴き合うことで思っていた考えを歌として伝えることの難しさが分かった。他の学習者からアドバイスをもらい何度も練習するとだんだんと伝わるようになった。			

⑦ 本時案

- (1) 題材 思いや意図をもち、表現の工夫をしよう
- (2) ねらい 歌詞の情景や曲の背景、作者の心情を感じ取り、音楽記号や「歌い方メニュー」を用いて歌い方を考えさせる活動を通して、どのように歌いたいか思いや意図をもち、表現を工夫することができるようにする。
- (3) 本時における「問い」の工夫
自分たちの思いや意図が伝わる演奏にするために、「歌い方メニュー」を活用し、班で聴き合いながら練習を重ねることで表現の工夫を深めさせる。
- (4) 展開

学習活動	時	指 導	期待される学習者の反応	評価・備考
1. 発声練習をする。	5	○「河の歌」合唱をさせる。	○積極的に歌おうとしている。	
めあて：歌詞の内容や曲の背景、作者の心情が伝わるような音楽記号を考え表現の工夫をしよう				
2. 本時の流れとめあてを確認する。	3	○前時までを振り返り、本時で考えを交流し、実際に歌って表現をする部分を伝えさせる。		
聴き手に思いを伝えるために、どのような表現の工夫をするのか。				
3. 個人の考えを班で交流し、どのように歌いたいか考えを共有する。	15	○5 6小節～ 前時に個人で考えた音楽記号を班で交流し、曲のもつ世界観をより効果的に伝えるために、自分たちはどのように歌いたいか思いを共有させる。 音楽記号のみならず、「歌い方メニュー」を用いて考えさせる。	○自分で考えた意見を相手にしっかりと伝えようとしている。 ○他の学習者の意見に共感したり、質問したりしながら聞くことができている。 ○意見を交流しながら、共有し、班の意見を定めることができている。 ○資料や教科書等を使いながら、自分たちのイメージを伝えるための工夫を考えることができる。	ア② ・ワークシート
4. 班で練習をする。	10	○思いが伝わるように班で聴き合い試行錯誤しながら練習させる。	○班の中で聴き合いながら歌うことで、試行錯誤しながら表現を深めることができる。	イ② ・ワークシート ・ホワイトボード
5. 全体で交流する。	10	○班で練習したことを全体で歌う。どのような思いを伝えたいのかについても述べさせる。	○思いを伝えるために練習の成果を精一杯発揮しようとしている。	
6. 本時を振り返る。	7	○交流して気づいたことや感じたことを書かせる。 ○聴いている人は、思いが伝わってきたのか、伝わるためにどのようなことが必要か発表させる。 ○次時ではクラスでイメージを共有させ、表現の工夫をしていくことを伝える。	○思いを伝えることの大切さや難しさについて考え、これからどのような合唱にしていきたいか、どのような練習や工夫が必要かについて考えをもっている。	
期待される振り返り ・強弱をつけることで、曲が生き生きしていき、思いも伝わると思う。 ・「春がくる」は祖国の繁栄を祈る気持ちも込められていると思うので、力強く明るいfで歌いたい。 ・思いを相手に伝えるのはとても難しいが、何度も繰り返し練習をしてできるようになりたい。 ・川の流れの様子と作者の思いをうまく伝えるために強弱や音楽記号はとても大切だと感じた。 ・他の学習者の歌を聴くと、自分の考えと少し違うところがあった。表現は様々でどれも良いと思う。しかし合唱なので、共有させていくことが大切だと思う。				

(5) 板書計画



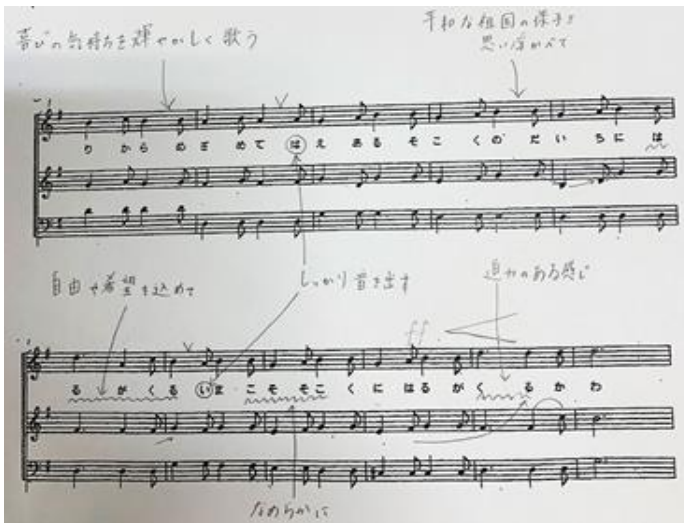
⑧ 結果と考察

本単元では合唱コンクールの1年生の課題曲でもある「河の歌」（原曲：モルダウ）に音楽記号を付け、どのように歌いたいか思いや意図をもち、「歌い方メニュー」を用いて、曲にふさわしい音楽表現を工夫していった。昨年度に引き続き、「音楽的な見方・考え方」を働かせる中で、実感を伴った理解による「知識」の習得，必要性の実感を伴う「技能」の習得，質の高い「表現力等」の育成という深い学びの実現を目指し授業実践を行ってきた。さらに今年度は「問い」を工夫し、より深い学びができるように研究を進めてきた。

「問い」の工夫Ⅰとして、導入部では合唱コンクールへの思いを共有させ、意欲を高めたり、昨年度のクラス合唱を聴かせ、強弱や音楽記号など表現の違いによって伝わり方が異なることに気づかせたりする場面を設定した。昨年の演奏を聴かせる中で、現2年生がどのような合唱をしたのか、強弱や音楽記号が付いてない曲がどのように演奏されていたのかという興味関心が高まっていると感じた。また、声部のバランスや曲の盛り上げ方について、自分たちはどのように歌いたいかというイメージを細かくもっている学習者もいた。事後研究会の中では、昨年度の演奏を聴かせることにより、イメージが固定化しなかったのかという意見があった。学習者のワークシートからは、合唱への意気込みと原曲を聴いてみたいという意見が多くあげられていた。強弱記号や音楽記号を付けていく中で、昨年度と同じような意見になるところは見られた。昨年度の演奏を聴かせる聴かせないの両方でどのような変化が起こるのか、そしてどちらの方が学習者の思考をより深めることができるのかという研究は今後進めていきたい。

「問い」の工夫Ⅱとして「歌い方メニュー」を用い、それをもとに実際に練習する創意工夫の過程の中で、曲の背景と作者の心情、曲想と歌詞の内容との関りに関する新たな知識を得たり、これまで身に付けた発声などを生かしたりしながら、思いや意図を深めたりすることと設定した。1年生ではこのような活動は今までに行っていない。音楽記号を付けていく過程で、学習者が重きを置いていたことは歌詞の解釈であった。解釈を進める中で、前時までに学習した作者の生涯や河の流れの様子について結びつきが深まったように感じた。例えば、「春」という歌詞が2回出てくるところでは、時代背景や作者の思いと結びつけ、春がくる喜びと独立したいという気持ちを重ねている様子を表現したいという意見が出された。それらの思いを表現する手立てとして「歌い方メニュー」を提示して用いた。春という嬉しさを表現するために「リズムカルに・飛び跳ねるように」歌ってみようという意見が出された。練習する創意工夫の過程の中で、マルカートのように切って歌唱することが春の嬉しさを表現するのに適しているのではないかという1つの考えが出された。同じ部分に対して別の意見として、祖国の繁栄を力強く願っているという思いがあり、そのためにレガートで粘り強く歌いたいという意見も出された。交流後の感想には、「同じフレーズでも捉え方や感じ方が違って面白かった」「最後にどんな風に交わるのか、とても気になった」「全く違う感性ももっていて、同じfでも花開くようにや生き生きとなど、作者の感情をより鮮明に表すための表現の工夫や違いがあった」というものがあった。今回は、全員でまとめることが難しかったため、パートごとに意見をまとめ、リーダーが集約し一つにした。その際、このような思いで強弱記号・音楽記号をつけたという理由とともに、「歌い方メニュー」を用いて表現の工夫を共有できるようにした。ワークシートには合唱部分のみの楽譜を用いた。直接楽譜に書きこむことで、分かりやすく自由に書くことができた。「歌い方メニュー」は思いを言語化するためにとっても有効であると感じた。

作者の生涯や時代背景、河の様子を学習することにより、どのように強弱記号をつけるのか、思いや意図をもつことができたと感じる。合唱コンクールに向けてより良いものにしたいという向上心も見られた。その後の授業では、本番に向けて互いに聴き合ったり、録音をしたりする中で表現をより深めることができていた。強弱記号や音楽記号をつけるという活動は初めてであったが、学習者がより意欲的に、探究心高く取り組めるものだと感じた。



↑<歌いながら表現を深めていく様子>

↑<本時のワークシート>

2 音楽科における成果と課題

今年度は深い学びを実現させるために、昨年度に引き続き、「音楽的な見方・考え方」を働かせる中で、実感を伴った理解による「知識」の習得、必要性の実感を伴う「技能」の習得、質の高い「表現力等」の育成を目指し授業実践を行ってきた。さらに今年度は「問い」を工夫し、より深い学びができるように研究を進めてきた。音楽科では学習者が自ら音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、捉えたことと、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化と関連付けて考えているとき、音楽的な見方・考え方が働いているという。これらを働かせた音楽科の学習を積み重ねることによって広がったり深まったりするなどし、その後の人生においても生きて働くものとなる。

本題材では、学習者が合唱コンクールに向けて、よりよい合唱を披露するために、作品の時代背景や作者の生涯と歌詞や旋律を関連付けながら捉え、解釈したり自己のイメージや思いを膨らませながら曲を深めていったりし、創意工夫をしながら練習を重ねる活動が深い学びを実現させることにつながると考えた。相手意識を持たせるために録音をし、少人数同士での聴き合いをしたり、仕上げに向けて原曲をもう一度聴きなおしたりするなど、「問い」の工夫として取り組んだ活動は、学習者自身の意欲を高め更により良いものにしようとする向上心へと繋がったと考える。合唱コンクールにおいては、音楽の授業をはなれ、各学級で練習する場が増えた。授業で身に付けた練習法や技能を駆使し、各クラスで思いを共有させながら楽曲の完成を目指すことができていた。つまり、題材を通して、歌い方について学びを深めたことで、音楽科の学習が生活へとつながっている実感を与えることができたのではないかと考える。

来年度の課題として、学習者自身が更に学びたいという意欲や必要性を感じられる「問い」の工夫を設定していく必要がある。曲の表現を深めていくために、どんな「知識」が必要か、どのような「技能」を高めていくか、それらをどのように質の高い「表現」へと結びつけるのかということ学習者自身から発信できるよう、歌唱指導はもちろん、他の領域においても授業改善を行っていく必要がある。

題材「 思いや意図をもち、表現の工夫をしよう 」

①題材の目標は何か（資質・能力）

曲の背景や作者の心情から、どのように歌いたいかという曲に対する自分の思いや意図をもち交流し、音楽記号などを用いて歌唱表現を考え、試行錯誤しながら練習する過程を通して、曲にふさわしい表現に近づけていくことができる。

④問題意識を持たせるために、どのような導入を図るか（③を届けるために）

本教材を合唱コンクールの課題曲に設定しており、導入部では合唱コンクールへの思いを共有させ、意欲を高めたり、昨年度のクラス合唱を聴かせ、強弱や音楽記号など表現の違いによって伝わり方が異なることに気づかせたりする。

⑥使える資料は何か。どこで使うか。

教科書・資料集
歌い方メニュー
（昨年度作成）

③どのようなめあて、課題にするか
（各教科の見方・考え方が働くもの）

歌詞の内容や曲の背景、作者の心情が伝わるような音楽記号を考え表現の工夫をしよう

「問い」の工夫Ⅰ

合唱コンクールへの思いをクラスで共有し意欲を高める。
昨年度の演奏を聴き、音楽記号の違いによって伝わり方や表現の違いがあることに気づかせる。

⑤どんな追及活動を行わせるか（言語活動含む）

歌いたいイメージに近づけるための表現技法を、音楽記号のみならず「歌い方メニュー」を用いて考えさせる。
聴き手に伝わるように、班で聴き合い試行錯誤しながら練習させる。

「問い」の工夫Ⅱ

楽譜に音楽記号を付け、「歌い方メニュー」を活用し、思いの伝わる合唱にするため、聴き合いながら練習を重ねる。

②題材の最後に理解させたいこと、発言させたいことは何か
（題材のゴール+振り返りの視点）

どのように歌いたいかという曲に対する自分の思いや意図をもち、音楽記号や「歌い方メニュー」を用いて班で聴き合いながら音楽表現を深めていくことができたか。
思いを伝えることの大切さや難しさについて考え、これからどのような合唱にしていきたいか、どのような練習や工夫が必要かについて考えをもっているか。

⑦まとめの表現活動をどうするか

10月22日に合唱コンクールで発表をする。

1 取組の実際

実践事例 1

- ① 題材 私との対話 ～表すことで見えてくる自分自身～
- ② 対象学年 3年生
- ③ 題材設定の理由

〈題材について〉

本題材は、学習指導要領の「A 表現(1)ア(ア) 対象や事象を深く見つめ感じ取ったことや考えたこと、夢、想像や感情などの心の世界などを基に主題を生み出し、単純化や省略、強調、材料の組合せなどを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練ること」を身につけさせる題材である。自分自身の内面に目を向け自己分析することを通して、具象的表現だけでなく、抽象的表現を用いて自分の感情や考え方を表現するものである。感性や、想像力を働かせ、自分の感情や考え方を造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値を作り出させたい。画材は黒のボールペンのみを使用し、色彩の変化は単色の中の明度差で表す。また、場合によっては資料や写真などをトレースすることも可能で、対象をよく観察してそっくりに描くという表面的な形態の再現にこだわるのではなく、意図に応じて表現方法を追求し、創造的に表すことを学ばせることもできる。中学生にとって自分自身の内面と向き合うことは、勇気のいることではあるが、新たに自己に気づくことにもつながる。特に、進路を選択し、自らの力で未来に向かわなくてはならない3年時で自己表現をすることには意味があると考え。自己と向き合い、肯定的にとらえ、自分像を表現させることは重要である。

〈学習者について〉

本学級の学習者は、1・2年時に美術の授業ではデザイン、レタリング、風景画、篆刻などの作品を制作し、モチーフを写実的に描くことや、自分のアイデアを形にする過程などを学んでいる。デザインでは言葉から発想を広げるプロセスについて考え、風景画では遠近法を意識して空間を描く方法を学ぶなど、今回の作品につながる内容を習得している。その一方で、自己表現をする際、発想が広がらず全体像がなかなか定まらない学習者や、何について描いたらいいのかという点で悩んでいる学習者の姿を見ることもあり、発想を豊かに広げるという点で課題がある。これは、今までの経験が今回の作品と繋げられないことや、なんとなくイメージするものをどんな形や表現方法を用いて描くかを判断するという経験が不足していることが要因ではないかと考える。

〈指導・「問い」の工夫について〉

導入部では、多様で数多くの自画像を描いたピカソの作品を使って鑑賞の授業を行う。ピカソの表現方法の豊かさに触れながら、なぜ変化したのか、どんなことを表現しようとしていたのかという視点で鑑賞する。そのことによって、自己表現の自由さや、何を表したいかという主題が重要であることに気づかせる。次に過去の作品集を見せることで、自分たちの作品も、附属中学校の伝統の一部になることへの意欲をもたせたい。また、そうすることでどんな作品を作っていくのかというイメージも持ちやすくなる。作品制作に入る前に3種類の演習を行い、ボールペンでの表現方法や、明度差での色の変化の表し方などを学ぶ。作品は全部で8時間かけて制作するが、その中間になる時期に、自身の作品を振り返り、より良くするためにはどんな手立てがあるのかを考える時間を取ることで、他者の意見を参考にしたり、困りを解消したりすることで、作品の発想や表現をより深めさせたい。

最後に相互鑑賞会を実施し、作品の振り返りをさせたい。全体を通して、常に自身を肯定的に捉え、この作品が小中学校の図工美術教育の集大成となるように指導したい。

④ 題材の目標

- ・自分の姿や心の中を見つめて考えたこと、将来の夢などから主題を生み出すことができる。
- ・抽象的表現や構成、明暗の差など表し方を工夫してペン画で表現することができる。

⑤ 題材の評価規準

- 自分の姿や心の中を見つめた表現に関心を持ち、主体的に創造的な工夫をして表そうとしている。
(美術への関心・意欲・態度)
- 自分の姿や心の中を見つめ考えたことを基に主題を生み出し、単純化や強調、構成の仕方などを考え、創造的な構成を工夫し表現の発想を練っている。
(発想や構想の能力)
- 黒色のボールペンの特性を生かし、表現意図に合う構図や抽象的表現を工夫するなどして創造的に表現している。
(創造的な技能)
- 造形的なよさや美しさ、自分の内面を基にした主題と創造的な表現の工夫などを感じ取り、自分の価値意識をもって味わっている。
(鑑賞の能力)

⑥ 題材指導計画 (本時9 / 12時間)

題材のめあて 自分を見つめ考えたことから主題を生み出し、構成や明暗を工夫してボールペンで表現しよう				
時	学習活動	指導上の留意点	評価	
1	ピカソの自画像を鑑賞し、グループで話し合う	なぜ変化したのか、どんなことを表現しようとしていたのかという視点で鑑賞する	鑑	・ワークシート
2 3 4	ボールペンを使った演習	①明暗の付け方 ②瞳の描き方 ③感情を抽象的に表現する	創	・ワークシート
5	自己分析をしてアイデアスケッチをする	表したい自分について言葉を使って発想を広げテーマを決める	発 開	・アイデアスケッチ
6 7 8	制作 (前半)	色数、構図、発想など制作する上で必要な視点を意識して制作する	創 発 感	・作品 ・制作の様子
9 (本時)	制作中の振り返り ・制作する上での困りをジャンル事に分けて具体案を考え、試す	制作が始まってからの困りや疑問を考え今後の作品に生かす	発 感	・発言 ・ワークシート
10 11 12	制作 (後半)	改善策を基に作品を完成させる	創 発 感	・作品 ・制作の様子

⑦ 本時案

- (1) 題材 「自分を表す」作品をよりよくするための方法を考えよう
- (2) ねらい 制作中の作品の困りや疑問を考え、自身の課題を明確にし、演習や意見交流をすることを通して、解決策や改善点を見つけ、今後の作品につなげられるようにする。
- (3) 本時における「問い」の工夫
 - ・共通の課題を設定し、他者との意見交流をしたり、演習を通して解決策を考えたりすることで、自身の作品への具体的な改善策を見つけられるようにする。
 - ・具体的な改善策を得た上で、自分の作品へと繋がるめあてを提示し、加筆を行う。
 - ・コピーした作品に加筆することで、失敗を恐れず改善策を試せるようにするとともに、加筆前後の作品を比較できるようにする。

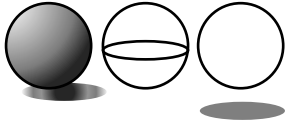
4, 本時を振り返る	10分	<p>○前後の作品の比較し, どんな工夫をしたのか, それは効果的だったのかなどを振り返らせる。</p> <p>○今後の作品制作のための改善策を書き出させる。そのために必要なものがあればまとめておいて次回までに準備することも確認させる。</p>	<p>[発想や構想の能力] 必要な改善策を考えることができる。</p>
<p>期待される振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体的に暗めな色を配置したら, 前後を比較すると表現したいイメージに近づいた気がする。 ・遠近法を使うと時間の流れを表現できるとわかったので使いたい。 ・アイデアスケッチや自己分析のところを見直して空白に描くことを考えたい。 ・形の無いものを描くときには何かに置き換えて表現することがわかった。 ・同じ形でも色の塗り方や模様で見え方が変わることがわかったので作品にいかしたい。 			

(5) 板書計画

私との対話～表すことで見えてくる自分自身～

人・手が描けない	空白が埋まらない	立体的に描けない	明るい感じ表現	中学校3年間を表したい
階段が描けない	描くことが思いつかない		楽しい感じの表現	未来に向かっていく様子
具体的なもの	発想	技術	感情や印象	時間の変化

課題 自分の感情や印象, 構想を表現するためにはどうしたらいいだろうか

立体感


時間の変化

- ・遠近法
- ・3年間頑張ったことを順番に
- ・積み重ねた
- ・時計

めあて
「自分を表す」作品をよりよくするための方法を考えよう

振り返り

まとめ 具体的なものを使ったり, 形や色の印象からイメージを繋げたりして置き換える

⑧ 結果と考察

深い学びを実現させる「問い」の工夫について

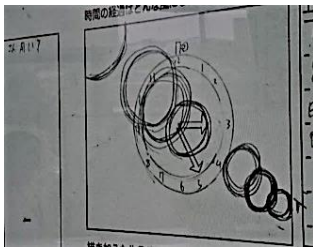
「問い」の工夫Ⅰ

本時では全8時間の制作の中間になる時期に, 自身の作品を振り返り, より良くするためにはどんな手立てがあるのかを具体的に考えることを目的とした。そのために, 前時までの制作上の困りをアンケートで調査し, 導入部分に使用した。そうすることで, 自分の困りが他者と共通していることを知り, その内容も漠然と捉えるのではなく, 分類できることを知ることで, 主体的に改善しようとする意欲を持たせた。

「問い」の工夫Ⅱ

従来のめあて→課題→まとめ→振り返りという流れではなく, 全体の共通する課題を提示し, 具体的な改善策や発想の広げ方などを考え, まとめた後, 自分の作品へと繋がる見通しを提示し, 加筆を行い振り返るという流れで授業を進めた。お互いに作品への改善策をアドバイスし合い次の制作につなげることも, 具体的な技法や発想のプロセスを基に自分の作品の改善策を見つけることを本時では目指した。そのため, まずは課題を提示し, その課題解決を演習を通して行った。その後, 本時のめあてを確認し, 実際の作品に描くのではなく, コピーをしたものに加筆させた。コピーは実物より少し縮小したもので, 2面印刷しており, 加筆した部分の変化が比較しやすいようにした。そうす

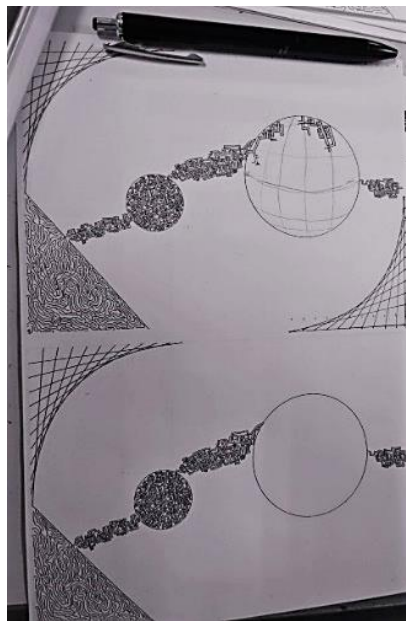
ることで、失敗を恐れて気後れする学習者も積極的に書き込むことができ、各自が抱えていた困りを、自分の発想で解決することにつながった。



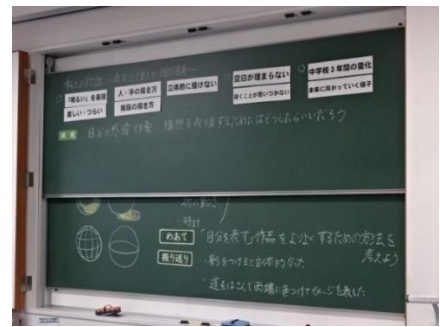
時間の経過を表すアイデア
(生徒作品)



授業の様子



コピーに加筆している様子 (生徒作品)
上段・・・加筆後
下段・・・加筆前



板書

2 美術科における成果と課題

制作が始まって、アンケートをとると「制作でうまくいかないと感じることはなにか」という質問に対して、「なにを描いたらいいかわからない・思いつかない」という発想面での困りが47%と1番多く、「描きたいものはあるがうまく書けない」という技能面での困りが26%と2番目に多かった。発想面についてはアイデアスケッチに戻ることをやイメージマップを広げることで改善できたが、技能的な幅が広がることで発想面にもいい影響が表れた。実際には、学習者が感じている困りは同じではないが、共通するところと、その具体的な改善案を共有することは、漠然としていた困りがタイプ別に分けられ、それぞれが自分の課題解決につなげて考えることができ主体的に制作に取り組む姿勢につながった。また、「問い」の工夫Ⅱとした、コピーに書き込むプロセスは、失敗を恐れる学習者には負担が少なく、実験的に制作できるだけでなく、変化を比較できるので、作品をよりよくしていくためには効果があったと考える。長い制作過程の途中で自分の作品について見直しをする機会が必要だと感じた。

課題としては、今回制作の途中で実施した今回のプロセスをもっと早い段階で行う方が、より効果的だと感じた。学習者自身が自分の作品と向き合いながら制作を進める中で個人差があり、描くものが定まらず制作の進捗が遅くなる場合も多い。そういう場合に具体的な改善策を知ると制作を進めるきっかけになると考えられる。描きたいものを考える発想面、描く技能面の双方を高めていくことで学習者が自身と向き合い、より深く自分の表現について追究することができる。

1 取組の実際**実践事例1 技術分野**

- ① **題材** エネルギー変換の技術を上手に使おう
- ② **対象学年** 2年生
- ③ **題材設定の理由**

〈題材について〉

この題材では、エネルギー変換の見方・考え方を働かせた実践的・体験的な活動を通して、生活や社会の中で利用されているエネルギー変換の技術についての基礎的な理解を図り、それに係る技術を身に付け、エネルギー変換の技術と生活や社会、環境との関りについて理解を深めるとともに、生活や社会の中からエネルギー変換の技術に関わる問題を見いだし課題を設定し解決する力、よりよい生活や持続可能な社会の構築に向けて適切かつ誠実にエネルギー変換の技術を工夫し創造しようとする実践的な態度の育成をねらいとしている。

〈学習者について〉

本学級では、授業で学習したことを実生活の中で実践できる学習者が多い。情報に関する技術の分野の学習では授業の振り返りの中で、今日学習したことを自分の生活で実践してみたいと具体的に書いていた学習者が多く見られた。しかし、エネルギー変換に関する技術の分野では、アンケートの結果から「エネルギー変換について考えたことがある」という項目で「ある」と答えた割合が20%と低く、生活の中にあふれているエネルギー変換の事象に目を向けることができていないと考えられる。エネルギー変換の技術と生活や環境との関りを理解し、その中で生じる問題点を見い出すことで、自分たちの生活をよりよいものにしていこうとする実践的な態度を身に付けることが課題である。

〈指導・「問い」の工夫について〉**「問い」の工夫Ⅰ**

・基本となる電気回路の製作を題材の最後に設定し、身近なエネルギーについての調べ学習を行い、分類しながら主な発電方法の理解をさせることで、学習者に見通しを持たせるとともに、学習意欲を高める。

「問い」の工夫Ⅱ

・主な発電方法について長所・短所を考える活動を通して、安全性、出力、変換の効率、環境への負荷や省エネルギー、経済性について着目させ、多面的に理解させる。

・基本となる電気回路を用いた製作を行い、作品を製作する喜びを体験するとともに、エネルギー変換の技術が社会を大きく進歩させた状況や、新エネルギーや省エネルギーが自然環境の保全に貢献していることにも触れ新たな技術についての理解を深めさせる。

④ 題材の目標

- ・発電の方法の長所と短所を考え、エネルギー変換の技術を適切な評価・活用について考えること。B(1)ーウ
- ・エネルギー変換を用いた機器の仕組みを知り、保守点検と事故防止ができること。B(1)ーイ
- ・製作品の組み立て・調整や電気回路の配線・点検ができること。B(2)ーイ

⑤ 題材の評価規準

関心・意欲・態度	工夫・創造	生活の技能	知識・理解
ア○エネルギー変換に関する技術に関心を持っている。 ○エネルギー変換に関する技術を適切に活用しようとしている。	イ○よりよい社会を築くために、エネルギー変換に関する技術を適切に評価し活用しようとしている。	ウ○機器の保守点検と事故防止ができる。 ○製作品の組み立て・調整や点検ができる。	エ○エネルギー変換方法や力の伝達についての知識を身に付けている。 ○組み立てや調整に必要な工具や機器の適切な使用方法についての知識を身に付けている。 ○エネルギー変換に関する技術と、社会や環境とのかかわりについて理解している。

⑥ 題材指導計画（総時間 2 / 20 時間）

題材の目標

エネルギー変換に関する基礎的・基本的な知識及び技術を習得させるとともに、エネルギー変換に関する技術が社会や環境に果たす役割と影響について多面的に理解を深め、それらを適切に評価し活用する能力と態度を育成する。

	学習の項目 指導目標	時 数	学習活動	まとめ 振り返り	評価 (評価方法)
1	わたしたちの生活とエネルギー変換 エネルギーの利用	1	<ul style="list-style-type: none"> ・題材の見通しを持つ（「問い」の工夫Ⅰ） ・自然の中にはどのようなエネルギー資源があるか、一次エネルギー、二次エネルギー、様々な発電方法の長所・短所について調べる。（「問い」の工夫Ⅰ） 	<ul style="list-style-type: none"> ・自然には様々なエネルギー資源があり、人間はそれを変換して利用してきた。 ・今回調べた内容をもとに、様々な発電方法について考えたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自然界にあるエネルギーを生活に生かせるように変換することがエネルギー変換であることに興味を持つ。 ・見通しを持って、調べ学習に取り組んでいる。（ワークシート）
2	エネルギー資源 【本時】	1	<ul style="list-style-type: none"> ・一次エネルギーと二次エネルギーの違いを考える。 ・それぞれの発電方法の長所・短所を考える。（「問い」の工夫Ⅱ） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ただ効率がよい方法を初めは考えていたが、安全性、出力、変換の効率、環境への負荷や省エネルギー、経済性など、様々な視点で考える必要があることがわかった。 ・安全性や環境面への配慮から化石燃料に変わる資源の有効利用が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・エネルギー変換の意味、効率や損失の概念（多面的理解）を理解できている。（ワークシート）
3	二次エネルギーの利用	1	<ul style="list-style-type: none"> ・熱エネルギーを運動エネルギーに変え、さらにそれを電気エネルギーに変えて、生活で利用する技術を調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・二次エネルギーで特に扱いやすい電気エネルギーに変換して利用している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・二次エネルギーが機器や機械にどのように利用されているかを理解する。（ワークシート）
4	エネルギーの変換と効率	1	<ul style="list-style-type: none"> ・白熱電球・LED電球の発行の原理やエネルギー変換効率の違いを比較する。 ・消費電力や使用可能時間、価格など環境的及び経済的な側面から比較し、どの照明機器を使いたいかな判断する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・エネルギー変換効率を上げる技術の開発と同時に、環境への負荷軽減が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・エネルギーを有効に活用するため、エネルギー変換効率を高める工夫が必要であることを説明できる。（ワークシート）
5 ～ 16	実習・製作 （電気回路を用いたスピーカ の製作）	16	<ul style="list-style-type: none"> ・実習を通して、利用する技術が社会や環境に与える影響を考える。 ・安全に効率よく正確に作業をし、製作を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・製作品の使用目的を明確にし、社会的・環境的及び経済的側面から設計要素を比較・検討した上で製品に適したエネルギーの変換方法を検討する必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・設計に基づき、安全を踏まえた上で製作品の組み立て、調整ができる。（製作品、振り返りシート）

⑦ 本時案

- (1) 題 材 「エネルギー変換に関する技術」(エネルギー資源)
- (2) ねらい 主な発電方法を長所と短所を説明する活動を通して、安全性、出力、変換の効率、環境への負荷や省エネルギー、経済性などの観点から評価することができる。
- (3) 展 開

学習活動	時間	指 導	期待される学習者の反応	備考・評価
1. 自然界のエネルギーとその利用について考える。	5	<p>めあて：それぞれの発電方法を評価しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然界に存在するエネルギー資源について発表させる。 ・一次エネルギーと二次エネルギーの違いを考えさせる。 ※そのままでは利用しにくいことを理解させ、電気(二次エネルギー)に変換して利用していることを思い出させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・風、太陽光、水力、地熱などの項目があがる。 ・発電などで利用されている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一次エネルギーと二次エネルギーの違いを例に挙げながら説明できる(知)
<p>課題：私たちはどの発電方法を選択する必要があるだろうか。</p>				
2. 現在の日本で行われている発電方法を班ごとに選び、長所と短所を考える。	15	<p>安全性、出力、変換の効率、環境への負荷や省エネルギー、経済性などを書いたシートを準備し、それぞれの項目を関連付けて、長所と短所を考えさせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・水力発電は安全性が高いが、出力や効率が悪い。 ・火力発電は出力が高く効率もよいが、化石燃料の価格に影響しCO₂の排出などの問題がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・長所と短所を各項目について多面的に考え、まとめることができる(工)
3. 班で考えた内容を発表する。	20	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちが調べた発電方法を各項目で評価し発表させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各班の発表を聞き、自分たちの調べた発電方法との違いを考える。 	
4. まとめ	5	<p style="text-align: center;">「問い」の工夫Ⅱ</p>		
5. 振り返り	5	<ul style="list-style-type: none"> ・授業を通して感じたことをワークシートに記入させる。 ・社会における今後の課題などにも着目させ、振り返らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの発電方法の違いが分かった。 ・再生可能エネルギーは安全だが、効率や出力が弱いのでより高い技術を開発しないとけないと思った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・エネルギー変換の意味、効率や損失の概念を理解できている(理)
<p>まとめ：発電方法によって効率に違いがあり、エネルギーは変換することで損失する。安全性、出力、変換の効率、環境への負荷や省エネルギー、経済性など、様々な視点で考え、判断するとともに、安全性や環境面への配慮から化石燃料に代わる資源の有効利用が必要である。</p>				

(4)板書計画

<p>めあて それぞれの発電方法を評価しよう</p> <p>○自然界に存在するエネルギー</p> <p>・風 ・太陽光 ・地熱 ・石油 など ⇒一次エネルギー</p> <p>この状態では利用しにくい</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>・電気 ・ガソリン ・ガス など ⇒二次エネルギー</p> <p>課題 私たちはどの発電方法を選択する必要があるだろうか。</p> <p>評価するポイント</p> <p>・安全性 ・出力 ・効率 ・コスト ・環境面</p>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;">安全性</td><td style="width: 50px;"></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">出力</td><td></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">効率</td><td></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">コスト</td><td></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">環境面</td><td></td></tr> </table> <p>まとめ</p> <p>それぞれの発電方法でメリット・デメリットがある 化石燃料での発電は効率が悪く、資源の問題やCO₂の問題がある。</p> <p>再生可能エネルギーは出力が低く、コスト面での課題があるが、今後発展をさせていく必要がある。</p>	安全性		出力		効率		コスト		環境面	
安全性											
出力											
効率											
コスト											
環境面											

⑧ 結果と考察

現在使用されている発電方法を5つ挙げ、それぞれのグループに分け、調べ学習を行った。自分たちが調べた発電方法と他の発電方法を比べ、評価することで現代社会におけるエネルギー問題への関心や再生可能エネルギーへの関心を高め、日本が抱えるエネルギーの諸問題を考えることをねらいとした。調べ学習を取り入れることで、課題を自分事として捉えられたことに加え、次の時間に何を学ぶのかを学習者が意識し、題材のゴールへと近づいていく様子が感じられた。このことから主体性が高まったと考えられる。身近なエネルギーについて分類するとともに主な発電方法の仕組みを理解し、長所・短所を考えることで安全性・出力・変換の効率・環境への負荷や省エネルギー、経済性について着目させるようにした。「問い」の工夫Ⅱでは、視点を明らかにすることでそれぞれの発電方法を比較しやすく、日本が抱えるエネルギー資源の問題を明確に、そして多面的に理解することができる考えた。結果としては、前時のグループワークにおいて発電方法について調べ、示した視点を軸に考えられた発表となった。例として、「水力発電」のグループを挙げると、「環境面への負荷は少なく、二酸化炭素をほとんど排出しないクリーンな再生可能エネルギーであり、電力需要の増減に対応した発電ができ最も安定的な発電ができるという長所がある。また起伏が多い日本に適した安全性と環境面への負荷が少ない純国産エネルギーである。」というように視点に沿って明確且つ多面的に考えた論述をすることができた。他のグループも同様に、比較の際に他の発電方法との違いやメリットが顕著に挙げられ、ねらいに迫りやすい工夫になったと考えられる。しかし、再生可能エネルギーの出力やコスト面での課題もデメリットとして明確になるため、利用も多く、出力の高い火力発電や原子力発電を高く評価するケースも見られた。これからの日本のエネルギー問題を考える上で必要である変換効率の向上や環境保全などに着目できるような問題提起をする必要を感じるとともに、この点を「問い」の工夫Ⅱとして、資料等で提示することで、学習者の思考を揺さぶることができたのではないかと考える。また、今後の展開としてはエネルギー技術の開発や省エネルギー化のための方法を考え、現代社会からの要求に対してどう向き合っていくかという内容の「もし自分が電力会社の社長だったら何を重視して電力供給をするか」また、「その場合に考えられる問題点は何か？」などこれからの社会に生きる一員としてエネルギー問題にどう向き合っていくべきか考えることができるロールプレイング形式での展開を取り入れ、題材を修正しようと考えている。このことで、より主体的な学習となるとともに、多角的な視点で考えることができると考える。

実践事例 2 家庭分野

① 題材 住まいと自立

② 対象学年 1年生

③ 題材設定の理由

〈題材について〉

この題材では、課題をもって健康・快適・安全で豊かな住生活に向けて考え、工夫する活動を通して、家族の生活と住空間との関り、住居の基本的な機能、家族の安全を考えた住空間の整え方に関する知識及び技能を身に付け、これからの生活を展望して、住生活の課題を解決する力を養い、住生活を工夫し創造しようとする実践的な態度を育成することを目的としている。健康・快適・安全で豊かな住生活の実現のためには、家族の思いや願いを互いに尊重し、ライフステージに合わせた住まいと住まい方を考えていく姿勢が必要である。

〈学習者について〉

本学級の学習者は、授業で学習したことを自分の生活に結び付けて考えることができる学習者が多い。被服分野の学習では授業の振り返りの中で、今日学習したことを自分の生活で実践してみたいと具体的に書いていた学習者が多く見られた。しかし、住生活の分野では、家族にゆだねている部分が多く、健康・快適・安全な住まい方を工夫し実践する学習者は少ないため、今の自分の住まい方を見直し、これからの住まい方をよりよいものにしていく実践的な態度を身に付けることが課題である。

〈指導・「問い」の工夫について〉

本題材を通して住まいのチェックシートを作成し、そのチェックシートを学習者自身の住まい方に活用できるようにすることで、主体的に学習に取り組めるようにするとともに、自己の生活に生かすことができるようにした（「問い」の工夫Ⅰ）。まず、住まいのチェックシートを作成するにあたっての健康・快適・安全という項目に分類し、それぞれの知識を身に付ける。学習者達も知っている磯野家の間取りや住まい方を使って、磯野家の問題点を他者と話し合いながら改善策を考えると同時に、チェックシートの項目を作成し、改善策を話し合う。ここでは、快適な住まいとは、家族の思いを互いに尊重し合うことも必要であることに気付かせたい。最終的な活動として、磯野家を通して作成したチェックシートを用い、自分の家の問題点を見つけ、改善・振り返りをし、これから先の住まいや住まい方を考えさせる（「問い」の工夫Ⅱ）。

④ 題材の目標

- ・自分や家族の生活行為と住空間との関り及び、住居の基本的な機能について理解すること。B(6)ーア
- ・家族が安心して住むためには、住空間を安全な状態に整える必要があることを知ることができ、家庭内の事故を防ぎ、自然災害に備えるための住空間の整え方について理解すること。B(6)ーア（イ）
- ・健康・快適・安全な住まい方についての課題を解決するために、既習事項を活用し安全などの視点から、住空間の整え方について考え、工夫すること。B(6)ーイ

⑤ 題材の評価規準

ア	イ	ウ	エ
関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
健康・快適・安全な室内環境の整え方と住まい方について、関心をもって取組み、住生活をよりよくしようとしている。	健康・快適・安全な室内環境の整え方と住まい方について課題を見つけ、その解決方法を目指して工夫している。		住居の機能について理解し、健康・安全・快適な室内環境の整え方と住まい方に関する基礎的・基本的な知識を身に付けている。

⑥ 題材指導計画（総時数 6 時間）

題材を通したためあて

「住空間の整え方に関する基礎的・基本的な知識を身に付け、健康・快適・安全な住まい方を考えてみよう」

	めあて・課題	学習活動	「問い」の工夫	振り返り	評価	評価方法
1	めあて 住まいの役割と機能を知り、磯野家の住まいを3つの視点から考えよう。	・健康・快適・安全な住まいとはどんなものか考え、住まいの役割について考える。 ・磯野家の間取りを健康・快適・安全の視点から見て、問題があると思う所に付箋を貼る。	・健康・快適・安全な住まいの条件を考える。 ・磯野家の間取りを3つの視点から見た時の問題点を見つける。	健康・快適・安全な住まいを考え、磯野家の問題点を見つけることができた。	ア 住まいについて関心を持ち、住居の基本的な役割を理解しようとしている。	ワークシート
2	めあて 家庭内で起こる事故について考え磯野家を安全な住まいにしよう。	・家庭内事故・自然災害について知り、工夫の仕方を考える。	I 磯野家を健康・快適・安全な住まいに改善するために、チェックシートを作成する。その際、磯野家を例に考えさせ、自分の生活でも実践できる成果物を作成する。	・家庭内で起こる事故の種類と原因を理解し、防ぐための工夫をすることができた。	エ 家庭内事故の種類とその原因を理解することができる。	ワークシート
3	めあて 磯野家を健康で快適な住まいになる工夫を考えよう。	・日本の住居の特徴や光・換気・湿度・生活動線・プライバシーの視点から磯野家を見直し、問題点を探す。		・磯野家の間取りから、問題点を見つけ改善する工夫をすることができた。	イ 安全で快適な室内環境の整え方と住まい方について考え工夫することができる。	ワークシート
4 本時	めあて 磯野家のこれからの住まい方について考えよう。	・磯野家の願いや思い・ライフステージに応じて、快適に住むための工夫を考える。	・快適に住まうためには、家族の思いや願いを尊重することも大切であることに気付く。	・快適な住まい方は、その時の願いや思い・ライフステージに合わせた工夫をすることで得られる。	ア 磯野家の住まい方を考える活動を通して、家族の願いや思いを尊重した住まい方を理解することができる。	ワークシート
5	めあて これまでの知識を活かしてチェックシートを完成させよう。	・これまでの学習を活かし、チェックシートを作成する。 ・次時までには自分の住まいを点検して行く。	II これまでの学習で得た知識を使って作成したチェックシートを使って自分の住まいをチェックする。チェックされたところを改善する工夫を考え、実際に取組、自分の家を改善する。	・自分の家を安全・健康・快適な住まいにするためのチェックシートを完成することができた。	イ これまでの既習事項を使い、チェックシートの項目を考えることができる。	ワークシート
6	めあて 我が家を健康・快適・安全な住まいにしよう。	・チェックシートを使って、見つかった住まいの問題点を改善する工夫を班で考える。		・チェックシートを使って、見つかった住まいの問題点を改善する工夫を班で考えることができた。	イ 住まいの問題点をこれまでの知識を使って解決することができる。	ワークシート

⑦ 本時案

- (1) 題材 「ともに住もう」
- (2) ねらい 未来の磯野家が快適な住まい方の工夫を他者と交流する活動を通して、快適さは家族の思いや願いを尊重したり、ライフステージに合わせた住まい方を工夫したりすることで得られることに気付くことができる。
- (3) 本時における「問い」の工夫
 I：導入で磯野家のこれからの変化を考えさせる発問をし、住まい方が変わることに気付かせることで本時のめあてにつなげる。
 II：各班が異なった磯野家の未来の状況カードをもとに、家族の願いや思いを叶えるための工夫を考えることを通して、住む人の願いや思いを互いに尊重し、暮らしに合わせた住まい方を工夫すれば、快適に住まうことができることに気付けるよう試みる。

(4) 展開

学習活動	時間	指 導	期待される学習者の反応	備考・評価
めあて：磯野家がこれから快適に住む方法について考えてみよう。				
1. 磯野家が、これからの住まい方にどんな変化があるか考え発表する。	5	I 前時の活動を振り返り、磯野家のこれからの変化を考えることで、住まい方は変わることに気付かせる発問をする。 「磯野家にこれからどんな変化があるだろうか」	・カツオとワカメがそれぞれ1人部屋がほしいという。 ・フネさんと波平さんが高齢になり、足腰が悪くなる。	・ワークシート
2. 未来の磯野家の状況や願いが書かれたカードを基に、住まい方の工夫を考える。 (個人→班)	15	II 3種類の状況カードを準備し、各班が異なった状況の設定の工夫を個人で考えさせる。	・状況カードに応じて住まい方の工夫を考える。	・磯野家の状況が書かれたカード
3. 考えた工夫を班の中で発表し合う。	8	・班で話し合い、他の人の意見を自分の工夫に反映させる。		
4. 考えた工夫を発表する。	8	・数人に発表させる。		
5. 状況カードに書かれたことについて考える。	8	発問 「状況カードに共通して書かれていることは何だろう」	・家族の思い ・住まいに対する要望 ・住まいに対する願い	ア. 磯野家の住まい方を考える活動を通して、家族の願いや思いを尊重した住まい方を理解することができる。
6. 振り返りをする。	6			
振り返りの視点：本時を通して、快適な住まい方について新たな視点を持つことができたか。 期待される振り返り：快適な住まい方は、ライフステージに合わせた願いや思いを叶えることで得られることができると気付いた。 今日の学習を快適さのチェック項目に取り入れたい。 自分も家族と話をし、住まい方を考えてみたいと思った。				

(5) 板書計画

めあて：磯野家がこれから快適に住む方法について考えてみよう。

課題：磯野家のみんながこれからも快適に住もうためにはどう工夫すればよいだろう。

<現在の磯野家の状況>

- ・波平 54 歳 フネ 50 歳
- ・サザエ 24 歳 マスオ 28 歳
- ・タラオ 3 歳
- ・カツオ 11 歳 ワカメ 9 歳

<これから起こりえる変化>

- ・一人部屋がほしい
- ・たらちゃんに兄弟ができる
- ・波平さんの足腰が悪くなる

状況カード



状況カード



状況カード



状況カードに共通して書かれていることは何だろう

- ・家族の思い
- ・住まいに対する要望

振り返り

・快適な住まい方は願いや思い
快適な住まい方は、ライフステージに合わせた願いや思いを叶えることで得ることができると気付いた。

⑧ 結果と考察

家庭分野としては、自分の住生活を振り返り、よりよく住もう工夫を実践する態度を養うために、「健康・安全・快適」の視点から住まいのチェック表を作成し、自分たちでチェック項目を考え、その項目に沿って自分の住まいを点検し、改善する活動を設定した。

「問い」の工夫Ⅰとしては、班で点検項目を考えチェック表を作成することとした。チェック項目を考えるにあたり、健康・安全・快適の基礎知識をそれぞれ学習した後に、チェック表を作成することで、学習した知識をチェックシートの項目に生かそうと工夫する意欲的な姿が見られた。

「問い」の工夫Ⅱとしては、チェック表を使って自分の住まいを点検し、改善策を班で考え、実際に改善することとした。チェック項目の中で改善が必要だったものの中から、「すぐに自分一人で改善できるもの」は土日を使って改善した。また、「すぐにできるが一人では改善できないもの」「時間がかかるが自分で改善できるもの」「時間がかかり、一人ではできないもの」に分類したものは、優先順位が高い順に並べ、優先順位が高い3つは冬休みを使って改善するようにした。

すぐに自分で改善できるものを改善した後に、学習者の感想として、「家の中にあまり危険はないと思っていたが、よく見ると改善するところがたくさんあった。一つ改善すると次の問題が出てくるので、また改善すると問題がまた出てきて・・・というように次々と問題点が出てきた。」というように、自分の生活を見直し、自分でよりよく住もう方法を見つけることができた学習者もいた。また、冬休みの改善をした後の学習者の感想としては、「5年後10年後と環境はどんどん変化していくのでその時の環境にあったチェック項目を考えて、よりよい住まいに出来るようにしたい。」というように、今後も継続して自分の住まいを改善する意識を持つ学習者もいた。

また、安全に関する学習の際、磯野家の間取りを使い幼児・高齢者の視点と、自然災害・防犯の面からみた住まいの危険箇所を班で探す活動をしたが、学習者の感想の中に「近所のお店でダンスの下に敷きこむタイプの茶色のもを見つけて“これだ!”とあってうれしかった。ダンスを浮かせて取り付けるのは難しいと思っていたけど、簡単に取り付けることができ驚いた。長年気になっていたことを改善できてスッキリした。」とあり、簡単に手に入る防災・防犯グッズや、簡単に取り付けられるライトや手すりなどの便利グッズを紹介したこともあり、学習者が自分の生活の中で生かすことができたのだと考える。

家庭分野では、「問い」の工夫ⅠとⅡの繋がり、学習と生活との繋がりを意識して、この題材に取り組んだが、学習者の感想からも、今回の「問い」の工夫が自分の生活により身近で、実践的な学習になっていたように思う。また、今回の授業だけではなくライフステージの変化に合わせて、自分の住まいをより良くしていこうという意識も芽生えていることが成果としてあげられる。

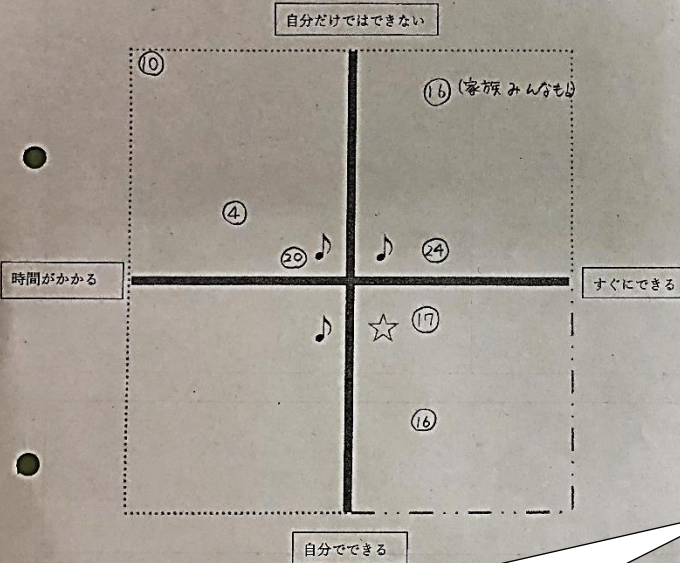


改善シート (分類)

・チェックシートに書かれている項目の通し番号を、「時間軸」と「自分だけで改善可能・不可能という軸」で振り分けている。

☆エリア・・・自分ですぐのできる もの

♪エリア♪・・・自分でできない+時間がかかる もの



改善シート (改善策の検討)

班のみんなでチェックシートの項目の改善方法を考えた。

<☆エリア---すぐに自分でできるものリスト--->

優先順位	チェックシート番号	改善方法
①	⑬	家を出る前に1回ドアを引いてみてかくはん。
②	⑬	自分が何を持っていくかリストをつけ、授戸の近くにおいておく。
③		
④		
⑤		

<♪エリア---その他改善を優先した方がよいものリスト--->

優先順位	チェックシート番号	改善方法
①	20 (17)	どの家具がグラグラしているのかをチェックして、ビスをきつめなおす。
②	24	ガムテープなど、かんたんなものでも自力でとりつける。フィルムを貼る。
③		カがある母水などもってなど、役割り分たんとする。
④	4	ネコよけなどもかって、ばねなどにまく。
⑤		

<振り返り>

私は家にそんなに「改善点」はないと思っていただけで、以外にあっておどろきました。「0」がつけていても、いつかは「X」になるかもしれないので心かたいた。

改善シート (改善の計画)

【上段】改善する項目・改善するための工夫・実践した結果

【下段】実践してみた感想・気付いたこと・これからの自分の住まい方

改善する項目	改善するための工夫	実践した結果
<ul style="list-style-type: none"> かんきできているか。 鍵がちゃんとかかっているか。 毎日自分の部屋はキレイか。 	1時間に3回(分)あける 行く前に2回かくはん。 1日10分、朝日そうじの徹底!	エアコンなどでこもてモヤモヤしていたけれど、窓をあけることによりスッキリした。 「家し、かりしめてたかな?」という不安がなくなった。 整理整頓ができているとスッキリした。

チェックシートを作ったことで、自分の生活を見直すことができたという感想があり、変容がみられた。

<これからの自分の住まい方>快適・安全・健康の3つの観点を考えることが、みんなが快適に住まうことができることに気付き、これからの生活に生かそうとする態度がみられた。

<実践してみた感想>

私ははじめ「快適・安全・健康」というのはできて、今の生活をすごしていました。だけど、それは違っていて、自分だけが考えていて、他の人は快適に感じていないのが分かり、学校でのチェックシートをつってみると、自分でも他の人でも△、×がつくことがありました。自分の中でできることができて取りこんでみると、もっといい感じになってきた。

<気付いたこと>

私が気づいた事は自分が意識すれば何でもできるということです。これまで「自分が意識する」ということがなかったのだから、かいてきにはできていなかったけれどできてよかった。

<これからの自分の住まい方>

私は「快適さ」に重視して、「安全」・「けんこう」などは考えたことがなかったけれど、「快適さ」=「安全」+「けんこう」があることになり立っことがあつたのでこれからは、3つが揃って成ることができるよう「今日から〇〇はつづけよう」と目標をつけ、かんげっていきなす。まずは自分さえよければいいのではなく、他の人のことも考えて3つのポイントを毎日たせ、させようと思っています。

題材構想メモ

題材「 住まいの自立 」

① 題材の目標は何か（資質・能力）

自分や家族の生活行為と住空間との関りが分かり住居の基本的な機能について理解できる。家族が安心して住もうためには、住空間を安全な状態に整える必要があることが分かり、家庭内の事故を防ぎ、自然災害に備えるための住空間の整え方について理解できる。

健康・安全・快適な住まい方についての課題を解決するために、既習事項を活用し安全などの視点から、住空間の整え方について考え、工夫することができるようにする。

④問題意識を持たせるために、どのような導入を図るか（③を届けるために）

磯野家住まいのチェックシートを作成し、そのチェックシートを学習者自身の住まい方に活用できるようにすることで、主体的に学習に取り組めるようにするとともに、自己の生活につながるようにした。

問いの工夫Ⅰ

磯野家を健康・安全・快適な住まいに改善するために、チェックシート（成果物）を作成する。その際、磯野家を例に考えさせ、自分の生活でも実践できるようにする。

③どのようなめあてで、課題にするか（各教科の見方・考え方が働くもの）

住空間の整え方に関する基礎的・基本的な知識を身に付け、健康・安全・快適な住まい方を考えてみよう。

⑤どんな追及活動を行わせるか（言語活動含む）

- ・授業で得た知識を活かし、チェックシートの項目を考え、チェックシートを作り、自分の住まいを点検する。
- ・磯野家の未来の状況カードをもとに、学習者がカードに書かれている家族の願いや思いを叶えようと考え、住む人の願いや思いを互いに尊重し、暮らしに合わせた住まい方を工夫すれば、快適に住まうことができることに気付かせる活動を行わせる。

⑥使える資料は何か。どこで使うか。

- ・教科書
- ・磯野家の間取り図

問いの工夫Ⅱ

これまでの学習で得た知識を使って作成したチェックシートを使って自分の住まいをチェックする。チェックされたところを改善する工夫を考え、実際に取り組み、自分の家を改善する。

②題材の最後に理解させたいこと、発言させたいことは何か（題材のゴール+振り返りの視点）

・チェックシートを使い自分の住まい方を見直し、自分の住まいを健康・安全・快適なものに工夫することができる。

【予想される振り返り】

- ・自分の住まいをチェックシートで点検することで、安全な住まいにすることができた。
- ・これまで住まいに関して意識することが少なかったが、これから快適に住まうために意識して生活していきたいと思った。

⑦まとめの表現活動をどうするか

チェックシートを使って自分の家を点検する。

2 技術・家庭科における成果と課題

技術・家庭科では本年度、生活や社会の中から問題を見いだして課題を設定し、各分野の見方・考え方を働かせながら課題を解決させる過程において、「問い」の工夫を設定する際、題材を通して何を目標とするのか、そして実習との連携、実生活との関連を強く意識した。また、振り返り活動を題材の途中で設定するなど、形成的な効果を取り入れるための工夫を行った。

授業者が「問い」を工夫することにより「主体的・対話的で深い学び」が実現できるのではないかと考えた。技術分野では「エネルギー変換に関する技術」、家庭分野では「住生活」の学習において実践を行った。実習においても、題材を通じた「問い」に対して他者と意見交流する場面を設定し、班活動などを通して、協働しながら製作活動に取り組んだ。

技術分野における成果は、エネルギー資源とその利用について、既習内容や調べ学習を通して現在利用されている発電方法について得た情報を現代社会において問題視されている5つの項目でメリット・デメリットを考えさせることで、社会生活におけるエネルギー問題について多面的に考えることができたことである。また、学習者の生活実態に合わせた題材を設定したことにより、意欲的に発電方法を比較・検討する様子が見られた。現在使われている発電方法のいずれにもメリット・デメリットが存在するが、社会からの要求や持続可能な社会を形成する上で「これから必要なこと」を考えさせたことで化石燃料の枯渇の問題や二酸化炭素の排出、放射性物質の処理の問題、さらにはクリーンエネルギーの必要性など多面的に考えることができたと言える。また、実習においては変換効率を上げるためにはどうしたらよいかを考えながら実習を行い、省エネルギー化をグループで考えることで題材の目標達成につなげることができた。

現在、これまでの調べ学習や話し合い活動で学んだ知識をもとに、主体的に実習を行うことができています。しかし、それが有効に働いているかは疑問である。座学で学んだ知識を活かし、製作を行うためには、座学と実習を繋ぐ手立てやプロセスが必要だと考える。また、実習の途中で自分の製作過程を振り返り、改善する活動を位置付けることが、目標の達成に必要であることが分かった。題材の中にそれらを、「問い」の工夫として仕組みたい。多くの課題が残された授業実践であったが、新学習指導要領にある技術科の見方・考え方を働かせ、エネルギー変換に関わる問題を考えさせることができた。これからも、学習者の生活から問題を見いだして課題を設定し、「問い」の工夫を明確にすることで、主体的・対話的で深い学びを実現できるように、授業実践の研究を進めていく。

家庭科では住分野で実践を行ったが、住生活は保護者や大人などに頼っている部分が多く、学習者自身が住まいに関する課題を見つけ、解決に向けて実践的に取り組むことは難しいと考えていた。指導者側から課題を提示したものの、その中で「問い」の工夫としてチェックシートを作成すること(I)・実際に改善する工夫を入れたこと(II)によって、学習者が主体的に取り組めるようになり、学習者の感想や振り返りからもわかるように、自己の生活に生かそうとする態度を身に付けることができたように考える。また、「問い」の工夫の中に、他者との交流の場を設けることによって、既に自分の家で行っていることや、持っている知識を共有でき、よりよいチェック項目を考えることができた。

課題としては、指導者からではなく、住生活のガイダンスの際に学習者から課題を引き出すような手立てを考えることができれば、学習者が工夫し創造する力を身に付けることができるような発展的な授業を行うことができたと考える。また、教科横断的な取組として他教科とも関連した授業内容の工夫が必要だと考える。今回の分野であれば、快適さの知識の習得の際、日射や結露・騒音など理科分野との横断的な学習が充実することができていれば、学習者の理解もより深まる。他の分野でも、社会科や理科・技術科との横断的な学習が考えられるので、学習者が自分の生活において、学習した知識を実践できるような授業を作り上げていかなければならないと考える。

最後に、来年度から新学習指導要領が実施されるが、引き続き「生きる力」を育ていくことが重要視されている。新たに、生きて働く「知識・技能」の習得・未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成・学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養と書かれている。技術・家庭科としてこれから目まぐるしく変わっていく社会の中で、変化に対応しながら充実した生活をする能力を身に付けさせることは重要な責任だと思い、今後も研究を進めていきたい。

1 取組の実際

実践事例 1

- ① 単元 体育理論～人々をつなぐスポーツ～
- ② 対象学年 3年生
- ③ 単元設定の理由

〈単元について〉

本単元は、現代生活におけるスポーツの文化的意義、国際的なスポーツ大会とその役割、人々を結びつけるスポーツから構成され、スポーツを通じた自己開発、オリンピックや国際的なスポーツ大会が国際親善や国際平和の役割を担っていることを知識として理解できるようにすることがねらいである。また、国際的なスポーツ大会を通して国籍や民族、年齢や性別、障がいの有無などを越えて人々を結びつけ、各国相互の国際交流や国際理解につながっていることについて触れている。生涯にわたり生きがいのある豊かな人生を送る上で必要となるスポーツに関する知識を身に付け、その知識を基に実生活や国際社会との関連性を考察することが求められている。

〈学習者について〉

- 学習の経験状況、興味・関心、意欲、学び方の状況、技能の習得状況

学習者の多くは、体を動かすことは好きだがボールを扱ったり複雑な運動したりすることは苦手である。幼少期から習い事をする学習者が多く、体を動かす「時間・空間・仲間」がなく、遊びの中での身体活動の習得が少なかったと考えられる。しかし、体育の授業には積極的に取り組み、学びのポイントを理解している学習者が多くいる。自分の体力や技能を高め、楽しむために積極的に運動を行うことができ、学習活動を素直に実践しようとする。

- 体力実態、質問紙調査結果

昨年度の新体力テストの結果では、反復横跳び、20mシャトルランが全国平均を上回っているが、ハンドボール投げ、50m走は大きく下回っている。生活習慣等アンケートの結果では、「運動やスポーツをするのが好き」は男子100%女子95%(19人)いたが「運動やスポーツが得意」は男子40%女子30%と少なく「運動は好きだが苦手」という学習者が多いという結果になった。リーダーシップをとれる男子が多く、体育の授業でも活発に動く学習者が多い。女子はどちらかというと内向的な学習者が多い。定期的に運動をしていた学習者は男子80%女子30%と女子が少なく、女子の内10人は体育の時間以外に体を動かす機会がほとんどない状況が幼少期から続いている。主な理由として遊びの中の身体活動(時間、空間、仲間)の減少、習い事による多忙化が考えられる。ボールの扱いなどにも慣れておらず、スポーツテストのハンドボール投げの結果にも影響しており、運動が十分とれている学習者とそうでない学習者の二極化が起きている。3年生となり運動から離れている学習者が多いため自分とスポーツや運動について考えるよい機会になると思われる。

〈指導・「問い」の工夫について〉

本単元では座学中心の体育理論に実技を取り入れることで、理論だけでなく実践を伴う授業を意図した。そして、発問を構造化することで学習者の理解を深め、知識を実生活に生かせるようにした。それらを「問い」の工夫Ⅰ・Ⅱと位置付けた。

④ 単元の目標

- 文化としてのスポーツの意義について、課題を解決するための活動などを通して、学習に自主的に取り組むことができるようにする。(態度)
- 文化としてのスポーツの意義について、学習した知識を活用したり応用したりすることができるようにする。(思考・判断)
- 文化としてのスポーツの意義について理解できるようにする。(知識)

⑤ 単元の評価規準

	ア	イ	ウ
	運動への関心・意欲・態度	運動についての思考・判断	運動についての知識・理解
単元の評価規準	文化としてのスポーツの意義について、課題を解決するための活動などを通して、学習に自主的に取り組もうとしている。	文化としてのスポーツの意義について、学習した知識を活用したり応用したりしている。	文化としてのスポーツの意義について理解している。
学習活動に即した評価規準	①文化としてのスポーツの意義について意見の交換をしたり、自分の意見を発表したりするなどの活動を通して、常に自主的に学習に取り組もうとしている。	①国際的なスポーツ大会とその役割、スポーツの人々を結びつける文化的な働きについて、必要な情報を収集し比較したり、分析したりして、まとめた考えを根拠を示し説明している。	① 生涯にわたり健康でよりよい生活を送るためのスポーツが重要であることについて具体的に言ったり書き出したりしている。 ② オリンピックや国際的なスポーツ大会が国際親善や国際平和の役割を担っていることについて具体的に言ったり書き出したりしている。 ③ スポーツが人々を結びつけていることについて具体的に言ったり書き出したりしている。

⑥ 単元指導計画（総時数 3 / 4 時間）

	めあて	学習活動	問いの工夫	振り返り	
1	単元のめあて 文化としてのスポーツの意義を理解する。				ア ①
	現代社会におけるスポーツは、生きがいのある豊かな人生を送るために三つの意義があることを理解しよう ①健やかな心身 ②豊かな交流 ③伸びやかな自己開発	①自分の過去・今・将来でスポーツとどのような関わりを持つか表にまとめる→ 他の人の意見を聞き、自分の表と見比べ新しい発見する	①今までにしたことのあるスポーツを上げてみよう ②その他友達がしていたもの見たことがあるものを加えてみよう ③スポーツをする目的をより多くあげてみよう	現代スポーツの意義を理解し、自分の生活や将来とつなげることができた	
2	国際スポーツの種類と歴史、役割を調べ班で発表しよう→ スポーツの良さ魅力を上げよう	教科書やインターネットを使って、国際スポーツについて調べ学習をする	各班で国際大会をインターネットで調べて発表し、共通点を探そう	国際的スポーツ大会の役割は ①国際親善②世界平和が共通していることを見つけることができた	イ ①
③ 本時	スポーツにはどのような役割があるか考えよう	①オリンピック・パラリンピックの映像を見る ②夏季オリンピックの参加国の変遷	発問「スポーツは〇〇の違いを超えて」〇〇に入る言葉と具体例を話し合おう	①スポーツという言葉が世界中に広まっていること ②単に運動というだけでなく文化として変化している ③様々な大会が実施されている	ウ ③
4	バレーボールでみんなが楽しめるように運営しよう	①男女別でバレーの試合をする ②男女同一チームでバレーの試合をする	みんなが楽しめるようにするためにはどうすればよいかまた、スポーツの楽しさにはどのようなものがあるか 実践を取り入れることによって理論をより実感できるものにする	一緒に楽しむ具体的な方法を見つけ出し発表できた	ウ ③

⑦ 本時案

- (1) 題材 「人々を結びつけるスポーツ」
- (2) ねらい グループでの学習を通して、スポーツには民族や国、人種や性、障がいの有無、年齢や地域、風土といった違いを超えて人々を結び付ける文化的な働きがあることを理解できるようにする。
- (3) 本時における「問い」の工夫
発問を構造化し、考えたことを実生活に結び付けることによって理解を深める
- (4) 展開

時間	学習内容及び学習活動 ◆指導上の留意点	評価方法及び評価規準
は じ め 1 0 分	<p>1 あいさつ、前時の確認をする。(2分)</p> <p>2 発問①を考える。(3分)</p> <p>発問①言葉の通じない国の中学生と仲良くなる方法を考えよう</p> <p>3 本時のめあてと評価項目の確認をする。(5分)</p> <p>めあて：スポーツにはどのような役割があるか考えよう。</p> <p>評価：スポーツの役割について具体的に言ったり書き出したりしている。(知識・理解)</p>	<p>ゲーム、スポーツ、趣味</p>
な か 2 0 分	<p>4 ①言葉の通じない国の中学生と仲良くなる方法を考えよう</p> <p>②スポーツならどのようにすれば一緒に楽しめるか (5分)</p> <p>③オリンピック・パラリンピック、アダプテッドスポーツの映像視聴 (5分)</p> <p>発問②「スポーツは〇〇の違いを超えて」の〇〇と具体例を出し合おう。 →ワークシート記入→発表 (10分)</p>	<p>ルールの共通化</p> <p>期待される答え ・人種・性別・民族・障がいの有無・年齢・地域・風土</p>
ま と め 2 0 分	<p>5 振り返り</p> <p>振り返り：スポーツには人々を結びつける役割がある</p> <p>・ワークシートを使い学習を振り返る (15分)</p> <p>夏季オリンピックの参加国の変遷とアジアカップの競技の問題を見る。スポーツという言葉が世界中に広まっていること、時代によってスポーツの解釈も変わってきていることを理解する。</p> <p>6 ・次の授業の男女共修バレーボールの運営を通して、「スポーツは性別の違いをこえて」の計画を立てる。(5分)</p> <p>発問③男女共修でバレーをして全員が楽しむためにはどのようにしたらいいかをチームで意見を出し合い、ルール作りをする。</p>	<p>○ワークシートによる評価 (知・理) おおむね満足</p> <p>・出てきた問いの答えとスポーツとの結びつきを理解し、スポーツが人々を結びつけていることが理解できている。</p> <p>努力を要する学習者への手立て</p> <p>・次時のバレーボール運営の振り返りをまとめさせる。</p> <p>・ルールの変更 ・道具の工夫 ・チームの工夫 など</p>

(5) 板書計画

めあて	スポーツにはどのような役割があるか考えよう。	
評価	スポーツの役割を見つけ、言ったり書き出したりすることができる。	オリンピック参加国の変遷のグラフ
問①	言葉の通じない国の中学生と仲良くなる方法を考えよう	アジア大会競技種類のグラフ
	↓	
	ゲーム、遊び、 <u>スポーツ</u>	
	スポーツならどのようなことに気を付ければ一緒に楽しめるか	
	⇒ ルールの設定、道具の工夫 など	
問②	スポーツは〇〇の違いをこえての〇〇と具体例を出し合おう	⇒ スポーツという言葉が世界中に広まってきていて、解釈も変わってきている。
	振り返り スポーツには人々を結びつける役割がある	

⑧ 結果と考察

アンケート実施したりや学習者に話を聞いたりすると、「トリニータを家族で見に行ったことがある」や色々なメディアを通じて「自分が部活でしていないスポーツを観戦する」など、予想よりも身近にスポーツや国際大会を見る機会が多く親しんでいることがわかった。そのため本学習も学習者が身近で考えやすい話題が多く、理解がより深まったと感じる。本単元では、ただスポーツを見たりプレーしたりするだけではなく、①生活を豊かにするスポーツ②国際的スポーツ大会の役割③人々を結ぶスポーツを学ぶことで、より深くスポーツに接し、豊かなスポーツライフを送ることを目的とした。本時では人々を結ぶスポーツの項目でオリンピックやワールドカップの映像を見せ、スポーツにはどのような役割があるか考えさせた。出てきた答えはこちらのねらい通り「人種・信条・性別・宗教・民族・障がいの有無・年齢」を超えて人々を結びつける役割があるということに全員が到達した。本時では「問い」の工夫から「発問」を構造化することによって学習者自ら答えを出していき、めあてに向かう予定であった。しかし、「発問」に対しての「答え」があまり幅広いものではなく、よく言えばこちらがねらう「答え」に全員がたどりついた。課題としては、「発問」で「誘導」をしてしまった部分もあると感じられる。答えに導きたい「問い」と学習者の自由な発想から答えを生み出す「問い」を単元や授業のねらいによって使い分けることが必要と感じた。

まとめでは本単元で学んだことを生かし、次時の授業計画を立てさせた。男女共修でバレーボールチームを作り、全員がバレーボールを楽しむことができるようなルール作りと運営方法を考えさせた。柔軟なルールの対応では「ボールの種類、タッチ数を増やす、女子の得点は倍にする、勝負より交流に重きを置く」などの工夫が見られた。振り返りを聞くと「得点を競う競技スポーツと交流がメインのスポーツがありどちらも目的に応じて分けて考えることに気付いた。」との答えが出てきた。競技スポーツや生涯体育において、「みる・する・ささえる」観点を大切に、この単元を通して、今後豊かなスポーツライフを送るために役立ててほしい。

2019年9月に行われたラグビーワールドカップは大分県の会場でも催された。2020年に東京オリンピックも開かれ、自分がプレーをしたことがない、知らなかったスポーツを身近に感じたり観戦をしたりする機会が多くなる。今後ラグビーワールドカップや東京オリンピックを観戦するとき、今回の体育理論で学んだことを生かしてほしい。

単元「文化としてのスポーツの意義について理解できるようにする」

① 単元の目標は何か（資質・能力）

○文化としてのスポーツの意義について理解できるようにする。

ア. スポーツは文化的な生活を営み、よりよく生きていくために重要であること。

イ. オリンピックや国際的なスポーツ大会などは、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしていること。

ウ. スポーツは、民族や国、人種や性、障がいの違いなどを超えて人々を結びつけていることを理解し自分の生活や将来に結び付ける。

④問題意識を持たせるために、どのような導入を図るか（③を届けるために）

- ・身近にあるスポーツと、オリンピックなど国際的なスポーツ大会の映像を見て、「する・見る」の観点を踏まえて、スポーツの意義について考える。
- ・体育理論と実技の授業の課題学習をすることにより、自分の人生や生活にリンクさせる。

「問い」の工夫Ⅰ

- ・発問の構造化
- 「言葉の通じない国の中学生とどのように仲良くなるかを考えよう。」

⑥使える資料は何か。どこで使うか。

オリンピックやパラリンピックの映像

③どのようなめあて、課題にするか（各教科の見方・考え方が働くもの）

- ・スポーツの役割を考える
- ・国際的なスポーツ大会が果たす役割を考える
- ・スポーツの文化的な意義を知る

「問い」の工夫Ⅱ

- ・発問の構造化
- 「スポーツは○○の違いをこえて」を考えよう。
- 座学を実技に繋げることで、主体性を高めるとともに、実生活に活かす。

⑤どんな追及活動を行わせるか（言語活動含む）

- ・「スポーツは○○をこえて」という問いを考え、班で発表する。
- ・次の時間の球技で皆が楽しめるためのルールを考え実践することで実感を伴った活動をする。

②単元の最後に理解させたいこと、発言させたいことは何か（単元のゴール+振り返りの視点）

スポーツは○○（人種、国、民族、性別、障がいの有無、年齢、地域）の違いをこえて人々を結びつける役割があることを理解する。オリンピックなどの大きい視点だけでなく、自分の生活の中でも実践していくことを理解し、経験することで今後に活かしていく。

⑦まとめの表現活動をどうするか
ワークシート、発表

実践事例 2

- ① 単元 体づくり運動
- ② 対象学年 2年生
- ③ 単元設定の理由

〈単元について〉

体づくり運動は、体ほぐしの運動と体力を高める運動で構成され、自他の心と体に向き合って、体を動かす楽しさや心地よさを味わい、心と体をほぐしたり、体力を高めたりすることができる運動である。

また、体づくり運動に取り組むことで、体の調子を整えたり、心の状態も軽やかにしたりするなど日常生活における健康の保持増進につなげることができる。さらに、運動の組み合わせや計画を考えることで、生涯における健康の保持増進や体力の向上に向けた実践力を養うことができる。

〈学習者について〉

日頃から体育の授業や登下校以外に運動をしている学習者は72.5%で、17.5%の学習者は運動をする機会がない。

本学年は、前年度の「体づくり運動・体力を高める運動」の中で、特に「体の柔らかさを高める運動」と「巧みな動きを高める運動」を取り上げ、「効率よく体力を高める運動」を行うことを目標に授業を行っている。また、単元の中ではどのような運動が体の柔らかさや巧みな動きを高める運動につながるのか、更にどのように行うことによって効率よく高めることができるのかについての学習も行っている。

〈指導・「問い」の工夫について〉

本単元では、前半に主に体ほぐしの運動に取り組むことによって、簡単に組み組める運動や仲間と楽しくコミュニケーションをとれる運動を行い、運動に親しみやすくし、仲間と運動を通じた交流をすることで、対話しやすい雰囲気をつくっていききたい。

体力を高める運動では、体の柔らかさ、巧みな動き、力強い動き、動きを持続する能力を高めるための運動に取り組み、それらを組み合わせることにより、学習課題に応じた運動への取り組み方を学習できる場にしていきたい。それぞれの運動がどのような体力を高める運動につながるのか、またこの体力要素を高めるためには、どのような運動の取り組み方をすればよいのか、自ら考えるだけでなくグループで考える時間を設けることによって、主体的・対話的な授業にしていきたい。

本学級は日頃から運動をしない学習者も多く、また運動を好意的にとらえていない学習者もいることから、将来的に継続して運動を行うということが大きな課題となってくる。そのため、どのような運動を行うことで健康を維持していけるのかを教える中で、将来運動を継続していく下地をつくっていききたい。

④ 単元の目標

- (1) 次の運動を通して、体を動かす楽しさや心地よさを味わい、体力を高め、目的に適した運動を身に付け、組み合わせることができるようにする。(運動)
 - 体ほぐしの運動では、心と体の関係に気付き、体の調子を整え、仲間と交流するための手軽な運動や律動的な運動を行うこと。
 - 体力を高める運動では、ねらいに応じて、体の柔らかさ、巧みな動き、力強い動き、動きを持続する能力を高めるための運動を行うとともに、それらを組み合わせる運動の計画に取り組むこと。
- (2) 体づくり運動に積極的に取り組むとともに、分担した役割を果たそうとすることなどや、健康・安全に気を配ることができるようにする。(態度)
- (3) 体づくり運動の意義と行い方、運動の計画の立て方などを理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。(知識、思考・判断)

⑤ 単元の評価規準

	関心・意欲・態度	思考・判断	知識・理解
学習活動に即した評価規準	①分担した役割を果たそうとしている。 ②健康・安全に留意している。	①体ほぐしのねらいである「心と体の関係に気付く」、「体の調子を整える」、「仲間と交流する」ことを踏まえて、課題に応じた活動を選んでいる。 ②関節や筋肉の働きに合った合理的な運動の行い方を選んでいる。 ③ねらいに応じてバランスよく高める運動例の組み合わせ方を見付けている。 ④仲間と学習する場面で、学習した安全上の留意点を当てはめている。	①体づくり運動の意義について、理解したことを言ったり書き出したりしている。 ②運動の計画の立て方について、理解したことを言ったり書き出したりしている。

⑥ 単元の計画

単元指導計画と評価の計画（総時数6 / 7時間）

時	めあて・学習活動	評価計画	評価方法
めあて：自分や仲間の心や体の状態に気づき、目的に応じた運動を積極的に行う。			
1	※事前に活動するグループ分けを行う。 1 オリエンテーション ・学習の進め方 ・体づくり運動の意義 ・グループ編成 2 体力を高める運動で、2年生で学習する内容の確認	知・理①	学習カード
めあて：体づくり運動に積極的に取り組むとともに、ねらいに応じた運動を学ぶ。			
2	1 昨年学んだ運動についての復習	関・意・態②	観察
3		思・判④	学習カード
4	<「問い」の工夫Ⅰ> ・生涯における運動の大切さについて問う。 ・昨年学習した効率の良い体力の高め方のポイントについて復習させる。 1 体ほぐしの運動 2 体力を高める運動の実践 ① それぞれの目標に応じた運動の実践 ・力強い動きを高める運動 ・動きを持続する能力を高める運動	関・意・態①	観察
5	<「問い」の工夫Ⅱ> ・既習の効率の良い体力の高め方に対して、バランスの良い体力の高め方の必要性とポイントについて考えさせる。 1 体力を高める運動の組み合わせ 違うねらいの運動を組み合わせ実践 ・バランスの良い運動の組み合わせ	思・判②	学習カード・観察
6		思・判③	学習カード・観察
7		思・判① 知・理②	学習カード・観察

⑦ 本時案

(1) 本時の目標

ねらいに応じてバランスよく体力を高める運動プログラムを組み立てることができるようにする。

(2) 本時の学習評価

ねらいに応じてバランスよく高める運動例の組み合わせ方を見付けている。(思考・判断)

(3) 学習過程

時間	学習内容及び学習活動 ◆指導上の留意点	評価方法及び評価規準
導入 6分	1 集合、あいさつ、健康観察をする。(2分) 2 ストレッチをする。(3分) 3 本時のめあてと評価項目の確認をする。(1分)	
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> めあて：ねらいに応じてバランスよく体力を高める運動プログラムを立てることができる。 </div>	
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> 評価：ねらいに応じてバランスよく高める運動例の組み合わせ方を見付けている。(思考・判断) </div>	
	◆他者への助言ができることを高い目標に掲げる。	
展開 27分	4 グループごとに、前回選択した運動を確認する。 運動プログラムを組み立てる。(12分) 体の柔らかさを高める運動・巧みな動きを高める運動・力強い動きを高める運動・動きを持続する能力を高める運動からバランスよく選択	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">十分満足</div> <ul style="list-style-type: none"> 活動を組み合わせる場面で、ねらいに応じてバランスよく高める運動の組み合わせ方をし仲間にも助言している。
	<div style="border: 1px dashed black; padding: 2px;"> どのような運動の組み合わせ、順序にすれば、バランスの良い運動プログラムになるだろうか。 </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">おおむね満足</div> <ul style="list-style-type: none"> 活動を組み合わせる場面で、ねらいに応じて、バランスよく高める運動の組み合わせ方をしている。
	5 5分間運動を行う。(15分) <ul style="list-style-type: none"> ◆グループごとに場の設定を行わせる。 ◆班を2Gに分け、1Gに自分たちの立てた計画の運動を行わせる。もう1Gは時間を計るなど、支える立場を行わせる。運動終了後、交代。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">努力を要する学習者への配慮</div> <ul style="list-style-type: none"> 自分たちのグループの運動のねらいを達成するための、バランスの良い運動の行い方について確認させる。
終末 17分	6 班での振り返りを行い、発表する。(13分) <div style="border: 1px dashed black; padding: 2px;"> バランスの良い運動プログラムにするために工夫した点は何だろうか。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ◆バランスよく運動を行うために工夫した点をまとめさせる ◆自分たちの行った練習内容と、効率よく体力を高めるために工夫した点を発表させる。 	
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 振り返り ・ねらいや体力に応じて、バランスよく体力を高めるために工夫した点は何だろうか。 </div>	

○巧みさはラダー、バランスディスク、柔らかさは1人ストレッチ、持続する力は縄跳びで高めることができた。

うまくできなかった点

- 使う部位が偏っている。
- 動きの難易度をあまり考えることなく計画を立ててしまったため、もっとたくさんの視点から考えることが必要だと思った。
- 力強い動きを高める運動が少なかったと思うので、今回のメニューに腕立て伏せや腹筋などの筋トレを加えれば、バランスが良かったと思う。

今年度の2年生の授業では、「バランスの良い体力の高め方」について学習を行った。生涯において、健康を保持増進していく能力を身に付けるために、その中で4つの体力をバランス良く向上させる能力を高める運動の計画作成を目標とした。序盤では「生涯における運動の大切さ」について問う中で、人間が運動を行うことの重要性を考えさせ、昨年度学習した「効率の良い体力の高め方のポイントについて」復習を行った。

「ねらいや体力に応じて、バランスよく体力を高めるために工夫した点は何だろうか」という問いに対して、運動の目的とする体力要素の順番を入れ替えたり、ゆっくりした動きから速い動きにしたりと、学習した運動の行い方を答えた学習者が多かった。運動プログラム計画における知識、思考判断が身に付いている学習者が多いようである。

一方で、運動プログラムにおいて課題の残った学習者もいたが、うまくいかなかったことを課題としてとらえることができているという点では、一定の評価ができるのではないだろうか。

2年生では、学校で準備できる道具を使うことによって運動プログラムを立てたが、家庭で行うことのできる運動プログラムの作成という観点から、今後は家庭で準備できる道具を使った運動プログラム作成についての学習を深めていきたい。

2 保健体育科における成果と課題

体育理論や体づくり運動が学習者の生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現するために欠かせない学習である。なぜスポーツが存在し、スポーツをしたり体を動かしたりする必要があるのか、適切で合理的な体力の高め方はどうしたらよいのか。人生の中でどのようにスポーツや運動と向き合い、付き合っていくのかなど、正しい知識と見方・考え方をもって臨む場合と、そうでない場合で大きく効果も変わってくる。新学習指導要領の意向に伴い運動・スポーツが知識を伴った技能の向上や、自己やチームの課題を理解し改善していく問題解決能力を養うことが目的となってくる。そのためには学習者がどの単元でも課題を正しくとらえ、解決していくための具体的方法を身につけなければならない。しかし、学習者の体力や生活習慣にも個人差があり問題解決が困難な状況も考えられる。その中で解決に向かうための手助けとしての「問い」の工夫をとらえた。「問い」を考えることと自己の課題や解決方法を考えることがイコールになるようにしていった。実践1では「発問」が「答え」を狭めてしまった部分はあるが授業者が目指す振り返りに近づけた。

どちらの実践もこの単元の学びが学習者の今後に生かされるかどうか「深い学び」が達成されるかどうかにかかわってくる。実践1では体育理論としての時間を1時間多く設定し、バレーボール大会の運営で学んだことを生かし、今後につなげようとした。スポーツ大会には目的や役割があることを知識として知り、実践をすることでその後のラグビーワールドカップでの「見方・考え方」に大きく寄与した。スポーツ大会が人々を結ぶ役割があることを実感することで、今後行われる東京オリンピックの見方にも変化があると思われる。

実践2では自分の生活や体力を知ることから始め、意図的に健康の保持増進をしていくことの大切さを知り、自分にあった運動計画を立てることで自分の生活での健康に対する「見方・考え方」を意識することができた。東京オリンピックやランニングブームなど身近にスポーツや運動に接する機会が多くなっていく。中学保健体育の授業で得たものをそれぞれの生活に生かせるようにしていきたい。

1 取組の実際

実践事例 1

① 単元 ラグビーワールドカップで来県する国についての紹介原稿を作成しよう。

LESSON5 Places to Go, Things to Do (NEW CROWN ENGLISH SERIES 3)

② 対象学年 3年生

③ 単元設定の理由

〈単元について〉

本単元では、関係代名詞 **that which who** (主格・目的格) を用いて、中学生が行ってみたい場所や好きなことについてそれぞれ発表することを通して学習する。この単元において付けたい力は学習指導要領「書くこと一エ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて書くことができるようにすること」である。そのうち、ケンのスピーチでは、ブラジルに行きたい理由を国の特徴を交えて、5段落で構成したまとまりのある文章が紹介されており、また、教科書教材はモンゴル・アメリカ(ハリウッド)・ケニア・ブラジルといった国が取り上げられ、写真を添えながら、それぞれの国の魅力について語られている。自分の行きたい国について論理的に話をする方法を学ぶことができるよう構成されている。また、関係代名詞を用いることで、文の中により詳しい内容を加えることができることを学習する。そこで、本単元ではラグビーワールドカップで来県する国について紹介する原稿を作成する活動を通して、文と文とのつながりや順序、構成を工夫してまとまりのある文を書く力を身につけさせたい。

〈学習者について〉

学習者は、1年次より表現活動を中心とした英語学習に取り組んできた。班やペアで活動することに対して積極的な姿を見せ、また英文を書くことに対しても間違いを恐れず取り組むことができた。2年次には、オーストラリアについて学習したのち、集めた情報をもとにエッセイを書いたが、分量や内容も個人差が出てきており、正確性に欠けることが増えてきた。英語の習熟度に差が開いており、語順や語彙など基礎的な文法理解でつまづいている学習者もいる。

〈指導・「問い」の工夫について〉

本単元は大分で10月に行われるラグビーワールドカップで来日する外国人に配付するプロシユアの作成を言語活動として設定した。大分県で試合をする6か国についてのプロシユアを作成することで、教科書教材で学んだ文章構成や文法事項を活用する場を設ける。さらに旅行会社に評価してもらい、優秀作品を店頭に置かせてもらうこと(「問い」の工夫Ⅰ)で、より洗練された英文を書こうとする意欲を持たせたい。各国を班で分担して情報を集め、個人で原稿を書き、それをもとに班員全員で検討させる。その際、文章構成や文法の正確性に留意させる。また、教科書の **Get** や **Read** 内の表現を振り返らせ、紹介原稿を改善する方法を考えさせる。「書くこと」に課題のある学習者には、活動中の気付きや疑問を振り返る機会を与えたり、ヒントカードを使わせたりすることで、自信を持って取り組めるようにする。班内で文の構成や文法などの確認の役割を分担し、対話を通して教え合いや学び合いを行うこと(「問い」の工夫Ⅱ)を通して、文章構成と文法が整った文章を書く力の向上へとつなげていきたい。

また、学習者の主体的な取組を促すために、教科書の題材と関連する帯活動の **Warming Up** から授業を展開していく。

④ 単元の目標

- (1) 文と文とのつながりや、順序・構成を工夫してまとまりのある説明文を書くことができる。
【外国語表現の能力】
- (2) 文章構成やつながりを意識した文を積極的に用いて原稿を作成しようとしている。
【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】
- (3) 関係代名詞に関する知識を身に付けている。
【言語や文化についての知識・理解】

⑤ 単元の評価規準

ア	イ	ウ	エ
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
文章構成やつながりを意識した文を積極的に用いて原稿を作成しようとしている。	発表する国の情報や、話題に関して聞いたり読んだりしたことについて整理し、順序・構成を工夫してまとまりのある文を書くことができる。		関係代名詞 that which who の主格と目的格の用法について理解している。

⑥ 単元指導計画（総時数 11/13 時間）

時間	学習活動	単元の評価規準	評価方法
1 2	<ul style="list-style-type: none"> 行きたい場所とそこでしたいことの説明文を読み、モンゴルの紹介プロシユアを作成する。 文章構成やつながりを意識した文章を書く練習をする。 関係代名詞 that（主格）を理解する。 	エ	後日ペーパーテスト ワークシート
3 4	<ul style="list-style-type: none"> 行きたい場所とそこでしたいことの説明文を読み、ハリウッドの紹介プロシユアを作成する。 文章構成やつながりを意識した文章を書く練習をする。 関係代名詞 who, which（主格）を理解する。 	エ	後日ペーパーテスト ワークシート
5 6	<ul style="list-style-type: none"> 行きたい場所とそこでしたいことの説明文を読み、ケニアの紹介プロシユアを作成する。 文章構成やつながりを意識した文章を書く練習をする。 関係代名詞 that, which（目的格）を理解する。 	エ	後日ペーパーテスト ワークシート
7 8	<ul style="list-style-type: none"> 行きたい場所とそこでしたいことの説明文を読み、ブラジルの紹介プロシユアを作成する。 スピーチの構成について理解し、概要を説明する。 文章構成やつながりを意識した文章を書く練習をする。 	エ	後日ペーパーテスト ワークシート
9	前時までの表現活動を発展させ、ラグビーワールドカップ大分開催で来県する国についての紹介原稿作成の準備をする。		ワークシート
10	<ul style="list-style-type: none"> 準備した内容をもとに、班員で内容を分担し紹介原稿を作成する。 これまでの学習を振り返り、原稿を見直す視点を考える。 	ア	ワークシート
11 (本時)	作成した紹介原稿を班員で見せ合い、意見交流をし、原稿を改善することができる。(本時)	イ ア	ワークシート (原稿下書き)
12	紹介原稿を読み合い、紹介プロシユアを完成させる。	イ	プロシユア
13	完成したプロシユアを皆で見せ合う。		ワークシート

※プロシユア (brochure) パンフレット (pamphlet: 英より普通で旅行案内などの営業用を指す), (ジーニアス英和辞典より引用)

※共通教材 LESSON5 Places to Go, Things to Do (NEW CROWN ENGLISH SERIES 3)

⑦ 本時案

- (1) 題材 各文の構成や文同士のつながりやまとまりを意識して、紹介原稿を改善することができる。
- (2) ねらい 紹介したい国について、文と文とのつながりや順序・構成を工夫する点を互いに見せ合うことを通して、まとまりのある説明文を書くことができる。
- (3) 本時における「問い」の工夫
自分たちの紹介原稿をより良いものにするためには、何を視点に互いの英文を見直すべきかを考えさせ、文同士のつながりや順序、各文の構成に目を向けさせることで、よりまとまりのある説明文を書くことができるようにさせる。
- (4) 展開

学習活動	時	指導上の留意点	期待される学習者の反応	備考・評価
1 あいさつ 2 Warming Up	1 10	○大きな声であいさつをさせる。 ○前時までの振り返りを行う。	○前向きな姿勢で活動に取り組むことができる。	パワーポイント 紹介原稿 辞書
めあて 文の構成やつながりを意識して、紹介原稿を改善し、完成させよう。				
3 スピーチ原稿を班員で見せ合う 1回目 視点なし モデルを提示する 2回目 視点あり	20	○作成した紹介原稿を班で見合わせる。 (「問い」の工夫Ⅱ) まとまりのある英文になるように、これまで学んできた構成や順序を視点として、学習者同士で意見を出し合い、英文を再構成させる。 ○他の学習者が作った文章を見直す前、後で変化したものを見せる。 ○必ず色ペンを用いて訂正や修正をさせ、学習の軌跡を残すように確認させる。 ○「書くこと」に課題を持つ学習者に配慮し班活動に取り組みせ、役割分担をし、全員で意見を交流することを確認させる。	○紹介原稿を見直す。 (文章構成での原則) ・文と文のつながり (代名詞や関係代名詞を適切に使えたか) ・構成(つなぎ言葉) ・語順・語句に誤りはな いか、これまで学んだことを再度確認し、英文を見直すことができる。 ※必要であればヒントカードを用いる。 ○互いにアドバイスしたのち原稿を完成させることで、まとまりのある説明文を書くことができる。	パワーポイント チェックシート ヒントカード 振り返りシート
4 紹介原稿を完成する	14	○班で交流をし、話し合った内容のもとに個人で原稿を完成させる。 ○ペアで教え合う。		
5 振り返り	5	○最初の原稿と班員で交流した後の原稿を比較し、改善できた点や学んだ点について振り返りをさせる。		
<p>振り返り 班員との交流の中で自分の紹介原稿がどのように改善したか振り返る (予想される振り返り) ①文と文のつながりを意識し、代名詞や関係代名詞を<u>適切</u>に使えたか。 ②順序を意識しているか。 ③構成に工夫があるか。 ④正確に書くことができたか。 の点を意識し紹介原稿を書くことができた。</p>				

(5) 板書計画

めあて 文の構成やつながりを意識して、紹介原稿を改善し、完成させよう。

何を視点に英文を見直していくと良いだろうか？

- ・文と文のつながり（名詞の後に説明文がくるとより分かりやすい文が書ける）
- ・関係代名詞 ・文の順序（初め→具体例→終わり） ・構成（First, Second など）

振り返り 班員とのチェックを行った後、自分の紹介原稿がどのように改善されたかを振り返ろう

(予想される振り返り) ①文と文のつながり、代名詞や関係代名詞を意識してチェックができたかや、名詞の後に説明文がくるとより詳しい文が書けることが理解できたか。
②順序を意識しているか。
③構成に工夫があるか。
④正確に書くことができたか。
の点を意識し紹介原稿を書くことができた。

Today's Menu

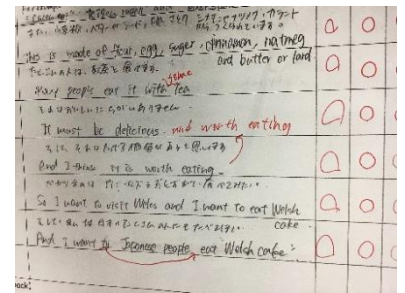
- Greeting
- Warming Up
- Check your brochure with your group members
- Rewrite your brochure with your partner
- Feedback

⑧ 結果と考察

【「問い」の工夫について】自分が作成した英文を学級の仲間同士で確認し合うことは、確認すべき項目を明確にしなければ視点が曖昧になり文法項目の間違い探しになりがちであるが、視点を明確にすることでより相互チェックがしやすくなることが分かった。資料①のチェックシートでは文法の確認はもちろんのこと、文章構成やつなぎ言葉を班のメンバーで役割分担し、話し合いをしながら相互チェックをすることができていた。しかし文法項目などにこだわりすぎた内容にはあまり相互チェックができなかった。

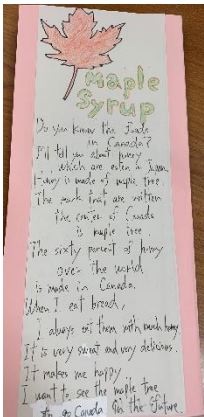
英文を再構成するまでに至らなかった原因は、自分が書いた英文が正しいかどうか不安であることや、チェックをし合う班員も確信を持って正解かどうか判断することができなかったことであると考えられる。英文を作成するまでに、教科書のGETの内容を用いて内容を書くトレーニングを行ったが、それを効果的に用いることができたかどうかを学習者が自己確認できるような評価につなげることが大切だと分かった。

「問い」の工夫Ⅱにより視点をより焦点化することは学習者の前後の活動の変化より達成できたと言える。振り返りの結果からは、「文と文のつながりや順序の意識は強くなることができた」と回答した学習者が全体の90%以上を占めたことが分かった。この点については文の構成やつながりを意識させるという目標を達成することができたと考えられる。しかしながら、正確性においてはまだ今後も学習者が自信を持って英作文を行うことができるように工夫をしていく必要があると感じた。しかし今回の活動のポイントは、文の構成やつながりについてを確認し、より良いプロシユアの原稿を完成させることであるので、文法項目や語順といった視点は今後取り組む際の参考にしていきたい。



(資料①)

資料②は、紹介原稿を相互チェックした後個人で完成させた作品である。この作品を班で一つのプロシユアとし、大分県に来県する海外の方へのプレゼントとすることにした。



(資料②)



(資料③)

実際に読んでいただくという「必然性」を持たせることで、学習者は意欲を持ってプロシユアを作成することができた。完成したプロシユアは、大分駅前で開催された特設イベントに参加し、英語を使って紹介した。試合前であったため、多くの外国人旅行者が立ち止まり学習者の発表に耳を傾けてくれた。資料③のように作成したものを実際来日した外国人観光客の方々に読んでもらうことで、より英語学習に対する意欲が高まったと感じたようである。参加した学習者だけでなく実際に配布したことを学習者全員に還流すると、作成したことによる達成感を大いに感じたようであった。

この取り組みを通じて、授業の中で「問い」の工夫を行うことは、学習者がより意欲的に取り組み、学習目標を達成するために、自分たちの考えを深めるきっかけの一つとなることが分かった。今回行った書く活動を更に発展させていくために「問い」について学習者の発達段階に応じて、工夫を凝らしていきたいと感じた。

単元構想メモ

「ラグビーワールドカップで来県するチームについての紹介原稿を作成しよう」

①単元の目標は何か（資質・能力）

班活動やペア活動を積極的に取り入れ意見交換を行い、紹介したい国について、文と文とのつながりや順序、構成を工夫したり改善したりすることを通して、まとまりのある説明文を書くことができる。

学習指導要領書くこと一エ 社会的な話題に関して聞いたりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて書くことができるようにする。

④問題意識を持たせるために、どのような導入を図るか（③を届けるために）

共通教材「Places to go, Things to do」の内容から、様々な国についての紹介や良さ、その土地にあった出来事など、関係代名詞を使った文を用いて紹介する活動を行う。関係代名詞を用いることで一文の中により多くの情報を付け加えることができることを理解させる。また長文を読み、段落構成やつなぎ言葉などの文章を書く時の方法を学び、論理的に文章を書くためにはどのように書くべきかを考えさせる。

③どのようなめあて、課題にするか。 （各教科の見方・考え方が働くもの）

文の構成やつながりを意識して、紹介原稿を見直し、改善することができる。

「問い」の工夫Ⅰ

多くの人に互いの情報が詳しく伝わるように、文章構成やつながりを意識したワールドカップで大分に来県する国の紹介プロシユアを作成させる。

⑥使える資料は何か。どこで使うか。

共通教材

「Places to go, Things to do.」（教科書）

- ・図書館の本
- ・インターネット上の情報
- ・旅行会社のパンフレット

⑤どんな追及活動を行わせるか（言語活動含む）

ラグビーワールドカップ大分ですでに来県が決定している6か国について班でそれぞれ情報を集めさせる。その際 Get や Read での表現活動を活かし、代名詞や関係代名詞、文と文のつながりや語順、文章構成にこだわり、作成していくことが大切であるということに気付かせ、紹介原稿を作成させる。そして個人で作成した原稿をペア、班で互いに見合う。

「問い」の工夫Ⅱ

まとまりのある英文になるように、これまで学んできた構成や順序を視点として、学習者同士で意見を出し合い、英文を再構成させる。

②単元の最後に理解させたいこと、発言させたいことは何か （単元のゴール+振り返りの視点）

学習者が出した考えをもとに作成したチェックリストを用いて、文法や英文について互いにアドバイスしたのち原稿を完成させ、まとまりのある説明文を書くためには文章の構成やつながりを意識することが大切であることを理解させたい。

【予想される振り返り】①文と文のつながり、代名詞や関係代名詞を意識してチェックができたかや、名詞の後に説明文が来るとより詳しい文が書けることが理解できたか、②語順を意識しているか、③文章構成に工夫があるか、

④正確に書くことができたか、の点を意識し紹介原稿を書くことができた。

⑦まとめの表現活動をどうするか

- ・第三者（旅行会社の方）に見てもらい、内容の正確性や情報量などで高く評価されたものを掲示していただく。

実践事例 2

① 単元 ピーターラビットの物語を紙芝居にして、披露しよう！

(Lesson2 Peter Rabbit : NEW CROWN)

② 対象学年 2年生

③ 単元設定の理由

〈単元について〉

本単元では、イギリスの児童文学であるピーターラビットに関する話を通して、be 動詞の過去形 (was/were) や過去進行形、接続詞の when を学ぶ。過去進行形を学ぶことで、過去の事実だけでなく、過去のある時点における進行中の動作を伝えることができるようになる。更に、新出事項の接続詞を学ぶことで、文と文をつなげてより詳しい場面説明ができるようになる。実際にピーターラビットの物語を読むことで、これらの文法を用いて、各場面の様子が生き生きと描かれていることに気付くことができる。

〈学習者について〉

本学級の学習者は、昨年度不思議の国のアリスを暗唱し、各クラスで発表会を行った。また、留学生が来校した際、日本の伝統行事について英語でプレゼンテーションを行っている。それらの活動を通し、2点の課題が見つかった。1点目は、声の大きさやジェスチャーの量といったプレゼンテーションを行う際の課題である。2点目は、発音、イントネーション、強勢、区切りといった英語の音声面に関する課題である。特に2点目の英語の音声面については、正しい発音でないために ALT や留学生に内容が伝わらなかったり、強勢や区切りがないために相手が内容を理解しづらくなってしまったりしていた。また、アンケートによると、読んだり書いたりする活動を得意とする学習者は多い一方で、話す活動に苦手意識をもっている学習者が最も多い。しかし、ペア活動やグループ活動には積極的に参加できると 90% の学習者が答え、98% の学習者がペア活動やグループ活動が英語学習に有効だと感じている。

〈指導・「問い」の工夫について〉

これらのことから、ピーターラビットの物語をグループで紙芝居にし、発表会を行うことを目的として、聞き手を意識した話す活動を行わせる。発表会で1年生に紙芝居を披露するという目的を通して、活動に対する意識を高めさせる。学習者が、英語特有の発音、強勢、区切りを意識し ALT に伝わる英語を話せるように意識させる。更に、英文中でどの単語を強く読むかを図で示すイントネーション表を作成させ、音読練習をさせる。また、まだ中学校で英語学習を始めて間もない1年生でも理解できるような話し方の工夫も考えさせる。まず、ピーターラビットの物語を読んだ後、昨年度のプレゼンテーションで ALT から指摘された課題を音読チェック表にまとめ、提示する。チェック表の各項目がクリアできるように音読できているか、ペアで評価・アドバイスをさせ合い、クリアできるまで何回も音読させることで、話すことに自信を持たせる。その後、グループでピーターラビットの物語を4場面に分け、紙芝居の絵コンテやセリフづくりに取り組ませる。1年生が理解しやすいように、内容を言い換え、1文を短くするなどの工夫をグループで考えさせ物語を要約させる。セリフの内容を分かりやすく伝えるために、読み聞かせる際にはどこで区切ればいいのか、強勢や発音などについてグループで確認させる。また、実際に英語での紙芝居の様子を動画で見せ、英語の音声以外でどんな工夫がされているかを考えさせる。その後一度 ALT に読み聞かせ、アドバイスをもらったり、英語の音声に関して質問したりできる時間を設ける。更に、自分たちの発表を iPad で撮影したものを見て、改善点を考えさせたり、グループ同士で紙芝居を披露し合ったりする時間をとり、英語の音声面にとどまらず、プレゼンテーションの仕方の観点からもアドバイスをさせ合うようにする。よりよい発表ができるように、何度も音読をし、ALT や仲間からアドバイスをもらい改善を重ねていくことを通して、英語でのプレゼンテーション能力の基礎を培わせる。

④ 単元の目標

(1) 紙芝居を用いて、聞き手を意識した発表をしようとしている。

【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】

(2) 聞き手を意識して、ピーターラビットの物語を伝えることができる。

【表現の能力】

(3) 既習の表現を使い、1年生が理解しやすいように、ピーターラビットの物語を要約することができる。

【外国語理解の能力】

⑤ 単元の評価規準

(ア) コミュニケーションへの関心・意欲・態度	(イ) 外国語表現の能力	(ウ) 外国語理解の能力	(エ) 言語や文化についての知識・理解
他者からのアドバイスを生かし、聞き手を意識した紙芝居をしようとしている。	英語の音声的特徴(発音, 強勢, イントネーション, 区切り)を捉え、プレゼンテーションの工夫を取り入れて、聞き手を意識した紙芝居の発表ができています。	ピーターラビットの物語を読み、既習の表現を使って、1年生に分かりやすく伝える要約文を書くことができる。	

⑥ 単元指導計画 (総時数 10/12 時間)

時間	学習活動	単元の評価規準	評価方法
1	be 動詞の過去形 (was/were) の使い方を理解し、昨年のクラスの様子について伝え合う。		
2	Get1 教科書本文の内容を理解し、本文を暗唱し、暗写する。		
3	過去進行形と接続詞の when の使い方を理解し、接続詞 when を用いてクイズを作成する。		
4	Get2 教科書本文の内容を理解し、本文を暗唱し、暗写する。		
5	ピーターラビットの物語を読み、英語の音声的特徴や読む速度、声の大きさを意識して音読し、ペアでアドバイスし合う。		
6	ピーターラビットの物語を4場面に分け、紙芝居の絵コンテを作成する。		
7	紙芝居の各場面の内容が聞き手に伝わるように、グループで要約し、セリフを仕上げる。	ウ	ワークシート
8	紙芝居のセリフで、英語の音声的特徴(発音, イントネーション, 強勢, 区切り)や、プレゼンテーションの際に工夫できる点について ALT や先生からアドバイスをもらいながらグループで考えさせる。		
9	英語の音声的特徴(発音, イントネーション, 強勢, 区切り)を意識しながらグループで練習を行い、ALT の先生の前で事前発表を行う。		
10 本時	グループ同士で紙芝居を見せ合い、英語の音声的特徴(発音, イントネーション, 強勢, 区切り)や、プレゼンテーションの工夫についてアドバイスし合い、よりよい紙芝居にする。	ア	練習風景 ワークシート
11	前時までの改善点を取り入れ、発表会に向けて紙芝居を仕上げる。		
12	紙芝居を ALT やクラスの皆の前で、グループで披露する。	イ	発表

⑦ 本時案

- (1) 題材 ピーターラビットの物語を紙芝居にして、披露しよう
- (2) ねらい ピーターラビットの紙芝居を読み聞かせる活動において、互いに紙芝居の読み聞かせを見せ合い、仲間からのアドバイスをもらったり仲間の良いところを見つけたりすることを通して、聞き手がより惹きつけられる紙芝居をしようとしている。
- (3) 展開

学習活動	指導上の留意点	時間	評価・備考
1 あいさつ	○大きな声で挨拶をさせる。	1	
2 英語の音声面についてアドバイスし合う	○各場面の要約シートを聞き手に渡し、セリフを確認しながら聞かせる。 ○音声面でのアドバイスをさせ合う。 ○ペアの相手に読み聞かす。(3 ペア行わせる。)	6	要約シート ワークシート
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">めあて</div> 仲間にアドバイスしたり、仲間の良いところを見つけたりすることを通して、聞き手がより惹きつけられる工夫を考え、練習してみよう。			
3 グループで紙芝居を練習する	○グループで、前時までに考えた留意すべき点を意識して紙芝居を練習する。	1	紙芝居
4 前半のグループ(1～5 班)が、後半のグループ(6～10 班)に紙芝居を読み聞かせ、アドバイスをもらう	○前半のグループが後半のグループにローテーションで紙芝居の発表をする。 ○聞き手は、自分と同じ場面を担当する学習者の要約シートを確認しながら聞く。 ○後半のグループは発表を聞いた後、最低 1 人 1 アドバイスをする。	6	紙芝居 要約シート
5 後半のグループ(6～10 班)が、前半のグループ(1～5 班)に紙芝居を読み聞かせ、アドバイスをもらう	○後半のグループが前半のグループにローテーションで紙芝居の発表をする。 ○聞き手は、自分と同じ場面を担当する学習者の要約シートを確認しながら聞く。 ○前半のグループは発表を聞いた後、最低 1 人 1 アドバイスをする。	6	紙芝居 要約シート
6 仲間からもらったアドバイスや、他のグループの良かった点を整理する	○まずは個人で、 ① 英語の音声面でのアドバイス ② プレゼンテーションに関するアドバイス ③ 仲間の良かった点について整理する。 ○クラスでどんな改善点が挙げたかを共有する。 ○①～③の改善点について、具体的にどう自分たちのグループに取り入れるかを個人で考える。その際自分の場面で取り入れられる改善点については、要約シートに書きこむ。 ○グループで改善点を確認し合う。	15	ワークシート 要約シート
7 改善点を取り入れて練習する(振り返り)	○まずは、改善点を書き込んだ要約シートを見ながら練習する。 ○要約シートを見ずに、本番と同じようにプレゼンテーションする。	15	紙芝居 要約シート

⑧ 結果と考察

本時の流れに沿って、具体的な指導内容とその結果を考察していく。

(1) 英語の音声面についてアドバイスし合う活動

本単元では、1年生にピーターラビットの紙芝居を披露することをタスクとして設定した。聞き手を意識した発表をするために、2つの点に注目させた。1点目は、英語の音声面である。英語の音声面とは、正確な発音で、強弱を再現できることを指す。特に、1年次から強弱が再現できていないことが課題として挙げられていた。そのため、オリジナル教材として波波シートを作成した。波波シートとは、学習者自身が最も伝えたい情報や、英文の核となる主語や動詞には高い線を引き、それ以外の単語には低い線を引くことで、強弱が一目で分かるシートである。高い線が引かれている部分は強く、低い線が引かれているところは弱く読む練習を行った。更に、ALTに一人一人音声面をチェックしてもらい、アドバイスをもらう機会を設けた。聞き手を意識した発表にするために注目させた2つ目の点は、プレゼンテーションの工夫である。表情や、ジェスチャー、視覚物を使用するなど、聞き手を飽きさせない工夫を考えさせた。前時までに、iPadを活用し、実際に自分たちの発表を客観的に見ることで、英語の音声面やプレゼンテーションの工夫について再考を重ねてきた。ここでは、前時までに取り組んできた英語の音声面のみに着目し、自分のペアの波波シートを見ながら、発音、強弱が実際に表現できているか互いにアドバイスさせた。波波シートを活用することで、英語の音声の強弱が目に見えて分かる形となり、練習にも取り組みやすく、アドバイスもしやすいものになったと考えられる。

(2) グループごとに互いに紙芝居を読み聞かせ、アドバイスをもらう活動

前時までに各班取り組んできた①英語の音声面②プレゼンテーションの工夫を意識し、他の班に実際に読み聞かせをさせた。アドバイスさせる際、①英語の音声面②プレゼンテーションの工夫③他の班の良かった点に注目させた。事前に、指導者が「よりよい発表するために改善点を伝えよう」と声をかけたことで、学習者たちが各班の良い点だけではなく、アドバイスをし合う姿が見られた。その際、学習者たちは「rの音がまだできていない」「parsleyの発音が違う」など今までの授業で練習してきた発音について指摘することができていた。

(3) 改善点を取り入れて練習する活動

各班からももらったアドバイスを取り入れ再び練習をさせた。どの班も、もらったアドバイスだけでなく、他の班の良かった点を生かそうとする姿が見られた。1点目の英語の音声面においては、より正確な発音で、特に課題となるr, th, lなどの発音を意識していた。2点目のプレゼンテーションの工夫については、立ち位置や紙芝居の出し方をより改善し、聞き手を楽しませようと工夫していた。

(4) 全体を通じた考察

本単元で、iPadや波波シート、ALTからの音声チェック、更に互いの発表を見せ合うことで、客観的に学習者たちが自分たちの発表を振り返る機会を設けることができた。その際に、英語の音声面とプレゼンテーションの工夫を意識させることで、今後外国語科で必要となる、「聞き手を意識した話し方」につなげることができたと考えられる。英語の音声面については、聞き手が聞きやすい正確な英語で自信を持って話せるように、またプレゼンテーションの工夫については、外国語科のみならず、今後各教科で必要となる「表現力」を身に付けさせることにつながった。また、本単元だけでなく、1年を通して英語の音声面やプレゼンテーションの工夫について継続的に指導を行ってきた。その結果、本単元は2019年5月に行い、現在2020年1月となるが、学習者たちは1年次と比較し、①英語の音声面②プレゼンテーションの工夫の双方について意識し、改善できていると感じられる。普段の授業でも、以前よりも正確な英語の発音で臆することなく話すことができる学習者が増えた。発表の際には、自ら楽しんで視覚教材やジェスチャーなどの工夫を取り入れるようになった。ALTからも、1年次と比べ英語の音声面において、強弱がつくようになり、r, th, lの発音を正確にできるようになったと評価を頂いた。今後の課題として、1年次のGTEC for STUDENTSのスコアから、リスニング力の向上が挙げられる。リスニング力向上のために、まず自らが正確な英語の発音ができるようになることが挙げられる。英語の音声面に着目しつつ、ディクテーション活動を継続的に行っていくことが必要である。

実践事例3

① **単元** 自分のお気に入りの写真や絵を、メールで説明する
(Lesson 8 School Life in the USA, *New Crown English Series 1*)

② **対象学年** 1年生

③ **単元設定の理由**

〈単元について〉

本単元では、アメリカの中学校生活について学習する。また、アメリカの授業や課外活動について、写真付きの説明文やメール、対話文を読む中で、現在進行形の用法を学ぶ。習慣的、恒常的な事実を述べる現在形だけでなく、現在のことを眼前にあるように述べる現在進行形を学習することで、生き生きとした描写を行うことができる。現在進行形のこの機能を活用させることにより、単元を通して、冬休みのレポート課題として学習者が準備した写真や絵を、メールで魅力的に外国人や友だちに説明することができる力をつけていきたい。

〈学習者について〉

本学級の学習者は、これまで2～3レッスン毎に行われるパフォーマンステストに向けて、様々な表現活動に取り組んできた。1年終了時の目標に即興性を掲げているため、「聞くこと」「話すこと」の技能統合型の活動に力を入れ、特にディクテーションやディクトグロス、レポートイング、質問作成活動、Q&Aに取り組んできた。その結果、英語での意見交流を活発に行うことができる。しかし一方で、アンケートの結果から「書くこと」に抵抗を感じる学習者が多い。定期テスト等での、自由度の高い英作文が苦手なようである。その理由として多かったのが、①「何を書けばいいかわからない」、②「思っていることが英語にできない」、③「スペリングが不安」ということであり、学習者の多くは、まとまりのある英文を正確に書くことに難しさを感じている。

〈指導・「問い」の工夫について〉

指導においては、単元の最後にALTに向けて写真の紹介メールを送信するという目標（パフォーマンステスト）に向けて、1時間毎にその目標に迫ることができるよう、単元を貫いた指導を行う。授業の導入では英語で書かれたメールの紹介を行い、帯活動ではピクチャーディスクリビングに取り組ませる。学習者が得意な、話す・聞く活動でモチベーションを維持しながら、書く活動にも積極的に取り組ませる。この時、話す・聞く活動が書く活動（リライトを含む）につながったと学習者に実感させたい。そのための工夫として、QAチャートというオリジナルの思考ツールを活用する。これによりブレインストーミングのような効果も期待できるため、上記の課題①の解決にもつながると考える。また、各活動の最後に「言いたかったけれど英語で言えなかったこと」を共有することで、課題②の克服を図る。課題③については、小テストの実施と家庭学習のアドバイスで改善をねらう。さらに、教師によるフィードバックを効果的にを行い、英語表現の正確性への意識やメタ認知力の高い自律的学習者へと育てていきたい。

〈「問い」の工夫Ⅰ（めあて・課題を学習者に届けるための手立て・プロセス）〉

パフォーマンステストを単元のゴールに設定している。単元の最後にパフォーマンステストを行うことを早期に伝えることで、学習者たちは必要な技能・スキルを意識して主体的に学習に取り組むことができる。

〈「問い」の工夫Ⅱ（深い学びに迫るための手立て・プロセス）〉

QAチャートというオリジナルの思考ツールを活用し、原稿を自ら改善する力へとつなげる。また、「誰に対して書くのか」という発問を出すタイミングを工夫することで、相手意識を再確認させる。これらによって学習者のメタ認知力を高め、自律的学習者へと育てたい。

④ **単元の目標**

- | |
|--|
| (1) 写真や絵を、読み手にとってわかりやすい構成と現在進行形を含む適切な表現を用いて、メールで説明することができる。 【外国語表現の能力】 |
| (2) 相手に伝わりやすいように構成や表現等を工夫して書こうとしている。 【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】 |
| (3) 現在進行形の形、意味、働き（機能）を理解している。 【言語や文化についての知識・理解】 |

⑤ 単元の評価規準

ア	イ	ウ	エ
コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての 知識・理解
自分の言いたいことが相手に伝わるように、構成や表現等を工夫して書こうとしている。	写真や絵を、読み手にとってわかりやすい構成（抽象→具体→自分の思い）と現在進行形を含む適切な表現を用いて、メールで説明することができる。		現在形と現在進行形の形、意味、働き（機能）に関する知識を身につけている。

⑥ 単元指導計画（総時間 8/10 時間）

時数	各時の目標と学習活動		評価規準
1	目標	小学校の時のALTの先生に、附属中学校での授業について伝えるメールを作成することを通して、単元の目標を理解する	
	学習内容	動詞の現在形を活用して中学校の授業について表現させる活動を通して、本単元の学習内容とゴールを意識させる	
2	目標	アメリカの学校の授業（language arts）と現在進行形について理解する	エ
	学習内容	現在進行形の表現を学び、練習する（本文Get1）	
3	目標	絵の内容を説明できる	エ
	学習内容	教科書の本文を参考に、人物が描かれたイラスト（英検3級の面接試験用）を英語で説明する	
4	目標	PaulとKumiの対話からPaulのいところについて理解する活動を通して、現在進行形の疑問文と否定文を理解する	エ
	学習内容	現在進行形の疑問文と否定文の構造を理解し、練習する（本文Get2）	
5	目標	絵の内容について、Q&Aを行うことができる	エ
	学習内容	教科書の本文を参考に、人物が描かれたイラストについて、英語でQ&Aを行う	
6	目標	対話を聞いてわかったことを、友だちに英語で伝えることができる（レポートインク活動）	エ
	学習内容	教科書の本文や絵についての対話文（ダイアログ）をモノログに書きかえる	
7	目標	自分のお気に入りの写真や絵（人物が含まれているもの）を、英語で説明するための原稿を作成する	ア
	学習内容	「抽象→具体→自分の思い」という流れで、自分のお気に入りの写真や絵を説明する原稿を作成する	
8 (本時)	目標	写真や絵の説明を行い、それについてのやり取りとフィードバックを通して、自分の説明内容と英語表現について再考し、改善する	ア
	学習内容	写真や絵を説明し、その後QAチャートを用いてやり取りを行い、内容を改善する	
9	目標	リサのメールの内容と英語のメールの書き方を理解する	
	学習内容	リサのメールの内容を読解し、文章構成とメールの書き方を学ぶ(USE Read)	
10	目標	自分のお気に入りの写真や絵をメールでMathieuに伝えることができる	イ
	学習内容	本文(USE Read)を参考に、パソコンを使って自分のお気に入りの写真や絵についてメールを作成し、送信する（パフォーマンステスト）	

⑦ 本時案

- (1) 題材 自分のお気に入りの写真や絵を友だちに説明し、その後のやりとりを経て原稿を改善しよう。
 (2) ねらい 写真や絵の説明について、発表後のやりとりとフィードバックを通して、聞き手（読み手の視点から自分の原稿を見つめ直し、内容と英語表現について再考し、改善することができる。
 (3) 展開

学習活動	指導上の留意点	時間	備考・評価
1 本時の流れを確認する。	○メールを見せて導入を行い、その後本時の流れを説明する。 ・スクリーンに ALT から送られてきたメールを写し、内容について考えさせる。	3	・ iPad
2 ピクチャーディスクリプションを行う。（帯活動）	○絵を説明させる。 ・ペアの一人がスクリーンの絵を説明し、パートナーに相槌、リキャスト、Q&Aをさせながら、絵の内容を推測させる。 ・「言いたかったけど英語で言えなかったこと」を共有する。	7	
めあて：写真や絵の説明を行い、それについてのQ&Aを通して、自分の説明内容と表現について再考し、改善しよう。			
3 発表会を行う。	○4人グループで、写真や絵の説明をし合い、その後のやり取りを通して、説明内容と英語表現について再考させる。 ○QAチャートの使い方について確認する。 ○グループ内で順番に発表させる。 ①発表中は聞き手にメモをさせずに、話し手や写真に注目させる。 ②発表を聞いてわかったことをU (Understood) の部分に、疑問に思ったことをQ (Question) の部分に記入させる。 ③Q&Aをさせる。 ④やり取りでわかったことをL (learned) の部分に記入させ、さらに「言いたかったけど英語で言えなかったこと」を書かせる。	20	・QAチャート <「問い」の工夫Ⅱ>
(1)準備をする。(1分) (2)順番に発表する。 (4分×4人) ①発表(30秒) ②QAチャート記入(1分) ③やり取り(1分) ④まとめタイム(30秒) ※①～④を繰り返す。 (3)フリーチャットをする。(1分) (4)1人の発表を全員で共有する。	○リハーサルをさせる。 ○4人の発表のよかったところをほめ合う。 ・日本語で言わせる。 ○①～④の流れを全員で行う。 ・発表者は挙手で決める。		
4 発表内容を改善する。 (1)代表者の原稿の改善点について考え、意見を発表する。	○原稿の改善点について考えさせる。 ・ワークシートの使い方を説明する。 ○板書(QAチャート)を見せながら、代表者の原稿にアドバイスをさせる。 ・考えを発表させる。 発問：Mathieuが読むという視点で、もう一度考えてみよう。	5	<「問い」の工夫Ⅱ>
(2)自分の原稿を改善する。	○グループのメンバーが書いたQAチャートを見ながら、自分の原稿の改善点について考えさせる。 ・QAチャートは発表者に渡させる。 ・自分の原稿とQAチャートを見ながら、ワークシートにまとめさせる。	10	・ワークシート ○自分の言いたいことが相手に伝わるように、構成や表現等を工夫して書こうとしている。
5 振り返りを行う (1)本時の活動を振り返る。 (2)指導者のフィードバックを聞く。	○数名の学習者に発表させる。 ○説明の良かったところ、改善点を伝え、興味深い意見について言及する。	5	

評価について

単元の評価規準	観点	十分満足 (A)	おおむね満足 (B)	努力を要する 学習者への手立て	評価方法
自分の言いたいことが相手に伝わるように、構成や表現等を工夫して書こうとしている。	関心・意欲・態度	読み手のことを考えて、ワークシートやQAチャートを活用して原稿を改善している。	ワークシートやQAチャートを活用して原稿を工夫しようとしている。	授業中に困りがあれば声をかけ、必要に応じてアドバイスをする。	観察・QAチャート
写真や絵を、読み手にとってわかりやすい構成と適切な表現を用いて、メールで説明することができる。	表現	『抽象→具体→自分の思い』という展開で、かつ適切な表現を用いて7文以上で説明している。	『抽象→具体』という流れで、少しスペリングのミスや文法上の誤りはあるものの、5文以上で説明している。	教科書の本文を参考にしながら、英文を作らせる。	テスト
		外国人から送られてきたメールに対して、適切な表現を用いて、5文以上で返信している。	外国人から送られてきたメールに対して、少しスペリングのミスや文法上の誤りはあるものの、4文以上で返信している。	前もって定期テストにおける表現問題の概要を伝えておくとともに、授業では添削を積極的に行う。	定期テスト
現在形・現在進行形の用法に関する知識を身につけている。	知識・技能	文の構造を理解して、適切に表現することができる。	文の構造を理解しているが、スペリングのミス等がある。	具体的に家庭学習のアドバイスをし、小テストを数回行う。	定期テスト・ワークシート・小テスト

⑧ 結果と考察

本単元において、主体的な学びを引き出すために、パフォーマンステスト「自分のお気に入りの写真や絵を、メールでMathieuに伝える」を単元のゴールとすることを「問い」の工夫Ⅰとして設定した。その評価規準を早期に伝えることで、学習者は必要な技能・スキルを意識して主体的に学習に取り組むことができる考えた。毎回、授業の帯活動の中でメールの読解とピクチャーディスクライビング（絵を説明する活動）を行い、その都度、パフォーマンステストに必要な知識と相手意識を与える工夫をしてきた。その結果、単元の最後に行ったパフォーマンステストでは、90%以上の学習者が8割以上の得点を取っており、「問い」の工夫Ⅰによって見通しをもたせ、主体的に取り組ませた成果だと考えられる。

一方で、「問い」の工夫Ⅱについては、課題の残る結果となった。まず、発表の活動の後で思考ツールを活用して原稿について再考し改善する試みについては、視点を絞らなければ時間がかかりすぎるということがわかった。また、スローラーナーにとっては原稿の分析はハードルが高すぎるため、もっと多くのモデルを示し、経験を積ませる必要がある。しかし、セルフチェックやピアチェックはメタ認知力を高め、アクティブラーナー（自律的学習者）へつながる取組であるため、ぜひ実現したい。また、発問を出すタイミングを工夫して相手意識の醸成を図ることについても、期待するほどの効果がなかった。その理由として、相手理解が足りなかったことが挙げられる。本物の相手意識というのは、「誰に」ということよりも、「どんな人に」という相手のことをより詳しく知ることが必要となる。それにより学習者は様々な視点から考え、それが本校の目指す深い学びにつながるのではないかと。以上の2点（思考ツールの効果的な活用方法と相手理解による相手意識の醸成）を今後の研究の柱とする。

「自分のお気に入りの写真や絵を、メールで説明する」

①単元の目標は何か（資質・能力）

写真や絵を、読み手にとってわかりやすい構成と現在進行形を含む適切な表現を用いて、メールで説明することができる。

学習指導要領「書くことーイ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章を書くことができるようにする。

④問題意識を持たせるために、どのような導入を図るか（③を届けるために）

- ・「自分のお気に入りの写真や絵を、メールで Mathieu に伝える」というパフォーマンステスト（1月末）の内容については、前単元の学習期間内（12月中旬）に生徒に告知しておき、単元のつながりを意識させる。
- ・自分のお気に入りの写真や絵は、冬休み中に準備させる。
- ・単元の最初の授業で、英語で書かれたメールにふれさせ、さらに実際に書かせることで、単元のゴールを理解させる。

③どのようなめあて、課題にするか
（各教科の見方・考え方が働くもの）

自分のお気に入りの写真や絵を、メールで Mathieu に説明しよう。

⑤どんな追及活動を行わせるか（言語活動含む）

- ・授業の導入ではメールを紹介し、毎時間ゴールを意識させる。
- ・帯活動ではピクチャーディスクリビングを行い、写真や絵を紹介させることに慣れさせる。
- ・話す活動を行う際は思考ツールを活用し、話す活動が書くことの改善につながったという実感を持たせる。また、誰に対して書くのかということ意識させることで、相手意識の醸成を図る。

②単元の最後に理解させたいこと、発言させたいことは何か
（単元のゴール+振り返りの視点）

- ・話す活動後に内容について整理し振り返ることが、まとまりのある文章を書くことにつながる。
- ・相手によって、書くべき内容が変わる。
- ・何かを説明するとき、現在形と現在進行形は不可欠である。

【予想される振り返り】

- ・QAチャート（思考ツール）により、自分のメールの内容（原稿）がよくなったと思う。「誰に対して書くか」が大切だと感じた。

⑥使える資料は何か。どこで使うか。

- 教科書教材
- ・「Lesson 8 School Life in the USA」
 - ・英検3級用教材

「問い」の工夫Ⅰ

単元の最後にパフォーマンステストを行うことを早期に伝えることで、生徒たちは必要な技能・スキルを意識して主体的に学習に取り組むことができる。

「問い」の工夫Ⅱ

- ①話す活動後に思考ツールを活用し、原稿を自ら改善する力へとつなげる。
- ②「誰に対して書くのか」という発問を出すタイミングを工夫することで、相手意識を再確認させる。

⑦まとめの表現活動をどうするか

メールを送信し、返信をもらう。（全体で）

2 外国科における成果と課題

今年度は外国語科における「問い」の工夫について考えた。「問い」の工夫とは具体的に、Ⅰとして単元を貫く課題を学習者に届けるための「問い」の工夫、Ⅱとして学びを深める「問い」を言う。まずⅠの単元を貫く課題を学習者に届けるための「問い」として、外国語科では主にタスク活動が考えられる。単元で学ぶ文法事項や、今までの既習知識を総合的に使って、タスクを「問い」として活用した。例えば、1年生では「マチュー先生にメールを送ろう！」というタスクを設定し、現在進行形を使用して自分のお気に入りの人物について説明文を書き、コンピュータ室でメール文を作成し送信させた。2年生では、「1年生に紙芝居を披露しよう！」というタスクを設定し、聞き手を意識した言語面・ビジュアルの工夫を取り入れ1・2年生合同の発表会を催し、後輩の前で披露させた。3年生では、「ラグビーワールドカップで来県する国のプロシユアを作成しよう！」というタスクを設定し、実際に書いたプロシユアを観光案内所に置いて頂き実際に訪れる外国の方に見てもらえるようにした。以上のように、外国語科では単元を貫くタスクを「問い」と位置付けた。この場合タスクとなる「問い」を考える際に、実際に学習者にとって意味のある身近な内容や、自分たちの作品に有用性を感じるようなタスクを設定することが大切である。今後も各学年、各単元に沿う単元を貫く「問い」となるタスクを考えていきたい。また、Ⅱの学びを深める「問い」としては、1年生であれば「マチュー先生を意識した英文の書き方」や、2年生の「1年生を楽しませるための話す工夫」、3年生の「聞き手を意識した英文校正を意識した書き方」など、相手意識を持たせる「問い」が多く見られた。ただし、このⅡの「問い」については、どのタイミングで問うかが大切になってくる。学習者がⅡの「問い」を引き受け深く考えらえるタイミングを模索していくことが今後の課題として挙げられる。

また、今後以上のようなⅠのタスク活動として「問い」に取り組ませることが、より主流になってくると考えられる。その際、それらのタスク活動をどう評価するかを研究していかなければならない。例えば、パフォーマンス評価として、「話すこと」や「書くこと」の評価の仕方だけでなく、「意欲・関心・態度」についてどう評価していくかを具体的に考えていくことが今後の大きな課題と becoming だろう。そのため次年度は、「問い」に学習者が取り組む中で、それらをどう評価していくかについて外国語科全体で熟考していきたい。

1 取組の実際

実践事例 1

- ① 題材名 時を超えてつながる思い
- ② 対象学年 3年生
- ③ 題材設定の理由

〈題材について〉

美しいものや気高いものに感動する心もち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めることについて考える内容項目である。「感動」とは、物事に深く感じて心が動くことである。自然や芸術、人の生き方など、美しいものや気高いものにふれることによって、人は感動を味わい、人生をより豊かなものとするができる。また、「畏敬」とは「畏れる」という意味での畏怖という面と、「敬う」という意味での尊敬、尊重という面が含まれており、恐れかしこまって近づけないということである。

本教材においては、人間の生の有限性や、ひとつの建造物を巡る思いが時代を超えてつながり永遠なるものになっていくことについて見つめさせる。学習者の日常やこれまでの経験の中から「畏敬の念」を関連付けることは難しいという問題点はあるが、時を超えてつながる思いや、時を超えてつながろうとする人間の生き方への感動や、人間の命という有限なものを超えて続いていくものを謙虚に受け止める心を育て、畏敬の念を深めさせたい。

〈学習者について〉

中学生になると学習者たちはすばらしい自然の美や芸術、品格ある気高い人間の生き方にふれることを通して、豊かな感受性が育ってくる。これまでの学習の中で、学習者たちは、自然と宇宙といった、人間の力を超えたものに対する感動や畏敬の念について見つめてきた。しかし、改めて問われると自分の生活の中で畏敬の念がどう関わっているのか実感を持っている学習者は少ない。ここでは、今までとは別の視点として、時を超えて繋がる人間の思いや生き方への感動、畏敬の念について見つめさせたい。

〈指導・「問い」の工夫について〉

ガウディから外尾さん、その次の世代へと時を超えて思いが繋がっていることに気付かせる。その中で、人間の有限性や、サグラダ・ファミリアが帯びる「永遠の命」を捉えさせる。具体的には、次のことを考えさせたい。

- ・ガウディはなぜ自分が生きている間に完成しないものを作り始めたのだろうか。
- ・外尾さんが年を重ねるにつれ「永遠の命」を感じたのはなぜだろう。
- ・外尾さんの「こんなすごい生き物の一部になれることの方が、喜びはずっと大きい」と考えるようになったのはなぜか。

「問い」の工夫Ⅰとしては、導入で事前に「人間の力を超えて感動したり尊敬したりするようなもの」を調査して、どんな考えがあったかを提示し、他にはどんなものが考えられるかという学習者一人一人に疑問という「問い」を立てさせたい。そして、資料提示の際に、全体像や内部映像、表面の細かな彫刻など、学習者にすごさを実感させられるように工夫する。また、登場人物の言葉や思いに注目させ考えることで、学習者の言葉の中から発問につなげていけるようにする。「問い」の工夫Ⅱとしては、外尾さん自身が「畏敬の念」を感じるようになった心情の変化にそって考えさせることで、人間の有限性を超えて永遠に続くものに対する「畏敬の念」感じ取らせる。また、単元のテーマである「理想の社会を思い描く」ために「畏敬の念」がどう関わるのかを考えさせることで、実生活の中での道徳的価値を理解し感じ取らせたい。

④ ねらいと教材

スペインのサグラダ・ファミリア建設に携わる人々に関する文章を通して、時を超えてつながる思いを見つめさせ、人間の生の有限性を超えて永遠に続いていくものへの感動や、畏敬の念を深めさせる。

〈教材名「サグラダ・ファミリア ―受け継がれていく思い」
内容項目 「感動、畏敬の念」 出典「中学道徳③」光村図書〉

⑤ 評価〈学習評価を把握するための指導の着眼点〉

- (1)先人から自分達に託されているものを考える中で、自分との関わりで「時を超えてつながる思い」について見つめている。
- (2)時を超えてつながる思いについて、ガウディの視点や外尾さんの視点など、様々な角度から考えている。
- (3)先人から託されているものについて、考えを巡らせている。

〈方 法〉

- 授業中の発言内容やグループでの話合いの様子から把握する。
- ワークシートの内容から把握する。

⑥ 単元指導計画

単元テーマ:理想の社会を思い描く(シーズン3「広い視野で」)			
	学習内容	内容項目	指導内容
1	18 聖地甲子園の土守	勤労	甲子園球場のグラウンドキーパーとして土や芝生を守った藤本治一郎さん、辻啓之介さん、金沢健児さんについての文章を読んで、人は何のために働くのかについて考えさせ、働くことを尊ぶ心情を育てる。
2 本 時	20 サグラダ・ファミリア-受け継がれていく思い	感動, 畏敬の念	スペインのサグラダ・ファミリア建設に携わる人々に関する文章を通して、時を超えてつながる思いを見つめさせ、人間の生の有限性をこえて永遠に続いていくものへの感動や、畏敬の念を深めさせる。
3	19 障子あかり	国の伝統 と文化	照明デザイナーの石井幹子さんが障子あかりについて述べた文章を通して、日本の文化を知り、継承していくことの大切さについて考えさせ、伝統と文化を尊重していこうとする実践意欲と態度を育てる。
4	21 先人の言葉-「論語」	向上心, 個性の伸 長	「論語」の7つの章句を読むことを通して、自分を見つめ、輝かせることについて具体的に考えさせ、向上心を持ち、個性を伸ばしていこうとする実践意欲と態度を育てる。

⑦ 本時案

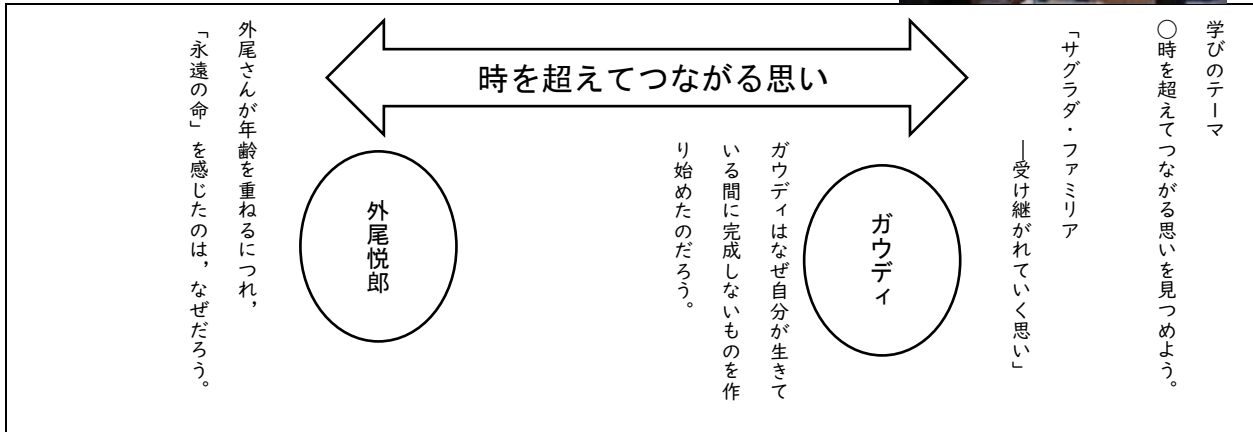
- (1) 題材 「サグラダ・ファミリア-受け継がれていく思い」
(『中学道徳③ きみがいちばんひかるとき』 光村図書)
【内容項目】 D(21)感動、畏敬の念
- (2) ねらい スペインのサグラダ・ファミリア建設に携わる人々に関する文章を通して、時を超えてつながる思いを見つめさせ、人間の生の有限性をこえて永遠に続いていくものへの感動や、畏敬の念を深めさせる。
- (3) 本時における「問い」の工夫
- ・導入のサグラダ・ファミリアの資料の提示の際、動画や全体像と部分写真の比較や、表面の彫刻の様子などで学習者の興味を引くようにする。
 - ・外尾さんが年齢を重ねるにつれ「永遠の命」を感じた気持ちを考えた後、自分の経験や身の周りにある「畏敬の念」について考えさせることで、人間の力をこえたものを謙虚に受け止める心を育てたい。
 - ・「理想の社会」に「畏敬の念」がどう関わるのかを考えることで実生活の中での道徳的価値を理解し感じ取らせたい。

(4)展開

学習活動	時	指導・指導上の留意点、「問い」の工夫 (○基本発問 ◎中心発問 ◇補助発問)	予想される学習者の反応	備考・評価
1, 本時の学びのテーマを確認する。	2分	・理解度を高めるために、本時の学びのテーマを板書して示す。 「問い」の工夫I ・事前のアンケート結果を板書し共有する。 【学びのテーマ】 「時を超えてつながる思いを見つめよう」		
2, サグラダ・ファミリアについて知る。	8分	サグラダ・ファミリアについて知っていることがあるかを聞き、設計者のガウディやまだ完成していないことなどを確認してから動画を見せる。		提示資料 プロジェクトター

		<p style="text-align: center;">「問い」の工夫Ⅰ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サグラダ・ファミリアの全体像や内部の動画などの資料を提示し、学習者の驚きと感想を引き出す。 ○なぜこんなに時間がかかってもまだ完成していないと思いますか。 ・1882年から建設が始まり、まだ工事が続いていることを知らせ、学習者の驚きと疑問を引き出し、教材文への興味・関心を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・細かいので時間がかかっている ・作るのが難しい。 	
<p>3, 教材「サグラダ・ファミリア-受け継がれていく思い」を読んで考える。</p>	<p>10分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教材内容の把握度合いを高めるために、視点をもたせた状態で範読をする。 ○ガウディまたは、外尾さんの言葉や行動で印象的なものを考えながら聞いてください。 ・範読後、ガウディと外尾悦郎についてどんなことを感じたのかをそれぞれ発表させる。 ・多様な考えにふれあわせるために、考えたいことを板書し、テーマ「時を超えてつながる思い」につなげる。 ○ガウディはなぜ自分が生きている間に完成しないものを作り始めたのだろう。 ・完成予想図の動画を見せ、ガウディの死の3年後に完成していた部分を確認させる。 ・当時の技術では実現不可能な構想が含まれていたことを伝え、完成を未来に託していたことをより印象づける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一緒に作っている人たちが強い気持ちで参加していると信じていた。 ・設計図や模型を作って準備していたから。 	<p>ワークシート</p>
	<p>15分</p>	<p style="text-align: center;">「問い」の工夫Ⅱ</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎外尾さんが年齢を重ねるにつれ、「永遠の命」を感じたのは、なぜだろう。 ・外尾さん自身も、建築に関わる中でサグラダ・ファミリアに対する思いが変わっていったことに気づかせたい。 ・人間の生の有限性やサグラダ・ファミリアの永遠性に思いをはせる外尾さんの気持ちを想像させ、「時を超えてつながる思い」を捉えさせる。 ・「もっといいものを作ろう」という思いで建設に取り組み続けた人々の気高い生き方、人々の時を超えた思いの壮大さに思いをはせさせ、感動や畏敬の念を感じ取らせたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・長く関わることで愛着を感じている。 ・「時を超えた会話」を通して、サグラダ・ファミリアに命が吹き込まれていくように感じたから。 ・サグラダ・ファミリアに関わった人や訪れた人の思いが時を超えて交わりつながることができる。 	
	<p>5分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◇「1個人の作品を完成させることより、こんな素晴らしい生き物の一部になれることの方が、喜びはずっと大きいと考えるようになった」というのはどういうことだろう。 ・単に永遠に存在する物体なのではなく、人々の思いが関わっていることに目を向けさせる。 		
<p>3, 本時を振り返る。</p>	<p>10分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▼ 人間の生の有限性を超えて永遠に続いていくというような意見が出れば、そこに畏敬の念という言葉を書き出す。 ○自分の身の回りに、感動し畏敬の念を感じるものはあるだろうか。 ・事前にとったアンケートから、紹介し、改めてどんなものがあるか考えさせる。 ・理想の社会に「畏敬の念」がどう関わるのかを考え、今日の授業の感想や感じたことを記入させる。 <p style="text-align: center;">「問い」の工夫Ⅱ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・世界遺産 ・自然 ・生活信条、附属中 	

(5) 板書計画



⑧ 結果と考察

深い学びを実現させる「問い」の工夫について

「問い」の工夫Ⅰ

「感動・畏敬の念」という日頃学習者が身近に感じにくい感覚について考えるためには、題材となっているサグラダ・ファミリアについて、まず興味を持ち、その存在について驚きを与えることが必要だと考えた。そのために、視覚的な資料を活用することにした。教科書に付属している資料映像（外観、内装）に加え、未完成のサグラダ・ファミリアの完成予想のCG動画を学習者に見せた。ねらいとしていた、驚きを与え興味を持たせるには有効な手立てだったと考える。また、本題材では、人間の生の有限性を超えて永遠に続いていくものに対して「畏敬の念」を感じるという感覚を共有することに苦労した。事前アンケートを使い、「人間の力を超えて感動したり尊敬したりするようなものと聞いてどんなものを思い浮かべるか」について聞いた。その時点で、明確なものを想像できない学習者もいた。学習者からの意見は、宇宙や森といった自然の中にあるものがほとんどだったので、そのことを導入部分で共有し、他にはどんなものが考えられるのかという疑問を持たせ、主体的に題材に取り組めるようにした。また、発問は教師が一方的に提示するのではなく、範読の際に学習者自身の印象に残った部分から発問につなげるようにした。同じ部分でも印象が違ったり、同じ印象もそれぞれの意見で感じ取った部分の幅が広がったりと多面的に捉えさせることができた。

「問い」の工夫Ⅱ

主発問を「外尾さんが年齢を重ねるにつれ、「永遠の命」を感じたのは、なぜだろう」とした。外尾さん自身が、建築に関わる中でサグラダ・ファミリアに対する思いが変わっていく心情の変化と、人間の生の有限性やサグラダ・ファミリアの永遠性に思いをはせる外尾さんの気持ちを想像させることで、そこに「畏敬の念」を感じるよう工夫した。また、この単元のテーマである「理想の社会を思い描く」につながるよう、「理想の社会に畏敬の念がどう関わるのかを考えよう」という発問をした。以下が学習者の意見である。

- ・誰もが「畏敬の念」を持っているからこそ、多様な人間や動物や様々な考え思想がある現在の社会が成り立っていると思う。
- ・先代の意志や文化習慣に「畏敬の念」があると思った。
- ・「畏敬の念」があるからこそ、日本文化や、誰かを敬う気持ち、お互いに思いやる雰囲気などがあると思う。伝統的なものへの「畏敬の念」があるから受け継がれていると感じた。

- ・社会が「畏敬の念」を失ったときにはありふれた感動や驚きのない冷めた社会になって理想とかけ離れてしまうと思う。

学習者の意見から、道徳的価値の関わる事象について、自身の経験や知識をもとに自分自身の理解を確認したり、さらに深めたりすることができていると考えられる。



2 道徳科における成果と課題

平成28年に出された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（答申）」では「考え、議論する道徳」について次のように説明されている。「多様な価値観の、時には対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向い合い、道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育で養うべき基本的資質であるという認識に立ち、発達の段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童生徒が自分自身で捉え、向き合う」という「考え、議論する道徳」への質的な転換を図るものとされている。道徳の授業の中で「議論する」ためには、自分とは異なる多様な感じ方・考え方や価値観があるという事が明確になる必要があると考える。それぞれの考え方が現れる「問い」の工夫やそれに伴う「発問の工夫」が必要である。「考え、議論する道徳」への質的な転換のためには、学習内容が学習者に届き、共有させ、主体性を生むための手立て・プロセスとなる「問い」の工夫Ⅰによって、それぞれの経験や感じ方、印象などを共有したり、多面的、多角的に考えたりすることができ、深い学びに迫るための手立て・プロセスとなる「問い」の工夫Ⅱでは、道徳的諸価値についての理解をもとに自己を見つめ、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てることにつながると思う。

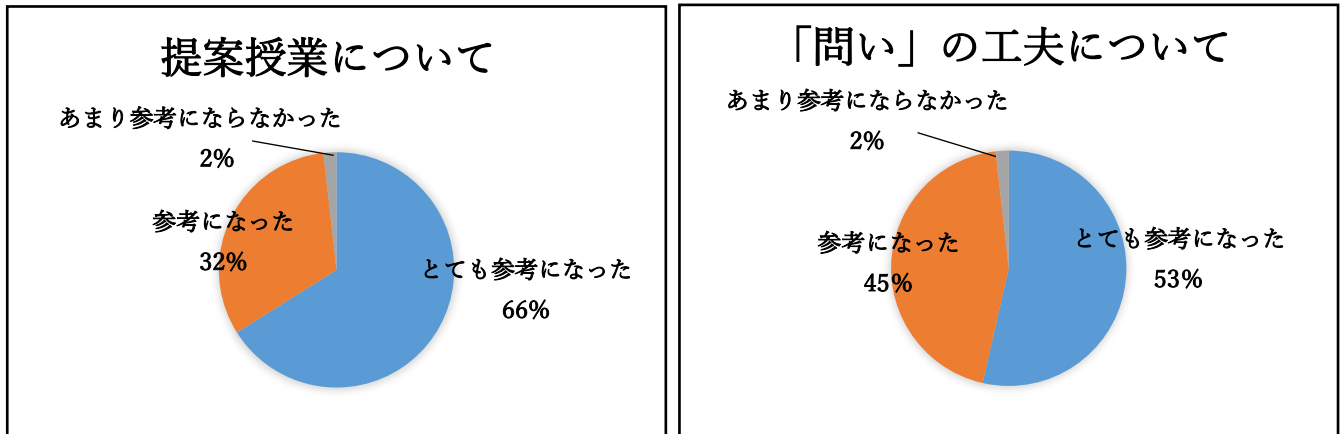
今後の課題としては、「問い」の工夫を評価につなげていくことである。学習指導要領解説には「評価の観点」と「評価の視点」が示されている。その観点をもとに授業づくりを考える中で、効果的な発問づくりや「問い」を工夫することが大切である。深い学びを実現させるには、指導者の期待している言葉ではなく、学習者一人一人の真意、本音を学習者自身が自覚できるように聴き取ろうとする発問づくりやプロセスの工夫が重要である。

全 体 総 括

各種アンケート結果

〈公開研究発表会 当日アンケートより〉

公開研究発表会には 121 名の方にご参加をいただき、56 名の方よりアンケートの回答を得た。提案授業、「問い」の工夫、ともに 98%の肯定的な評価をいただいた。各教科に対する感想や意見の一部を以下に記載する。



国語科

○教科書教材と他の書籍との関連をもたせ目標に向かう単元づくりが、考える機会になった。

○公立校と附属の目標設定や言語活動に大きな差がないけれど、指示の飲み込みや、聞いて理解する力の差を感じた。これからも先進的なことに挑戦してほしい。公立の自校でどう工夫するかアイデアをもらう機会になり、やる気もらった。

○文学的文章を読み深める授業は、学習者にとって難解で退屈なものになりがちであるが、文章の工夫を見つけて、どんな思いや風景が思い浮かぶか語り合い、そうそう、へえー、というワクワクのある授業で、主体的・対話的で深い学びが実現できていた。

○教師がリーダーについて、全員に確認したあとはグループでその部分に注目して新たな気づき、学びが生まれていた。問いというか、授業で学習者の様子を捉えて投げかける力は大切だと改めて感じた。

○学習者が学びたいという課題設定の仕方が参考になった。

○本日のような丁寧な授業で、文章や言葉、表現と出会った学習者たちのこれからの読書生活は必ず豊かになり、読む楽しさに心躍らせるのではないか。主体的な学び手が育つ土台作りをなされているのだと思った。私も学習者の輪の中に入り、語り合いたくなった。

○教科らしい「問い」を立てる、子どもの答えが大切、用意している教師側の答えにまとめない、答えまでのプロセスの多様性を認める、教師の言葉と繋げていくことは、指導助言者の講評の中にあつた「ここは先生がぐっと前にも出てもいいところです。」と重なり、腑に落ちた。

社会科

- 振り返りから次回のめあてにつなげる取組がよかった。参考になった。
- 調べ学習に観点をもたせるように積み重ねて身に付けさせるところが参考になった。
- 思考ツールの活用、話し合い、調べ学習など、毎時間の積み重ねがないとできない。学習者は課題をしっかりと引き受け、まとめができていた。
- 主発問の設定は大変難しい。子どもの意見がリアリティ、論拠、思いがあるもので、解決欲求の材料になると考えるからである。例えば、9月中の報道から、それを探して持ち寄る、とか、一番のソース源、保護者と3つ見つけて持ち寄る、という条件付けをしたら、さて、どうなっただろう？と想像してみた。さらに、有権者が不公平感なくなるべく解消するリーダーを選出できていないといった選挙権にも言及出来たら、さらに深まったかもしれない。
- 中学生が抱きやすい社会の批判的視点がベースになっていて、どの子どもよく課題を引き受けて調べていると感じた。自分がしっかりと調べているので、他者の発表をしっかりと聞けていた。
- 問いを学習者が主体的に考えをつくる・・・というのは、今求められていると思うので、実践させているのはとても参考になった。実践したい。
- 振り返りから次の課題をつくるのが、主体性につながっていた。
- 「問い」の工夫について、考えさせられた。
- 問いについて、学習者の立場になり考えていたのだと思う。だからこそ、学習者が主体的に活動していた。学習者が心地よさそうな授業だった。
- 子どもたちの疑問が振り返りの1つだとわかった。
- 授業中に発生した疑問、「多少の不公平感は飲み込めないかな・・・」に対して、その場で取り上げて思考させたことにより、課題の柱である不公平感の存在をしっかりととらえることができた（対応力）。

数学科

- 数学化、現実の世界との行き来する様子がとても見える授業で、大変参考になった。
- 数学の授業の課題のタイミングがビデオを使ってイメージを沸かせるところが参考になった。
- 映像で実際に見せ、数学が有用であると感じさせることが大切であることがわかった。

理科

- 分類を教えるのではなく、なぜ分類するのか、どう分類するのかを考える授業であり、活発な活動につながっていた。新たな視点からの内容で、大変勉強になった。
- 普段自分がやらない形で来年度を見越して授業を行ってくださったので、とても参考になった。
- 提示した課題を学習者が捉えていないという状況を解決するための例として、非常に参考になった。
- 自分の授業を振り返って、教員が話す時間が長いと感じていたので、もっと対話が増えるように、今日の授業を参考にしたい。
- どのような問いが子どもに課題意識をもたせるのか、新しい視点に気が付いた。ただ、やはり色んな子どもの考えから導き出される内容を想像しておかないと、深い学びにつなげることは難しいと感じた。
- 学習者の学びに向かう姿勢を刺激する「問い」の工夫の研究はよかった。

○問い、発問をどのタイミングで何を目的にするのか、問いのⅠ、問いのⅡと分けて、目的をもって行うところが、とても参考になった。

○学習者の目線、思考で「問い」を聞いていたが、「問い」Ⅰ→めあて、課題を受け入れることができた。

○授業者のねらいや他の先生方の授業例など、交流が出来た点が参考になった。主体的な活動に結び付けるための「問い」について考える良い機会となった。

○新学習指導要領をもとに、どのような意図があっただけなのかよくわかり、勉強になった。

音楽科

○たくさんの曲のなかで、あまり聴いたことのない曲に取り組みされていて、とても参考になった。今までの指導されたことや授業を創り上げるヒントを見つけられた。

○学習者が生き生きと活動する場面が授業の中でたくさんあった。

○子どもたちが表情豊かに進んで歌う姿に感心した。

○学びを進めるにあたり、家で好奇心をもって調べてきていることに感心した。附属中の「Ⅲ期の学びの成果を発揮する・・・」というところが、身に付いていると感じた。

○歌い方メニューをつくってみたい。

○「問い」の工夫をすることで、学習者が主体的に動いていた。

○久しぶりに附中の公開研に参加したが、さすが附中という感じの準備でした。これからも附属らしい提案をしてほしい。

○学習者の実態にあった深まりのある授業だった。

家庭科

○新学習指導要領のイメージが具体的にできた。

○単元を通してつけさせたい力、指導のねらいがわかりやすかった。

○学習者一人一人がめあてを受け止め、主体的に活動していた。

○単元構成がしっかりとできていて、単元を貫く授業の工夫を感じることができた。

保健体育科

○学習者が活発に授業に取り組んでいた。

○ほしいワード、与えたい知識につながる教材の使い方、選択が大変参考になった。

○授業規律も含めて大変参考になった。

○実技の研究授業が多い中で、体育理論の授業が見られてよかった。

○「問い」の工夫、授業で見つけさせたい資質能力の育成、熱意の溢れる授業者の授業は見ごたえのあるテンポのよい授業だった。

○なぜ体育をするのか、体育理論を学ぶのかなど、他の学校、教員が考えを発信する良い機会になると思う。

○様々な視点から意見や質問が出され、有意義な事後研だった。

○体育理論の捉え方や実技との関連について理解できた。

外国語科

- 相手意識がしっかりとしており，学習者が意欲的に取り組んでいた。
- まとまった英文を書かせることの必要性を感じた。文章構成の意義づけの様々な方法のヒントを得ることができた。
- ピアチェックがモニタリング力を育成するという点が参考になった。
- 英語科における問いに苦しんでいたが，どんなものか具体的な像が少し浮かんだ。
- いわゆる発表など，最後の姿だけでなく，その途中経過を見られたことに価値があった。
- ライティングの授業，大変参考になった。特に，学習者が友人のものをチェックする方法を取り入れようと考えていたので，勉強になった。
- 今日の授業では Broschura をほぼ完成させており，「問い」の工夫の観点からすると，学習者たちがこの課題に出会う，取り組み始める場面を見たかった。
- 評価との整合性が気になった。
- これから国語科との連携が必要だと考える。
- 書く活動（文章構成，ピアチェック力，自己調整力等）の内容について，勉強になった。問いに対して，考えを深めることができた。
- 中学校英語の話す活動について学びたい。

その他（自由記述）

- 主体的・対話的で深い学びについて，授業改善の方法や「問い」の工夫など，多面的な考えをもつことができた。
- 自分の授業を問い直すための取組や授業場面における問いや課題について学ぶことができた（深い学びの鍵となる「問い」の質，子どもが主体的に学ぶための「問い」，予想している子どもとのキャッチボールからはじめること，振り返りがめあてに迫れたか等）。
- 「育てるための評価」という言葉に背筋が伸びた。
- 学校で「問い」の工夫Ⅰ，「問い」の工夫Ⅱという方法を紹介したい。自分も実践したい。
- 附属中の研究を来年も見に来たい。
- OC 層の学習者の引き上げ方を知りたい。
- 自尊感情を高める集団，個人，命を大切に作る集団作りについてもっと知りたい。
- 附属中の授業規律を参考に実りのある授業を創りたい（授業力，学習者指導，学級経営等）。
- 教え込みではない，本当の主体的な学びを追究していきたい。
- 教育課程に関連する研究を知りたい。

〈公開研究発表会 追跡調査より〉

12月の末に公開研究発表会の追跡調査を実施し、36名の方にご協力をいただくことができた。本調査より、大分県公立学校教員育成指標との関連を考え、教員経験年数（5段階）を項目に加え、質問項目を以下のように設定し、回答をいただいた。

質問項目（回答は「あてはまる」「大体あてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4段階）	肯定的評価
1. 学習指導要領に基づいた、育成を目指す資質・能力を明確にした授業づくりの参考とした。	97.2%
2. 単元構想を行う際に、育成すべき資質・能力を明確にした単元構想メモや単元指導計画を参考にした。	100%
3. めあてや課題の設定を行ったり、導入を工夫したりする際に、「問い」の工夫Ⅰを参考にした。	94.3%
4. 深い学びの実現に迫る時間や場面を設定する際に、「問い」の工夫Ⅱを参考にした。	91.6%
5. 対話的な授業を展開する際に、補助発問やグループワークの手法などを参考した。	97.1%
6. 学習者の指導にいかしたり、授業改善にいかしたりする際に、学習評価（評価規準や方法）を参考にした。	83.3%
7. 学びに向かう集団づくり【附中版】を参考に、取組を行ったり、取組の計画を立てたりした。	72.2%

項目2では100%、項目3の「問い」の工夫Ⅰについては94.3%、項目4のⅡについては91.6%と高い評価をいただいた。しかし、教員経験年数「6年目～10年目」「11年目～20年目」の方からは項目3、4について肯定的な評価は57%だった。このことは、資質・能力の育成のための深い学びの実現の手立て・プロセスとして、「問い」の工夫Ⅱが不十分であったこと、もしくは、「問い」の工夫ⅡがⅠに比べ分かりにくく、参考にならなかったものと推察でき、より具体的且つ有用な手立て・プロセスの提案が必要であると考ええる。

〈外国語セミナー〉

本校では外国語セミナーを実施し、授業を公開することで県下に取り組を発信している。本年度は1月24日に開催し、75名の参加をいただき47名の方よりアンケートの回答をいただいた。

質問項目（回答は「あてはまる」「大体あてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4段階）	肯定的評価
1. 学習指導要領に基づいた、育成を目指す資質・能力を明確にした授業づくりの参考になった。	100%
2. 育成すべき資質・能力を明確にした単元構想メモや単元指導計画が、単元構想の参考となった。	100%
3. めあてや課題の設定を行ったり、導入を工夫したりする「問い」の工夫Ⅰが参考になった。	95.6%
4. 深い学びの実現に迫る時間や場面を設定する「問い」の工夫Ⅱが参考になった。	91.3%
5. 対話的な授業を展開する際に、補助発問やグループワークの手法などが参考となった。	95.6%
6. 学習評価（評価規準や方法）が指導と評価の一体化を目指す上で参考となった。	95.4%

項目1、2で100%、「問い」の工夫Ⅰ、Ⅱをはじめ、全項目で90%以上の肯定的評価をいただいた。来年度に向けて、評価について触れていることから、公開研究発表会の際と比較して、項目6のポイントが上昇したものと考える。

〈6期ステップⅢ期「共に創る授業」の取組の振り返りより〉

	①研究発表会に向けてクラスで立てた学習の重点目標を達成できた	②研究発表会に向けて学習委員会の特別活動を通し、授業に対する意識が高められた
	77%	87%
	84%	91%
	83%	85%
	62%	81%
	86%	89%
	69%	85%
	87%	94%
	65%	85%
	86%	97%
	84%	95%
	90%	78%
	87%	92%
平均	80%	88%

◇記述式質問項目の回答

あなた自身のⅢ期の生徒会活動に取り組む姿勢はどうでしたか？

- 授業の初めに教科係さんが言ってくれたので、意識できた
- 重点目標を意識し、みんなと協力しながら授業に取り組めた
- 次の授業の準備を意識するようになった
- 苦手教科でもがんばろうと思った

あなたのクラスのⅢ期に取り組む姿勢はどうでしたか？

- 取組前よりも挙手が増えた
- 発表、班活動が活発になった
- 発表を聞く態度がよくなり、自分の考えをもてるようになった
- 授業に向かう姿勢が格段に上がっていると思う
- クラスの取組から、個人個人が主体的になった
- メリハリがつくようになった
- 呼び掛けも増え、意識も高まった
- 公開研に向けて意識が高まった
- 学習委員や評議委員だけでなく、他の人も呼びかけを行うようになった
- 黙想の時間に振り返りがあり、今日がんばることがわかり、意識できた
- △個人差が見られた
- △まだまだ消極的

「共に創る授業」の取組のアンケート結果を見ると、「研究発表会に向けてクラスで立てた、学習の重点目標を達成できた」について平均80%、「研究発表会に向けて学習委員会の特別活動を通し、授業に対する意識が高められた」については平均88%の肯定的な回答であった。このことから、各クラスの実態に応じて重点目標を定め、各教科係と指導者が授業を振り返り、次の目標を設定する活動は、学習者の主体的な学びの実現に一定の効果があつたと言える。しかし、課題として、各クラスによるポイントの大きな差異が見られること（評価の指標が不明確であることも要因）、取組がマンネリ化し、形骸化してしまう傾向があることが挙げられる。現在はこの②の活動を常時活動として実施しているが、本反省を生かし、改善していきたい。

全体総括

各教科の実践より

	成果	課題・今後の取組
国語	<ul style="list-style-type: none"> 教材を学習者が自ら選択したり、単元のゴールイメージを具体的にもたせたりした「問い」の工夫Ⅰは、興味・関心を喚起し、見通しをもつことができ、学習者の主体的な学びにつながった。 「問い」の工夫Ⅱとして、言語活動そのものを充実させること、客観的にとらえなおすことで言語活動を充実させることをねらったが、このことにより、自分の思いや考えを深めることに一定の成果があった。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習過程をメタ認知できるような振り返りになっておらず、今後は「問い」の工夫Ⅰと振り返りをセットに考え、学習者に学習過程をメタ認知させることで、課題解決力を高めさせたい。 言語活動の充実を図る際の留意点を整理する必要がある（グループ編成の仕方や、グループ活動で個々の学習者の考えの変容をどのように見取るのか等）。
社会	<ul style="list-style-type: none"> 「問い」の工夫Ⅰとして取り組んだ既習知識や生活体験をもとに単元のめあて・課題を設定し、見通し作りをする活動は、学習者が自ら学習内容・活動を設定し、探究的な学習計画の作成に関与するため、主体的な学びに繋がる有効な手段となった。 思考ツールの活用は、調べ学習による情報を整理・分析し、自分の考えをもたせることに有効に働いた。その上で、思考を活性化させる手立てを講じることは深い学びを生み出す一つの学習過程だと考える。 学習者の振り返りを次時のめあてや課題に繋げるサイクルは「問い」の工夫Ⅰ、Ⅱのどちらの要素も含み、同様の効果が期待できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 公民的な資質・能力の育成を目指して、実社会とのつながりをより重視しためあて・課題の設定をしなければならない。 学習者が学びをメタ認知する振り返りを単元の中に適宜設定することで、学びを調整する力を養っていきたい。 思考の活性化の手立てやプロセスの実践例を蓄積し、その効果を検証していく。 学習者に情報を吟味する力を育て、根拠のある考えがもてるような手立てを考える必要がある。
数学	<ul style="list-style-type: none"> 身近な場所で撮影した動画を活用して単元の前半を行ったが、日常生活や社会の事象を数学化する一つの手立てとして有効であった。 学習者が主体的に学ぶためのもの等、意図的な発問を行うことが、数学的な見方・考え方を働かせたり、思考の変容を促したりする手立てとなる。 既習事項を確認する段階で、法則性を見出したり、条件を変えたりすることで見つかる課題は、全体で共有しやすく、学習者が取り組みやすい課題となる。 多様な考え方ができる場合、一つの手立てを早い段階で共有することで、C層の学習者に有効な解決の手立てとなる。 	<ul style="list-style-type: none"> 数学の問題発見・解決の過程を単元のどこに位置付けるかを明確にし(特に、何に注目すればよいか焦点化したり、問題解決の結果や過程を検討し体系化したり概念を形成したりすること等)、意図的な発問を構造化することが求められる。 多様な考えを交流し、修正し合う場面の充実が求められる。 指導と評価の一体化に向けて、評価を意識して「問い」の工夫を単元計画に位置付ける。 課題の解決を多様な方法で行わせたいが、多様すぎるとまとめる方向性が難しくなってくる。まとめるかどうか考えた上で、どこまでの多様性を求めるか考える必要がある。
理科	<ul style="list-style-type: none"> 身近な現象を教材化したり、その現象をストロボ写真等により可視化したりすることや、従来の系統分類にとらわれない分類の多様性を問う発問を行う等、単元の初めに「問い」の工夫Ⅰを講じることが、学習者の主体的な学びに繋がった。 ゴールイメージをもち、発問を構造化することが学習者の課題解決の手立てとなり得ることがわかった。 単元を通じて同様の学習活動を繰り返すこと(視点を定め、共通点と相違点を繰り返し見出す活動)が、(分類の)技能や理解の深まりに繋がった。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習内容の本質に近づこうとするための意味理解や、学習活動で得た考えを既習事項と結びつけて次の課題発見へと繋げるためには、学習者に対する指導者からの働きかけやフィードバックが大切であることがわかった。 探究の過程のスパイラルを意識し、探究全体を振り返る場面を設定して変容を確かめられる単元構想や展開の工夫(「問い」の工夫Ⅰ、Ⅱ)が必要である。

音楽	<ul style="list-style-type: none"> ・思いを共有させたり、昨年度の演奏を聴かせたりすることで学習者が見通しをもち、音楽記号による伝わり方や表現の違いをつかむことで、意欲的な学びへと繋がった。 ・楽譜に音楽記号を付けたり、「歌い方メニュー」を活用したりする活動は、思いや意図を表現するのに適した手立てだと考える。また録音を聴いたり、学習者同士で聴き合ったりする活動も、相手意識をもち、合唱をより良くする手立てとして欠かせない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・合唱コンクールという行事に向けて意識を高めていったが、外発的な動機だけではなく、学習者自身が更に学びたいという意欲や必要性をもつ手立てやプロセスを考えていきたい。 ・学習者自身が新たな曲と出会う中で、試行錯誤しながら「歌い方メニュー」の具体的な技能を言語化することを継続していく。 ・学習者が意欲をもち「歌い方」を試行錯誤するような教材の選定をする。
美術	<ul style="list-style-type: none"> ・制作の困りを共有することで、漠然としていた困りがタイプ別に分けられ、自分の課題解決に活用できるようになり、主体性に繋がった（「問い」の工夫Ⅰ）。 ・コピーに書き込むプロセスを加えることで、思い切りよく実験的に制作を行うことが可能で、加筆前のもものと比較することで、自分の作品を見直す機会となり、作品の改善に繋がった（「問い」の工夫Ⅱ）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「問い」の工夫Ⅱとして設定したプロセスは、制作に戸惑っている学習者が具体的な改善策を知り、制作を進めるきっかけとなるため、もっと前の段階に設定する、もしくは、制作過程の中で数度位置付けることが必要である。 ・発想面と技能面の双方を高めていくことが、より深く自分の表現を追究していくことにつながるため、その双方の学びを単元の中で効果的に計画することが必要である。
保健	<ul style="list-style-type: none"> ・「なぜスポーツが存在するのか」「適切で合理的な体力の高め方はどうしたらよいか」などについて、発問を構造化することで、自分事として主体的に、段階的に考えさせることができ、正しい知識と見方・考え方を身に付けさせることができた。 ・その上で、理論を実技に繋げることに取り組んだが、体育科の見方・考え方が今後の学習者の生活に生かされることを期待している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発問を構造化して段階的に考えさせたが、発問によって学習者の考えが発問に対する「答え」になってしまい、思考を狭めてしまった一面がある。このことから、単元を見通し、その意図をより明確にした発問を行っていく必要があると考える。 ・今回の取組により、体育科の見方・考え方が今後の学習者の生活に生かされたかどうか、追跡調査をしていく必要があると考える。
技・家	<ul style="list-style-type: none"> ・実習との連携、実生活との関連を意識して、技術分野では電気回路を、家庭分野では住まいチェックシートを作成したが、学習者の主体的な学びへと繋がったと考える。 ・技術分野では、発電方法の長所と短所を考える活動により多面的な理解が深まった。 ・家庭分野では、住まいチェックシートを改善する活動、実際に自分の家で使ってみる活動を取り入れることで深い学びにつながった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・技術分野では、調べ学習や「問い」の工夫Ⅱにより得られた発電方法の多面的・多角的な理解が、製作に十分にかかされていないように感じた。座学と実習を繋いだり、自分の学びを振り返り、改善したりする手立てを考える必要がある。 ・家庭分野では、導入の際に学習者から課題を引き出すような手立てを講じることで、より主体的な学びになり、深い学びへと繋がると考える。 ・より実生活、社会と繋がる学びにするために、教科横断的な取組を両分野で行う必要がある。
外国語	<ul style="list-style-type: none"> ・単元を貫く課題を学習者に届けるための「問い」の工夫Ⅰとしてタスク活動を設定したが、単元のゴールが明確になるため、見通しをもって主体的に活動することができた。 ・「問い」の工夫Ⅱとして、タスク活動の中に相手意識をもたせる要素を入れ、相手意識を視点に自分の考えを修正する場面を取り入れたが、深い学びに繋がる一定の効果は見られるものの、課題が残る結果となった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「問い」の工夫Ⅱについて、どのタイミングで学習者にそれまでの学習内容や学習過程を振り返らせるかが重要で、今後実践を重ね、検証していく。相手意識についても、「誰に」なのか、「どのような人に」なのかを明確にし、より相手のことを知った上で視点とする必要がある。 ・思考ツールを用いて学習者の再考を促す手立てについては、視点を絞らなければ時間がかかり過ぎること、学習状況によってはハードルが高すぎて機能しないことが課題である。
道徳	<ul style="list-style-type: none"> ・道徳的価値の内容を学習者に考えさせるためには導入部分での発問の工夫や資料提示の工夫が効果的だということが確認できた。そうすることで意欲的に一時間の授業を考え始めることができる。 ・また、授業前後での考えを比較したり、実生活に置き換えて考えたりすることで理解を深めることができたと考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「問い」の工夫を評価に繋げていくことが今後の課題である。学習指導要領解説に示された「評価の観点」「評価の視点」を基に授業づくりを考え、効果的な発問づくりや「問い」を工夫していくことが重要であるとする。

今年度は「深い学びを実現させる『問い』の工夫」という研究主題を掲げ、めあて・課題を学習者に届け、共有させ、主体性を生むための手立て・プロセスを「問い」の工夫Ⅰ、深い学び（単元の目標の達成）に迫るための手立て・プロセスを「問い」の工夫Ⅱとして、各教科で授業実践を行った。各教科における成果や課題・今後の取組について共通項を探ると、次のようなことが分かった。

有効な手立て・プロセス	今後の課題
<p>「問い」の工夫Ⅰ</p> <p>○学習者の実生活や社会とつながったもの、身近なものを教材化する。その際、視覚的な映像や資料を用いる。</p> <p>○パフォーマンス課題を設定する（成果物、タスク活動）。</p> <p>○教材を選択する等、めあて・課題に学習者が意思決定できる要素を取り入れる。</p> <p>○既習知識、概念的知識を活用しながら、めあて・課題を設定する。</p> <p>○単元のゴールイメージを具体的にもたせ、見通しを考えさせる。</p> <p>○調べ学習を取り入れ、学習者自身に情報収集をさせる。</p>	<p>○育成すべき資質・能力をより明確にして、具体的なゴールイメージをもった上で、めあて・課題を設定する。</p> <p>○社会とのつながりを意識しためあて・課題を設定する（社会からの評価、実際に使えるもの等）。</p> <p>○単元の中に、学習過程をメタ認知できるような振り返りを設定する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎時間の効果的な振り返りの在り方 ・個々の学習者の考えの変容をどのように見取るか ・C層の学習者への支援の方法
<p>「問い」の工夫Ⅱ</p> <p>○単元の中に、学習者の学びを振り返り、修正する場面を設定する（振り返り、対話、新しい視点、資料等）。</p> <p>○言語活動を充実させる（言語活動そのものの充実、言語活動を客観的に捉え直す）。</p> <p>○情報を整理・分析して、根拠のある自分の考えをもたせる（思考ツール）。</p>	<p>○「問い」の工夫Ⅱについて、効果的な実践例を蓄積していく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・効果的な振り返り、資料等 ・効果的なグループ編成の方法 <p>○探究のプロセスを単元に位置付ける（思考ツールの活用）。</p>
<p>「問い」の工夫Ⅰ，Ⅱ</p> <p>○毎時の振り返りを次のめあて・課題へと繋げるサイクルをつくる。</p> <p>○発問を構造化する（段階的な発問、意図のある発問）。</p>	<p>○目的に応じて、適切な全体での交流や共有の方法を用いる。</p>

来年度に向けて

『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善を、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して行うことが求められる。」と平成 29 年告示学習指導要領解説総則編にあるように、育成すべき資質・能力を明確にし、ゴールイメージをしっかりともって単元を構成することは不可欠である。今年度、このスタートとゴールの間に、「問い」の工夫を位置付けて研究を重ねたが、その有効性、課題が見えてきた。「問い」の工夫Ⅰは全ての教科で有効性が認められ、めあて・課題を学習者に届け、主体的な学びへと繋がった。深い学びに迫る手立て・プロセスとして位置付けた「問い」の工夫Ⅱについては、各教科で試行錯誤し一定の成果が見られたが、より単元を見通して、学習者の反応をイメージしながら、手立てやプロセスを構造的に組み合わせる必要性を感じた。とりわけ、課題の中で特に重要視すべきは、学習者が学び（学習過程、学習状況）をメタ認知し、その後の学習に活かしていけるような振り返りや手立て・プロセスを単元の中に仕組むことである。

令和 3 年度、新学習指導要領の全面実施に伴い、「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力の三つの柱で整理された各教科の目標及び内容の下、指導と評価の一体化を推進する必要がある。この観点から、観点別学習状況の評価の観点も「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「主体的に学習に取り組む態度」の 3 観点到整理された（「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）30 文科初第 1845 号 平成 31 年 3 月 29 日」の一部要約）。そこで、指導者が指導の改善を図るとともに、学習者自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするためにも、来年度は主体的・対話的で深い学びの視点と指導と評価の一体化を意識した「評価に着目した授業づくり」を研究していかなければならない。

同通知に『主体的に学習に取り組む態度』については、各教科等の観点的趣旨に照らし、知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組の中で、自らの学習を調整しようとしているかどうかを含めて評価することとした」とあるが、その具体的な事例を探っていればと考えている。このことは「問い」の工夫と大きく関わっており、今年度の研究を土台として研究をすすめていきたい。

おもな参考文献

文部科学省『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編』

澤井陽介著『教師の学び方』（東洋館出版社）2019

澤井陽介著『授業の見方-「主体的・対話的で深い学び」の授業改善』（東洋館出版社）2017

田村学著『深い学び』（東洋館出版社）2018

田村学著『授業を磨く』（東洋館出版社）2015

奈須正裕著『「資質・能力」と学びのメカニズム』（東洋館出版社）2017

研 究 同 人

森	脇	郷	子	杉	山	志	穂
本	田	英	樹	瀧	澤		圭
佐	藤	秀	典	山	下	由美子	
大	渡	克	教	指	原	健太郎	
石	松	一	彦	佐	藤	優	
青	木	将	悟	田	中	生弥子	
草	場	博	文	牧		功太郎	
恵	藤	美	貴	高	橋	昂 希	
古	中		茜	井	田	由 紀	
吉	住		聡	板	井	涉	
矢	治	朋	恵	Garillon	Mathieu		
丸	田		仁	工	藤	雅 康	
羽	田	野	直樹	白	井	圭 介	
金	岡	博	幸	山	田	直 美	
戸	次		啓	高	畠	妙 子	
添	島	秀	紀				

令和2年3月31日 印刷

令和2年3月31日 発行

発行者 大分大学教育学部附属中学校

代表 森 脇 郷 子

住所 大分市王子新町1番1号

印刷所 有限会社 秀栄社
